月とライカと吸血姫
ノスフェラトゥ
Луна,Лайка и Носферату
牧野圭祐
ill.かれい
GAGAGA

小学館ｅＢｏｏｋｓ

月とライカと吸血姫

牧野圭祐
イラスト　かれい

月とライカと吸血姫
ノスフェラトゥ
Луна, Лайка и Носферату
牧野圭祐
ill. かれい

レフ・レプス
「私はイリナ・ルミネスク。人間は嫌いだから話しかけないで。以上」
イリナ・ルミネスク
ミハイル・ヤシン
ローザ・プレヴィツカヤ
牙を隠そうともせず言い放った。
食堂内は水を打ったように静まり返る。
苦笑いをして取り繕うレフ。

「虹の入り江、
夢の湖、眠りの沼、
嵐の大洋――」
儚い雪の妖精が
湖面に魔法陣を描くような
秘密の神聖な儀式のようで、
レフは時が経つのも、
凍える寒さも忘れ、魅入られる。

「飛べる、絶対に……！」
СССР
レフは両手をかたく握り合わせ、全身全霊で祈る。
大地を引き裂くような地鳴りが耳をつんざく。
煙がもうもうと地面を覆う。
ロケットは胴体を震わせ、ゆっくりと浮かび上がる。

Contents

〈前奏〉 прелюдия …… 12

〈第一章〉 吸血姫と翼竜 …… 18

〈第二章〉 宇宙飛行士への道 …… 82

〈第三章〉 夜間飛行 …… 144

〈間奏〉 интерлюдия …… 208

〈第四章〉 血の契り …… 214

〈第五章〉 神の領域へ …… 268

〈終奏〉 постлюдия …… 290

Луна, Лайка и Носферату

●Cover & Logo design／Junya Arai + Bay Bridge Studio

目次

〈前　奏〉　прелюдия
〈第一章〉　吸血姫と翼竜
〈第二章〉　宇宙飛行士への道
〈第三章〉　夜間飛行
〈間　奏〉　интерлюдия
〈第四章〉　血の契り
〈第五章〉　神の領域へ
〈終　奏〉　постлюдия

あとがき

月とライカと吸血姫（ノスフェラトゥ）

牧野圭祐
ill.かれい

人物紹介 Луна, Лайка и Носферату

■ レフ・レプス …… 21歳。空軍中尉。宇宙飛行士候補生の補欠。

■ イリナ・ルミネスク …… 17歳。吸血鬼の少女。『ノスフェラトゥ計画』の実験台。

■ ミハイル・ヤシン …… 25歳。空軍中尉。宇宙飛行士候補生のエース。

■ ローザ・プレヴィツカヤ …… 22歳。空軍中尉。女性の宇宙飛行士候補生。

■ スラヴァ・コローヴィン …… ロケット開発主任。

■ モジャイスキー博士 …… 動植物実験担当の生体学者。

■ アーニャ・シモニャン …… イリナのデータ採取係。

■ ヴィクトール中将 …… 宇宙飛行士候補生の指導教官。

■ ナタリア …… 共同宿舎の寮母。

■ サガレヴィッチ副長官 …… 訓練センターの副長官。

■ フランツ・フェルツマン …… 熱気室の担当技師。

■ ゲルギエフ第一書記 …… ツィルニトラ共和国連邦の最高指導者・政府首班。

「この物語はフィクションです。登場する人物・団体・名称等は架空であり、実在のものとは関係ありません」

конфиденциальный
旧リリット国
[閉鎖行政領域体]
ライカ44
首都:サングラード
ツィルニトラ共和国連邦
アルビナール宇宙基地
Союз
Цирнитра
Социалистических
Республик

前奏　прелюдия

緋の瞳　Очи　алый

「虹の入り江……」
霧に煙けむる、凍いてつく夜。
雪の積もった古城のバルコニーで、幼い少女が銀色の満月を見上げ、寂しげに囁ささやく。
「夢の湖……」
土つち埃ぼこりで汚れた真紅のロングドレス。
折れそうなほどに細い手足。
白はく磁じのように透きとおった肌。
可か愛わいらしい口に不釣り合いな牙きばが、ちらりと見える。
「眠りの沼……」
古いにしえの歌を詠唱するように、ひとつひとつ、大切に紡つむぐ。
「嵐の大洋……」
漆黒の髪が風でなびき、ツンと尖とがった耳が露あらわになる。
「蒸気の海……」
少女は小さな宝石のついた首飾りを外し、月にかざす。
透明の結晶のなかに、穢けがれなき青い光が煌きらめく。
月にかかるように、碧みどりのオーロラが浮かび上がった。
薄うす紅べにの瞳ひとみが、深こき緋ひを帯おびる。
「……私の想い……」
囁きは夜風に吹かれ、焼け野原となった森へ消えていく。
少女は手を組み合わせ、満月を見つめる。儚い祈りを秘めて。ただ、静かに。

藍の瞳　Очи　индиго

戦闘機の木製模型がいくつも飾られた部屋で、灰色がかった金髪の少年が母に傷の手当てをされている。空に憧あこがれる少年は、木の棒に布を張った自作の翼で屋根から飛び、西洋鎌柄アローニヤの灌かん木ぼくに墜落したのだ。

母は鬼のような形相で、少年を叱しかり飛ばす。

「馬鹿なことするとノスフェラトゥが飛んできて、首筋に噛かみつかれるよ！」

「やめてよ……！」

少年はぶるっと震え、両手で首を包むように隠した。

ノスフェラトゥとは、ツィルニトラ共和国の伝承に登場する恐ろしい吸血種族である。ほかにもウピル、ネラプシ、ストリゴイなど数多くの吸血怪かい異い譚たんがあり、それらの化け物は一部の例外を除き基本的に実在しないのだが、子どもたちはその名を聞くだけで縮ちぢみ上がった。

近くで蒸留酒ジーズニを飲んでいた父も母に便乗する。

「吸血種族なんかに怯おびえてる意気地なしじゃ、パイロットなんて夢のまた夢だな」

「そ、そんなことない！」

「じゃあ飛行中、ノスフェラトゥが飛んできたらどうするんだ？」

「え……」

少年は、大空で怪異と遭遇する景色を想像しただけで、全身の肌が粟あわ立だった。

「ははっ、怖いんだな？」

「怖くない！」

　顔を真っ赤にして少年は反論する。
「毎日ニンニク食べて、十字架の首飾りするから大丈夫さ！　それに、もし変なことしてきたら撃ち落としてやる！」
　父と母は顔を見合わせて笑う。
「なんで笑うんだよ！　くっそー。俺が大人になって月面旅行のパイロットになっても、ふたりは乗せてあげないからね！」
「月旅行なんて、何十年先の話？」
「そういえば、月の裏には吸血種族の巣があるっていう伝説もあったっけな？」
「う、うそだ！　俺が月に行って、そんなのうそだって確かめてやる！」
　少年は窓の外に浮かぶ満月を見上げて、藍あい色いろの瞳ひとみをきらきら輝せた。
「絶対に、行くんだ」

――東歴一九五五年。

全世界を二分した巨大戦争の終結から一〇年が経過し、世の中はようやく落ち着きを取り戻していた。

そのような情勢のなか、ふたつの超大国――東のツィルニトラ共和国連邦と、西のアーナック連合王国は、誰の領土でもない宇宙を狙い、熾烈な競争を繰り広げはじめた。

一九五七年一〇月。

共和国は人類初の人工衛星『パールスヌイⅠ号』の打ち上げに成功。

技術的優位を持っていると思い込んでいた連合王国に『パールスヌイ・ショック』と呼ばれる激震が走る。

さらに共和国は『パールスヌイⅡ号』で、宇宙空間へ『犬』を打ち上げることに成功。一方、焦った連合王国は強引に人工衛星を打ち上げ、発射二秒で大爆発に終わる。

一九五九年九月。

共和国の月探査機が月に到達。国名と国章を刻印した金属球を月面に放った。そして、興奮冷めやらぬ三週間後、未知であった月の裏側の撮影に成功。

連戦連勝に気をよくした共和国の最高指導者ゲルギエフは、連合王国の大統領に向けて誇らかにメッセージを送った。

「月面到達は共和国の勝ち、ハンバーガー作りは連合王国の勝ち」

連合王国の新聞が「生存競争」と名づけた宇宙開発の争点は、『人類史上初の有人宇宙飛行』へと移っていった。

連合王国は『プロジェクト・ヘルメス』を始動。空軍将校から選ばれし七人の飛行士（ヘルメスセブン）が弾道飛行を目指す。

対して、共和国。

一九六〇年九月。

ゲルギエフは、ロケットで人間を軌道上に送り込む『ミエチタ計画』を発令。

「連合王国よりも先に、人類を宇宙へ到達させよ！」

勝者はどちらかひとり。

戦場は、地球を飛び出し、神の領域に達していた――

第一章　吸血姫と翼竜

藍の瞳　Очи　индиго

　レフ・レプス中尉は、時速二〇〇キロで自由落下していた。
　三〇〇〇メートルの上空から飛行機を飛び降り、腹這ばいの姿勢で手足を大の字に広げ、弾力性のある空気の層に乗る。
　ゴーグルが顔に押しつけられる。
　風を切る音。綿のジャケットを冷気が貫く。
　眼下では、先に降下した宇宙飛行士コスモノート候補生たちのパラシュートが開き、広大な平原にクリーム色の花を咲かせている。
　帯のように流れるボリク川が目に入った。
　母なる大地がゆっくりと近づいてくる。
「そろそろだな……」
　パラシュートを開くためのリップコードを、凍える指先で引く。
　背負ったバッグからキャノピーが飛び出し、シルクの傘さん体たいが風を受けて大きく膨ふくらみ、身体からだがグイッと引き上げられる。
「ふぅ……」
　風に揺られながら、レフは呟つぶやく。
「コスモノート、レフ・レプス、ただいま宇宙より帰還しました……！」
　声は誰にも届かず、中空に溶けた。
「──なんつって……」
　こんな冗談、上官に聞かれでもしたら大目玉を食らう。
　レフは顔を引きしめ、パラシュートの紐ひもを握にぎりしめた。

荒涼とした湿地帯を巨大な夕焼けが赤く染める。

パラシュート降下訓練を終えたレフたち宇宙飛行士候補生は、空軍のバスに乗り一路、宇宙開発都市『ライカ44』へと向かっていた。『ミェチタ計画』を進めるうえでの重要拠点となるこの都市は、東歴一九六〇年三月に建設されたばかりの新しい地区で、九〇〇〇人の宇宙開発関係者が住んでいる。

だが、『ライカ44』は国家発行の地図に記載されておらず、住民登録もない。さらに、命名もとになった『ライカ市』は四四キロも南に離れた場所にある炭鉱都市で、両者のあいだにはまったく関係がない。

これは、連合王国の情報収集に対する、政府主導の偽装工作である。

レフたちが暮らす『ライカ44』は、存在そのものが国家機密である〔閉鎖行政領域体〕のひとつだった。住民は守秘義務を課され、市外で業務内容や住所などを口にすることは固く禁じられていた。もし違反すれば、秘密警察である国家保安委員会──通称〔運送屋〕の職員が朝早くに訪ねてきて、鉱山送りになる。

そのため国民の大半は、人工衛星の打ち上げに成功したという事実は知っていても、宇宙開発の内情について知ることはできなかった。

『敵を欺あざむくには、まず味方から』

この徹底した秘密主義が、共和国の伝統的なやり方だった。

秘密のベールに包まれた都市は、たどりつくのもひと苦労だ。上空一帯は飛行禁止区域で、鉄道は通っておらず、車で行くしかない。

平原を貫く幹線道路から脇道に逸それ、『この先行き止まり』『立入禁止区域』などの標識を超え、検問を通過し、針葉樹林を縫ぬって走り、方向感覚が完全になくなった頃、ようやく街を囲む外壁が見えてくる。

外壁に沿って進むと唯一の出入り口があり、そこでは機関銃を背負った警備兵と、不審人物の匂いを嗅かぎつける軍用犬が鋼鉄のゲートを

守っている。
　バスを降りたレフたちは、警備兵に身分証と居住許可証を見せてゲートをくぐった。
「おい、レフ！」
　酒焼けしたしゃがれ声で呼びかけたのは、指導教官であるヴィクトール中将。軍服のボタンがはち切れんばかりの隆々とした筋肉、大戦時の英雄であることを示す大量の勲章と額の傷跡がただならぬ迫力を生んでいる。
「なんでしょうか、同志中将」
　レフが背筋を伸ばして罵ば声せいにそなえると、ヴィクトール中将は眉み間けんに深くしわを寄せ、ぎょろりと睨にらんだ。
「訓練センターの所長室に来い。チーフから直じき々じきに話があるそうだ」
「チ、チーフ、ですか……!?」
　予想外の名前に、レフは、氷柱つららに脊せき髄ずいを貫かれたような衝撃を受けた。
　チーフとは、『パールスヌイI号』を製作した天才、スラヴァ・コローヴィン第一設計局長のことである。この男は『ライカ44』同様、存在していること自体が国家機密という超重要人物であり、本名は一部の関係者以外には明かされていない。連合王国に暗殺されることを警戒した政府が、コローヴィンという人間そのものを隠ぺいしたのだ。どうしても公おおやけに発表しなければならないときは『設計技師長チーフデザイナー』という肩書きのみで呼ばれ、秘ひ匿とくの結果、連合王国からは「東には妖よう術じゆつ師しがいる」と恐れられていた。
　そんな大物から呼び出されたとなれば、ただごとではない。近々、二〇名の候補生をさらに絞るというううわさだったが、それに先立ち、足切りがはじまったのか？

　──などとレフが悪い予感を巡らしていると、ヴィクトール中将が大声を出した。
「所長室だぞ！」
「は、はいっ！」
　ヴィクトール中将はレフの肩を叩たたくと、のしのしと去っていった。
　うろたえるレフの周りに候補生たちが集まり、口々に声をかける。
「今度は何をやらかしたんだよ？」
「ついに補欠からも脱落か……」
「レフ。元気でな」
「待て待て待てっ！　勝手に脱落させるな！」
　悲ひ哀あいの視線をレフは跳ねのけようとするも「じゃあなんで呼ばれたんだ？」と突っ込まれると、返答に窮した。
「……と、とにかく、行ってくる」
　今年の春に宇宙飛行士の候補生として採用されたレフだったが、夏にとある事件を起こしてしまったせいで補欠要員に成り下がっていた。もはや奇跡でも起きない限り『人類史上初の宇宙飛行士』になるのは不可能だった。
「それでも、いつの日か飛べたらいいさ。重要なのは史上初じゃない。宇宙を飛ぶということなんだ」
　と、腐らず前向きなのはレフのいいところだが、状況は厳しかった。

　市内の開発区にある訓練センターはコンクリート造りの武骨な三階建てで、外観からは宇宙の欠片かけらも感じられない。
　レフは不安と恐怖のなか、天球儀が陳列された廊下を進み、所長室の前に立った。重厚な樫の扉の両隣には、黒革のロングコートに国家保安

委員会のバッジが光る〔運送屋〕が控ひかえ、レフの一いつ挙きよーいち動どうを監視している。
「……よしっ」
　レフはネクタイを締め直すと、扉を叩いて名乗る。
「レフ・レプス候補生、参りました！」
　静かに扉を開くと、煙草たばこの煙がもわっと流れ出てくる。
「失礼します！」
　所長室に二歩、三歩と入ると〔運送屋〕のひとりもレフについて入室し、後ろ手に扉を固く閉じた。
　レフは室内で待ち受けていた面々を目まの当たりにし、ごくりと唾つばを呑のんだ。
　腕組みをするヴィクトール中将の隣には、白衣を着た長ちよう身しん痩そう躯くの中年男性──モジャイスキー生体医学研究所主任が控ひかえていた。撫なでつけた黒髪がてらてら光り、きれいに整えられたカイゼル髭ひげがピンと立っている。これまで数々の動植物実験を行い、何匹もの犬を宇宙へ送り込んだ実績を持つ博士だ。
　そして部屋の中央、革張りの肘ひじ掛かけ椅い子すにふんぞり返り、紫し煙えんをくゆらせている壮年の男──コローヴィン。白髪交じりのオールバック。自信に満ちた表情から漲みなぎるエネルギー。文官らしからぬがっしりとした身体からだと分厚い皮ひ膚ふに覆おおわれた手は、冤罪で投獄された鉱山で過酷な肉体労働をしてきた証だ。
　コローヴィンは獲物を狙う熊のような強烈な眼光で、レフを射抜いた。
「半年ぶりだね、私の小さな翼竜ジラントよ」
「はい、同志チーフ」
　レフの背中に、嫌な汗がじっとり滲にじむ。コローヴィンはこの部屋にいる誰よりも身体が小さいが、醸かもし出されるオーラで最も巨大に

見える。
「知ってのとおり、『ミェチタ計画』遂行に向けて、夢ミエチタを叶える製品の開発は急ピッチで進んでいる。なんとしても人類宇宙飛行を成功させ、ハンバーガー野郎どもの鼻っ柱をへし折ってやるつもりだ！」
　コローヴィンの鼻息が荒い。つい先日、初の火星探査機打ち上げが失敗に終わったことで、ゲルギエフ第一書記に成功を強く言い渡されたのかもしれない。そうレフは思ったが、無論口には出さず、黙って話を聞く。

「計画を成功させねばならんのだが、ひとつ大きな問題がある。無重力空間では人間の無事が確認されていない。そうだろう、モジャイスキー博士」

　モジャイスキー博士が髭ひげを指でねじりながら淡々と報告する。

「これまでの動植物打ち上げ実験で、宇宙から無事に生還した犬は何匹もいますが、飛行中に嘔おう吐とするなどの異変が見られました。体調変化を遠隔測定テレメトリーで取得していましたが、犬と人間を同等に扱うのは無理だという結論が出ています」

　コローヴィンは煙草たばこを揉もみ消すと、すっくと立ち上がった。

「このような状況のなか、政府中央委員会から決定が下された。有人宇宙船が打ち上がり、宇宙で軌道に乗った直後、国営放送を通してこの偉業を全世界に大々的に発表せよ、と」

「え……？」

　レフは耳を疑った。

　これまで共和国政府は「我が国の宇宙開発に失敗があってはならない」という考えから、成功事例のみを後日発表してきた。先の火星探査失敗の一件も表に出ないまま秘密裏に処理されている。

　つまり、実験中の開示など、異例中の異例だ。

　レフが戸と惑まどっていると、ヴィクトール中将が口を開く。

「宇宙からの生中継が成功すれば、連合王国の宇宙開発に立ち上がれぬほどの打撃を与え、我らが祖国の勝利が確定する。国家の威信をかけた一大計画なのだよ」

　コローヴィンは拳こぶしを握にぎりしめて振りかざす。

「我々には一〇〇パーセントの成功が求められている！　宇宙滞在時や帰還時、そして帰還後に万が一でも不備があってはならない！　しかし、しかしだ。誰も宇宙に行ったことがない今、どうやって飛行中の無事を証明すればいい？」

不明点は山ほどあった。
未知の領域である宇宙が、人間の脳や身体からだに与える影響は？
犬よりもはるかに高度な機能を持つ人間が、嘔吐だけで済むのか？
『地球を見ること』に精神が耐えられるのか？
死と隣り合わせの恐怖にかられて、異常行動を起こさないか？
無事帰還したとして、重大な後遺症が出ないか？
答えのない様々な疑問が開発現場には渦巻いていた。
コローヴィンが苦虫を噛かみ潰つぶしたような顔になる。
「もし生放送中に搭乗員が異常な行動を取ったり、死ぬようなことがあれば、世界中から非難される。私としても、それは不本意極まりない」
壮大すぎる話に圧倒されるレフに、モジャイスキー博士が唐突に話しかけた。
「レフ君。実験に犬ではなく、猿を使ってはどうだろうと思うんじゃないかね？」
「え、あ……はい」
たしかに、犬より猿のほうが人間に近い。
ところがモジャイスキー博士は不満そうに髭ひげをねじる。
「駄だ目めなんだよ。猿を搭乗キャビンの模型に乗せてみたところ、スイッチを破壊し、身体からだに取りつけたセンサーを引きちぎってしまった。従順で可か愛わいい犬に比べて、奴らは悪知恵が働き、好こう奇き心しんが旺おう盛せいすぎる。言語でのコミュニケーションがとれないのも問題だ」
コローヴィンが冗談めかした大仰な口調で言う。
「宇宙線の影響で、猿が人類にいきなり進化すれば話は別だがね！　同志諸君、見たまえ！　史上初、宇宙人の誕生である！」
微妙なジョークに、その場にいた全員が「はは……」と愛想笑いで誤ご魔ま化かした。

しかし、レフはここまで話を聞いても、呼び出された理由がわからなかった。

候補生落第を通告される雰囲気ではない。

まさか、補欠の自分が、秘密裏に猿代わりになるのだろうか？　世間にはマネキンを飛ばしたなどと偽って……。

レフの心中をコローヴィンは察したのか、身体をグイッとレフに向け、真っ正面から見据えた。

「同志レフ・レプスよ」

「はっ……！」

覚悟を決めるレフ。

するとコローヴィンは、少し間をあけて、言った。

「吸血鬼ノスフエラトウを知っているかな？」

思わぬ質問に、レフは目を瞬またたいた。

「……すみません、今、何と……？」

「吸血鬼、だよ」

「……あ、はい。伝説上の血を吸う怪かい異い……または、リリット国の辺境に住む吸血種族のことですが……」

「うむ。私が言ったのは、後者だ」

共和国の西隣にあるリリット国は、大戦時、敵陣営に侵略されて焦土になり、国家が崩壊。それを共和国が占領し返し、連邦に加盟する形となった。その山奥にあるアニヴァル村でひっそりと暮らしていた吸血鬼一族は、市民のあいだで『呪われし種』という見方が根深く、政府は『統制の方針』として村外へ出ることを禁じた。

そのため、ほとんどの国民は吸血鬼の姿を写真ですら見たことがなく、レフもまた同様であった。子どもの頃にさんざん聞かされた吸血種族の怪かい異い譚たんの印象が強く「夜な夜な生き血を吸う怪物」という残忍なイメージがあった。

しかし。
レフは首をひねる。
なぜ、吸血鬼の話をはじめたのか？
宇宙と無関係の問いかけに、レフの頭はますます混乱していた。
「よく聞きたまえ」
コローヴィンが咳せき払ばらいをした。
「これから君に、極秘の計画を教える」
「は、はい……！」
レフの心臓が早鐘を打つ。
ヴィクトール中将とモジャイスキー博士も、レフに視線を向ける。
そして、嫌な沈黙を破るように、コローヴィンは低く厳しい口ぶりで告げた。
「当局は、人類を打ち上げる前に、吸血鬼を実験体として無重力空間に送り込む『ノスフェラトゥ計画』を決定した」
「……え」
「ミッションコードは『N44』とする」
「……は、はい……」
理解の範はん疇ちゆうを超えてきょとんとするレフに、モジャイスキー博士がつらつらと説明する。
「吸血鬼は、猿よりもはるかに……いや、極めて人間に近い生物である。身体からだの構造だけでなく、血液検査の数値も、人間の平均値と変わらない。実験には適役だ。しかし、生物の分類学上は人間ではないため、宇宙を飛んでも『人類初の偉業』には認定されない」
ヴィクトール中将が深く頷うなずく。
「人類初は、祖国の人民でなければならないからな」
モジャイスキー博士が髭ひげをピンとはじく。
「実験体の打ち上げ予定は、二か月以内。実験内容は犬と同じである。

搭乗するキャビンの安全性の確認、宇宙線や無重力空間が与える影響の測定、そして帰還後の状態変化の調査。もし仮に実験体がどこかの段階で死んでも『なかったこと』にするのは容易である」

　レフの理解がようやく追いついてきた。

　ようするに吸血鬼を人類の身代わりとして宇宙に捧ささぐというわけだ。

　いくらなんでも非人道的ではないかとレフは感じたが、国家の決定事項に意見できるわけがなかった。

　コローヴィンが改めてレフに向き直る。

「君の任務を伝える」

「はい」

「君には、打ち上げまでのあいだ、実験体の監視、および、訓練の付き添い……いわばマネージャーをしてもらいたい」

「え、え、マネージャー……？」

　突拍子もない提案に、レフは目をぱちくりさせた。数々の疑問が湧わき出たが、最も気になったのは、自分が選ばれた理由だった。

「チーフ、発言しても……？」

「許可する」

「なぜ、私が指名されたのでしょうか……？」

「知る必要はない。これは決定事項だ」

「失礼しました」

　余計なことを発言してしまったと後悔するレフに、コローヴィンは決断を迫る。

「コード『Ｎ44』を成功させることは、『ミェチタ計画』達成のための……、人類の夢ミエチタを叶えるための、重要な一歩となる。引き受けてくれるかね？」

　レフは目を伏せ、逡しゆん巡じゆんする。実験体の監視など候補生の

やることではない。補欠に対してお情けで役目を与えたということだろうか。それとも、技術官全員が引き受けるのを拒否したのだろうか。

即座に承諾できない裏には、吸血鬼に対する恐怖心もあった。

レフは度胸満点で怖いもの知らずのパイロットだったが、怪かい異いや幽ゆう霊れいの類たぐいは苦手だった。幼少時、親に脅おどかされ、何度寝小便をしたことか。

だが。

補欠という立場の今、もし断れば今度こそ候補生失格の烙らく印いんを押されるだろう。それどころかパイロットの資格まで剥はく奪だつされ、宇宙への道が永遠に閉ざされる。

それだけは避けたい。

レフは顔を上げ、コローヴィンの視線を真っ正面から受け止める。

「私でよろしければ、喜んで務めさせていただきます」

コローヴィンの口角が満足そうに上がった。

「打ち上げまでのことは、ヴィクトール中将とモジャイスキー博士に任せる。君は彼らから指示されたとおりに業務をこなせばいい」

「承知しました！」

力強く答えたレフの背中を、ヴィクトール中将がバンと叩たたく。

「候補生の皆には、私から伝えておく」

補欠と吸血鬼の組み合わせなど、候補生の中でますます微妙な立場になりそうだ。レフは内心冷や汗をかく。

「それから、レフ。わかっていると思うが、実験体は『モノ』として扱えよ。今回はとくに、つけあがらせてはならん」

「はい」

恐ろしい怪物をそんなふうに扱えるのだろうかと、レフの胸を不安がよぎる。

「ではレフ君、ついてきたまえ」

モジャイスキー博士はコローヴィンに一礼すると、すたすたと扉に向かう。
レフはコローヴィンに敬礼して部屋を出ようとしたところ、「最後に」とコローヴィンに呼び止められた。
「宇宙飛行士の選抜だが、補欠である君が選ばれる可能性は、現時点ではゼロだ」
「はい……」
わかっていたことだが、面と向かって言われるとつらいものがある。
「―だが、私は君の未来に、大いに期待している」
「え……」
コローヴィンは意味ありげに目を細める。
「行きなさい、私の小さな翼竜ジラントよ」
「はっ！」
レフは直立不動の姿勢を取り、再度敬礼した。候補生への復帰があるのではないかと、胸を躍らせて。

夕ゆう闇やみが刻々と色彩を変えるなか、レフはモジャイスキー博士について訓練センターの裏手にある赤松の森を歩く。むせかえるような松まつ脂やにの匂いに鼻が慣れてきた頃、こぢんまりとした病院のような建物にたどりついた。
「この最深部に、実験体がいる」
生体研究所の別棟、実験用動物の生育施設である。市内には候補生でも入れない施設が数多く存在していたが、ここもそのうちのひとつだった。
鉄格子に守られた玄関口で、モジャイスキー博士が門番に身分証を呈示すると、曇り硝がら子すの扉が開かれた。

レフは、これから自分が実験されるかのような緊張を覚えながら、館内へ入った。

リノリウム張りの廊下の壁には、鼠ねずみ色いろの管が太い蛇へびのように這はっている。風通しが悪く、空気がこもっている。どこかから、犬の鳴き声が聞こえてくる。

訓練センターに比べると、陰いん鬱うつな雰囲気だ。

居心ごこ地ちの悪さを感じながらレフは奥へ奥へと進み、動物用の檻おりが並んだ区画を抜けると、六角形の大きな部屋に突き当たった。

各壁面には『I』から『V』までの番号が振られた分厚い鉄の扉があり、中央には『看守所』という札の下げられた箱型の小部屋がある。

異様な光景を目にして、レフの背筋がすーっと冷たくなった。

「なんですか、ここは……」

「人間用の独房だよ」

モジャイスキー博士はさらっと答えた。

「ま、まさか、人体実験をしていたんですか……!?」

「いや。念のために造られただけで、使ったことはない。実験体が初めての入居者だ」

念のためとはいえこんな施設が存在することにレフが身震いしていると、看守所から毛むくじゃらのもふもふした物体がひょこっと出てきた。

「うわ!?」

脱走した獣か、吸血鬼か？

身構えたレフだが、果たしてそれは、毛皮のコートに身をくるんだ人間の少女だった。

レフよりも頭ひとつ小柄な少女はモジャイスキー博士を見ると、パッと顔を明るくした。

「上長！」

「異常はなかったか？」
「はい、静かにしていましたっ！」
　少女は、レフを見るとペコリとお辞儀した。
「はじめまして！」
「こんにちは。博士の娘さん？」
「ちがいますっ！」
　少女はコートの前を開けて白衣を見せると、レフに身分証を突きつけた。
「わたくしは空軍医学研究所所属の研究員です！」
「し、失礼しました！」
　レフは慌あわてて頭を下げた。
　モジャイスキー博士がレフに少女を紹介する。
「アーニャ・シモニャン。専門分野は、吸血鬼の生態研究。まだ一八歳と若いが、有能で優秀だ」
　アーニャはえっへんと胸を張った。
「さてレフ君。実験体は『I』の独房にいる」
　モジャイスキー博士の示した部屋の前に立ったレフは、扉一枚隔てた先にいる怪かい異いの姿を想像する。
　血のような赤い瞳ひとみ。
　首筋に穴をあける大きな牙きば。
　闇やみのタキシードに、血で染まったマント。
　死者のように青白い肌。
「……」
　ぞわり。怖おじ気けが首筋に走る。
　一方、すでに姿を知っているモジャイスキー博士とアーニャは淡々と面会の準備を進める。
「開けてくれたまえ」

「御意」
　アーニャは扉を軽くノックして「入ります」と呼びかけると、いっさいの躊ちゆう躇ちよもなく鍵かぎを回して取っ手を掴つかんだ。
「！」
　レフは、いきなり噛かみつかれるのではないかと焦り、とっさに襟えりを立てて首筋を隠す。
　金属のこすれる重い音がして、扉がゆっくり開かれていく。
　コンクリート剥むき出しの壁に囲まれた、薄暗く寒々しい空間。窓はなく、光源は天井に吊つるされた電燈のみで、奥には洗面台とトイレが据えつけられている。
　その壁際、軍服を着た黒髪の少女が棺かん桶おけに腰かけ、軌道力学の教書を読んでいた。
　アーニャが少女を指さす。
「彼女が、実験体さんです」

「……え？」
　あまりにも想像とかけ離れた姿に、開いた口が塞ふさがらなかった。
　影を身に纏まとったような少女は音もなく立ち上がり、レフを正面から見つめる。
　レフよりも一回り背が低く、肌が雪のように白い。
　髪のあいだから覗のぞく尖とがった耳は、妖精のようだ。
　長いまつ毛に縁どられた意志の強そうな目元に、物憂げな薄うす紅べにの瞳ひとみ。
　筋のとおった鼻の下、薄く小さな口から見える牙きばは、仔猫のそれとさほど変わらない。
　首飾りについている蒼あお色いろ透明の宝石が、電燈の光をきらりと反射する。
「この子が……吸血鬼？」
　人を襲う怪かい異いとは真逆の美しくて非力そうなたたずまいに、レフは少し警戒をゆるめた。
『吸血鬼』というよりも『吸血姫』だ。
　しかし、冷たい顔をしている。見た目は限りなく人間に近いが、近寄りがたい霊的な壁を感じる。
「実験体の名はイリナ・ルミネスクだ」
　目を奪われていたレフの眼前に、モジャイスキー博士が真新しい身分証を差し出した。肩書きに『空軍中尉』とある。
「これは正規の階級ですか？」
「いや。この街で暮らすために、便宜上、与えられているだけだ。ないと不便だからな」
　身分証の内容をくわしく確認する。
　住所は独房ではなく、候補生たちの共同宿舎。年齢は二一歳。
　目の前にいる少女はもっと幼いのではないかとレフは疑ったが、そも

そも偽造された身分証であるし、吸血鬼と人間では年齢の持つ意味は違うのではないかと気づいた。
　レフはとりあえず挨あい拶さつしてみるかと思い立ち、やや首をすくめながら、イリナに一歩近づく。
「君のマネージャー役を拝命した、レフ・レプス中尉だ」
　噛かみつかれるのではないかという恐怖心を押し殺し、笑顔を作って握手を求める。
「……」
　だが、イリナは握手を返そうともせず、まじまじとレフを見つめる。
　その真っすぐな視線にレフはどぎまぎしてしまう。レフに姉妹はおらず、中等学校を卒業してからは軍関係の男ばかりの環境で生活してきたせいで、同年代の女性に対する免めん疫えきがほとんどない。候補生や技術士官のなかにも僅わずかに女性はいるが、どちらかといえば話すのは苦手だった。
「え、えーと、よろしく……」
　イリナの眼力に負けたレフは「ははっ……」と苦笑で誤ご魔ま化かし、行き場をなくした手を引っ込めた。イリナが握手を拒否したことを責める気持ちはない。自由を奪われて、死と隣り合わせの実験をさせられるのだから、友好的に振る舞ってくれるわけがないのだ。
「レフ君、これを」
　モジャイスキー博士が一枚の書類をレフに差し出す。
「コード『N44』を遂行するにあたり、君が守るべき点が四つ書いてある。実験体にも聞こえるように読み上げてくれたまえ」
「承知しました」
　目の前にいる少女を「実験体」と呼ぶことに抵抗を感じながらも、言われたとおり書面の内容を声に出す。
「一、実験飛行の日まで、定められた訓練や検査を滞とどこおりなく遂

行せよ」
　レフが条項を読み上げると、モジャイスキー博士が補足する。
「こなすべき課題は毎日伝える。ちなみに、実験体のサングラードでの試験結果は、君たち候補生に勝るとも劣らない優秀なものだ。また、検査官に噛かみついたなどの事件を起こした報告はないから、安心してくれたまえ」
　イリナを仄ほのかに照らす電燈が、じじじ……と雑音を発している。
「では次」
　レフは書類を確認すると、イリナに向けて言う。
「二、市民に実験体の正体が知られないように、注意を払うこと」
「この生物が吸血鬼だと知っているのは、ごく僅わずか。国家委員会や技術士官を合わせても一〇〇名ほどだ。ほかの人々にとっては『空軍中尉』であることを常に意識するように」
「街を歩くことは、問題ないのですか？」
　当然だとモジャイスキー博士は頷うなずいた。
「実験用に飼育している犬であれ、精神衛生面のケアのために散歩もするし、遊ばせる。それと同じだ」
　博士の発言にどきりとしたレフは、横目でイリナを盗み見た。しかし、犬と同列に扱われた彼女は、まるで自分とは無関係だと言わんばかりに表情が冷めている。
　その態度に違和感を覚えながらも、レフは読み上げを続ける。
「三、逃亡されないように監視せよ。また、逃亡を試みた場合……実験体は処刑する」
　処刑は、脅しではない。陰いん鬱うつな気持ちになったレフに、モジャイスキー博士が冷たい口調でつけたす。
「情報漏ろう洩えいを防ぐための措置だ。もし逃げられた場合には、レフ君にも投獄などの罰ばつが課せられる」

逃げれば問答無用で殺されるだろう。共和国の非情さを知らない恐れのある少女にレフは警告する。
「馬鹿な真ま似ねはよしてくれよ。仮にこの町から脱しても、〔運送屋〕が地の果てまで追いかけるぞ」
イリナは呆あきれたように軽く息を吐き、ちらりと牙きばを覗のぞかせた。
「逃げないわよ」
はじめて聞いたその声は純水のように透きとおっていて、すっと心に染み入るようだった。見た目が人間に似ているだけでなく声も変わらないのだなと、レフは思った。
「レフ君、次を」
モジャイスキー博士に促うながされ、レフは最後の項目を読み上げる。
「四、マネージャーは実験体の隣室で生活をともにする……こと？」
読みながら、スーッと血の気が引いた。
「あ、あの。俺は、ここで暮らすってことですか？」
「そうだ。君がパラシュートで優雅に空を飛んでいるあいだに、運送屋が共同宿舎からII号室へ荷物を移した」
「……」
思わぬ事態に、レフは言葉を失った。
「よかったな。共同宿舎の相部屋から、トイレつきの個室に格上げだぞ」
「いえ、その……」
「安心したまえ。君の部屋には棺かん桶おけではなく人間用の寝台が置いてある。ちなみにシャワー室はV号室だ」
モジャイスキー博士は有無を言わさぬ勢いでレフの手を取ると、鍵かぎ束たばを握にぎらせた。

「はは……」
　笑うしかなかった。コローヴィンの申し出を断っていたら、本当に『ライカ44』からお別れだったのだろう。
「ではレフ君。私の役目はこれで終わりだ。あとはアーニャに託した」
　モジャイスキー博士は言うや否いなや踵きびすを返した。
「え、博士……終わりって？」
　焦るレフに、モジャイスキー博士は顔だけ振り向いて答える。
「私には『ミェチタ計画』本筋の業務がある。犬や植物の打ち上げ実験は継続されるからな。では良い夢を」
　モジャイスキー博士は髭ひげをピンとはじくと、風のように去って行った。
　アーニャがトコトコッとレフの前に来る。
「安心してください。わたくしは博士のお墨つきですから！」
　見た目が幼くて頼りないのだが、頼れるのはアーニャしかいなかった。
「よろしく、アーニャ。いきなり任命されて、わからないことばかりなんだ」
「わたくしに与えられた役目は、医学的なデータの採取と数値のチェックだけです。普段は研究室にこもっておりますので、訓練への同行や日常生活についてはレフさんにお任せします」
　つまりふたりで行動することになる。大丈夫だろうかとレフは首の後ろを掻かいた。
「それでは、話を進めます！　イリニャンさんには―」
「ちょっと」
　イリナが鋭するどい声でアーニャを制した。
「なんですか？」
「イリニャンって、なに？」

「親しみを込めてみました」
　アーニャはしれっと答えた。
「込めなくていい」
　ばっさり斬きり捨てられたアーニャは、くるりとレフを見て。
「レフさんもイリニャンって呼びませんか？」
　断られたばかりで、どうして同意を求めるのか？　戸と惑まどうレフに、イリナはじっとりとした視線を向けている。
「えーと……」
　イリニャンという呼称はともかく、町の中で「実験体」と呼ぶわけにはいかない。肩書き付きで同僚を呼ぶこともないので「ルミネスク中尉」も違う。
　レフはあれこれ考えたすえ、反論されるのを覚悟でイリナに告げる。
「市民に正体を疑われないようにするためには、ほかの候補生と同じように接するべきだと思う。だから、これから君のことは、名前で『イリナ』と呼ぶ。俺のことは『レフ』と呼んでくれ」
　イリナは無言でレフを凝視する。
　電燈に照らされた瞳ひとみが神秘的な緋ひ色いろを帯おびる。その人知を超えた美しさに、レフは首筋がぞくっとなる。
　息が詰まり、身体からだが硬直する。
「あ、あの……」
「イリナでいいわ」
　その一言で呪じゆ縛ばくが解け、レフはホッと息をついたが──
「本来ならばただの人間ごときに呼び捨ては許さないけど、仕方ないわね」
「え……」
　極めて高圧的な態度に、再び息を呑のんだ。
　だが、それが許されるような気風がある。軍服ではなく煌きらびやか

なドレスを纏まとえば、たちまち王族や貴族に様変わりしそうだ。第一印象で感じた『姫』というのも、あながち間違いではない。
「あなたのことは、レフと呼べばいいのね」
「ああ。イリナ」
　アーニャがぴょこんとあいだに割って入ってくる。
「よろしくです、イリニャンさん！」
　空気を読まなすぎる発言に、これまで一貫して硬い顔つきだったイリナも、ぽかんと口を開いた。
「……あ、あなた……？」
「わたくしは候補生ではありませんので関係ないですし。わたくしのことは、アーニャと呼んでくださいね♪」
　あまりのマイペースさに言い返す気力も失せたのか、イリナは肩をすくめた。
「好きにしなさい……」
「御意っ」
　アーニャは満足そうに頷うなずくと、一転、ピシッとした研究者の顔になった。
「イリニャンさんには基本的に候補生と同じ訓練をしていただきますが、太陽に弱いため、時間帯は日没後になります」
「間違って日光に当たっても、大丈夫なのか？」
　レフがよく知る伝承では灰になったりと、弱点のひとつだった。
「肌がヒリヒリする程度のようです。イリニャンさん、肌を隠して日傘をさせば、昼間に出歩いても問題ないのですよね？」
「そうよ」
　確認されたイリナは、訊きかれたこと自体が気に食わないような、どこか棘とげのある声で答えた。だが空気を読まないアーニャは、得意げに補足していく。

「ほかには暑さにも弱くて、人間で言うところの熱中症や日射病のような症状が出やすいようです。つまり、搭乗員が高温にさらされる可能性のある大気圏突入時の危険度が増すのですが、イリニャンさんが耐えられれば人間も耐えられるというわけです」
「なるほど……」
　レフは納得したものの、本人を目の前にして実験云うんぬん言うのはやはり忍びない。犬と違って、言っている意味を理解できるのだから。
　するとイリナは不服そうに鼻を鳴らした。
「アーニャ。私たちの一族は、人間より優れている点もある。専門家を称するならば知っているでしょう？」
「もちろんです！」
　アーニャはレフに向けて指を二本立てた。
「吸血鬼さんには、ふたつの特性があります。暗くら闇やみでも視界を確保できる『暗視能力』と氷点下でも薄着で平気な『耐寒性』です」
　大陸北部では日照時間が短く、冬が長いので、生活環境に合っているのだとアーニャは付け加えた。
「レフ。わかったわね」
　強い口調と誇らしげな視線。吸血鬼は人間と同等かそれ以上の存在だという意思表示のようにレフは感じた。
「ではレフさん。イリニャンさんを食事に連れていってください。場所は共同宿舎の食堂です。候補生の皆さんが集まっているはずですから、紹介してください」
「食事って―」
　吸血鬼というくらいだから血を飲むのだろうかとレフは想像し、イリナの口元に目をやった。だが口は閉じられており、牙きばは見えない。
「なによ」

「いや……」
　見み咎とがめられたレフはアーニャに視線を逸そらした。
「俺が食事を準備するわけじゃないよな？」
「はい。候補生の皆さんと同じ献こん立だてです。データ採取のためには同じ食生活をしてもらわねばなりませんので」
「そっか」
　ホッと胸をなでおろしたレフの前に、イリナがずいっと歩み寄った。
「血だと思ったんでしょ」
「えっ!?」
　図星を突かれ、顔に焦りが出た。
「あなたは私をなんだと思っているの」
　静かながらも怒気をはらんだ声に気け圧おされるレフ。
「な、なにって……？」
　イリナの口が歪ゆがみ、牙が顔を覗のぞかせる。
「私のことを、蚊や壁だ蝨にみたいな下等吸血生物だと思っているんでしょ」
「思ってない思ってない！」
「夜な夜な血を吸う怪かい異いだと思ってるのね」
「誤解だ！　っていうかそんな質問をするってことは、血を吸ったことないのか？」
「え……それは……」
　きまりが悪そうにイリナは口に手を当てた。その意外な反応にレフはあっとなる。
「まさか、ないの？」
「……あるわよ……昔……」
　言葉を濁にごらせてイリナが目を伏すと、アーニャが得意げに挙手した。

「あれですね？　古いにしえより伝わる通過儀礼で、一〇歳の誕生日に山や羊ぎの首にかぶりつくやつ」
「っ……」
　イリナはアーニャをじろっと睨にらみつけると、まるで恥じているような口ぶりでレフに言う。
「しかたなくよ。生き血を吸ったのは、その一度だけ。私だけじゃなくて、ほかの皆もそう」
「吸血鬼って名のわりには、全然なんだな……？」
　アーニャが学者の顔つきで口を挟はさむ。
「謂いわれには理由があるのです。吸血鬼さんは血を粘膜から直接接種が可能で……たとえば舌下や胃から採って体内で栄養素に転化できるのです。ねえイリニャンさん、山羊の血を飲んだとき、活力が漲みなぎったのではないですか？」
　イリナは不ふ承しよう不ぶ承しよう頷うなずく。
「たしかにそうだけど……でも、人間が思っているような馬鹿馬鹿しい怪かい異いじゃないから」
「じゃあ、伝承みたいに人間に噛かみつくなんてことは、ありえない？」
　レフが尋たずねると、イリナは蔑さげすむような目をした。
「当たり前でしょ。人間の血なんて体内に入れたら、私の血が穢れるわ」
　怪異扱いされるのが許せないという思いと同時に、人間に対する軽けい蔑べつや敵意が伝わってくる。その感情をぶつけられたレフは、ただ申し訳ない気持ちになった。吸血鬼を辺境に追いやり、戦争に巻き込んだのが人間であることは間違いなかったからだ。レフが吸血鬼の怪談で脅おどかされていたように、彼女もまた、人間が蛮族だという話を子守歌に育ったのかもしれない。

しかし、宇宙開発の場において過去は関係なかった。訓練をしていくにあたり、どういうふうに接したらいいのだろうとレフは悩む。

異種族で、実験体の女の子。

宇宙の神秘と同じくらい未知の存在だ。

「……」

いろいろ考えても答えは出そうにない。

宇宙へ行くという夢を叶えるために、与えられた任務をこなすだけだ。

──レフは決意を新たに、できるかぎり明るくイリナに呼びかける。

「さーて、腹も減ったし、そろそろ食事に行こうか」

「いいわよ」

反抗されるかと身構えたレフだったが、思いのほかイリナは素直に受け入れ、棺かん桶おけの脇に置いてあった耳あてつきの制帽を被かぶった。

尖とがった耳は隠れ、よりいっそう人間の外見に近くなる。

「アーニャは、いっしょに行かないのか？」

レフが誘うと、アーニャは首を横に振った。

「わたくしは別行動です。食事が終わったら戻ってきてください。イリニャンさんはサングラードからの移動でお疲れでしょうし、レフさんは明日から朝の九時に就寝して一七時に起床する昼夜逆転生活となりますので、食後はじっくり休んで体調を整えていただきます。それでは、お気をつけていってらっしゃいませっ！」

アーニャに元気よく見送られ、ふたりは独房をあとにした。

太陽は沈み、壁に囲まれた町は紫色の薄はく明めいに溶けてゆく。レフとイリナは松まつ脂やにの香る林を抜け、街燈の灯ともった白樺の並

木道へ出た。
「逃げないとは思うけど、俺のすぐ横を歩いてくれ」
　やや距離を置いて歩こうとするイリナにレフは命じる。犬のように首輪をつけるわけにはいかないし、目の届く範囲においておかねばならない。
「逃げないけど、人間の後ろは歩きたくないし、隣を歩いてあげるわ」
　すがすがしいほどの刺とげ々とげしさ。だが、朗ほがらかに応対されたら裏がありそうで怖いし、素直な気持ちを見せてくれているほうがマシだった。
　すれちがった住人がイリナを振り返り、煙草たばこ屋の老人が眼鏡めがねをかけ直した。その表情は恐れではなく、恍こう惚こつとしたものだ。吸血鬼と悟られたのではなく、美しさに惹ひかれている。もし彼らが少女の正体を知ったら、どのような反応が返ってくるだろうか。
　落ち着かない状況のなか、居住区にある共同宿舎へ向かう。
　市内は開発区と居住区のふたつに分かれており、候補生が日常を送る開発区は町の外周にあった。
　訓練センターのほか、特殊訓練施設、技術者の勤つとめる各研究所など大小さまざまな建物が点在し、町はずれには監視塔の役割も兼かねた高さ八〇メートルのパラシュート訓練設備がそびえていた。
　開発区に囲まれるように居住区があり、画一的な集合住宅を囲むように、学校、病院、図書館や市場、飲食店などが建ち並んでいる。
　厳しい守秘義務を「鞭むち」とするならば「飴あめ」もしっかり用意されており、一般的には普及していないテレビや洗濯機、冷蔵庫も手に入った。都市の規模のわりには劇場やフットボール場などの余暇施設も豊富で、町の片隅にある人工湖では氷が張ればスケートもできる。また、連合王国に存在を嗅かぎつけられたときに備え、核シェルターも完備されていた。

　レフとイリナは言葉も交わさずに歩き、居住区に入った。家々の上に、教会の尖せん塔とうが見える。玉ねぎ型の青い屋根に黄金の十字架が立っており、荘厳な姿は町のなかでひときわ目立っている。
「あっ……」
　レフは、ふと大事なことに気づき、足を止めた。
「なに？」
　怪け訝げんな顔をするイリナに、レフは言いにくそうに伝える。
「宿舎に行くには教会の前を通らないと、すごく遠回りになるんだけど……」
　言い終わる前に、冷ややかな視線を投げつけられた。
「私が、十字架が苦手だと思って心配してるの？」
　吸血に続いて、また地雷を踏んだかと焦るレフ。
「もしかして、苦手じゃない……？」
　イリナは深く頷うなずいた。
「遥はるか昔、教会が権威づけのために、あらぬうわさを広めただけ」
「平気ってことか……」
「まったく……」
　言うや否いなや、イリナはいきなりレフの懐に飛び込み、鋭するどい上目遣いで睨にらむとぺろりと牙きばをひと舐なめした。
「っ!?」
　腰がひけた。コローヴィンの威圧的なオーラとはまた違う、身体からだの内側から寒くなるような凄すごみがある。
「レフ」
「な、なんだ……」
　黄昏たそがれの光を受けて朱しゆに染まった瞳ひとみで見つめられると身動きが取れなくなる。
「この先、いちいち否定するのが面倒。だから、まずは、吸血鬼につい

てあなたの知ってること、洗いざらい教えなさい」
　吐息がかかるほど顔を近づけられ、頭が真っ白になってどぎまぎする。
「わ、わかった……！　わかったから、ちょっと離れて……」
「なにをそんなに怯おびえているの。噛かみついたりしないわよ」
　そういう面での動揺ではなく、畏い怖ふを感じるほど美しい異性に接近されて焦っているのだが、イリナはそのことをわかっていないようだった。
「ち、近いって……！」
　身体が熱くなり、頬ほおが赤くなっているのではないかとレフは気が気ではなかった。
「わかったわよ。離れればいいんでしょ」
　イリナは一歩下がると腕を組み、顎あごを上にあげた。
「さあ、言って」
「ん、ああ……。知ってることだろ、えーと……」
　動揺の余波が残るレフは気を落ち着かせ、記憶の底から真偽不明な吸血鬼伝承を引っ張り上げる。
「牙きばで首筋に噛かみつき、鋭するどい棘とげのついた舌で血を吸いとる」
「棘……？」
　イリナはベーッと舌を出した。
　棘なんてない、桃色のきれいな舌だ。
「誤解でした……」
「次は？」
「……血を吸って眷けん属ぞくを増やす……なんてこともない？」
「ありえない。次」
「他人の家には『入っていいよ』と言われないと、入れない」

「あなたは勝手に入るの？」
「……いや、入らない」
　イリナはあきらかに不機嫌そうに口元をゆがめる。
「ほかには？」
「……雑穀や種がたくさん落ちてると、数えたくなってしまう」
「どうして数えるわけ？」
「さあ……」
「次」
「ニンニクが苦手」
「臭いだけ」
　地雷を踏みまくりで、いたたまれない気持ちになる。だが、今後失言をしないためにも正誤はっきりさせるべきだ。
　レフは折れそうになりながらも続ける。
「変身能力。コウモリや狼おおかみ、霧に姿を変える」
「馬鹿にしてるの？」
「心臓に杭を突き刺して、首を切り落とさないと死なない」
「馬鹿じゃないの。どちらか片方でじゅうぶん死ぬわよ……」
　これまでになかったほどにイリナの表情がはっきりと曇り、レフは無神経だったかと少し後悔した。
「……そうだよな。悪い」
「人間って、最低。永遠の命とか不死者とか、そんな創りごと……」
「ん……？」
　イリナはレフから顔を逸そらすと、星の瞬またたきはじめた夜空を見上げて、独り言のようにつぶやく。
「……ふつうに生まれて、ふつうに死んでいくのに……」
　レフがイリナの前に回り込むと、薄うす紅べに色いろの瞳ひとみが、哀しげに揺れていた。

「今、なんて言った？」
　聞き取れずに尋たずねたものの、イリナは首を横に振る。
「なんでもない。とにかく、怪け我がをすれば痛いし、病気にも罹かかるのよ」
　何かあるのではないかとレフはひっかかったが──
「次」
　有無を言わさぬ強さで促うながされたので、追及するのをやめて、地雷踏みを再開する。
「流れる水や海が怖い」
「怖くない」
「銀でダメージを受ける」
「銀の食器を使ってた」
「鏡に映ら──」
「映る」
「影がない」
「あなたの目は節穴？」
　イリナは足元を指した。街燈に照らされて、影ができている。
「あ……」
「はぁ……」
　イリナはうんざりと溜ため息いきを漏もらした。
「本当にすまない。伝承を疑わずに信じていた俺が馬鹿だった。これからは気をつける」
　レフは深々と頭を下げた。
　するとイリナの拍ひよう子し抜けしたような声が聞こえてきた。
「……人間のくせに、素直で、腰が低いのね」
「え？」
　レフが顔を上げると、イリナは意外だという表情をしている。

「いや、だって、俺が誤解していたわけだし」
「そうだけど、誤解のもとを作ったのは、あなたじゃないでしょ」
　イリナは教会の十字架を見上げた。
「一六世紀に黒死病が大流行したとき、教会の人間は私たちを感染源扱いした。標的を作れば、神への批判をそらすことができるから」
　吸血鬼伝承の多くはその時代に生まれたと言われ、『呪われし種』として残酷な吸血鬼狩りが行われたのも病の流行に端たんを発していた。
　イリナは十字架から視線を外し、レフを見る。
「数々の馬鹿馬鹿しい『特性』は、教会が広めたうわさと、それをもとにした小説や映画が原因。だから、あなただけがことさらに悪いわけじゃない」
　個人的な失言を許してもらったとはいえ、人間の犯した過ちを突きつけられてレフは胸が痛んだ。憐あわれみの目でイリナを見ると、吸血鬼の少女はその視線を跳ねのけるかのように前を向いた。
「食堂へ案内して」
　教会前の石畳の広場に差しかかると、ちょうど夕べの祈りを捧ささげる時間で、教会の中からパイプオルガンによる聖歌の演奏が漏もれ聞こえている。広場を通り過ぎるあいだ、イリナは息もしたくないというような面おも持もちで口を固く閉ざした。鳩の群れがパンくずを啄ついばむ平和な日常がそこにはあるが、イリナにとっては許しがたい空間なのかもしれないとレフは思い、足を速めた。
　広場を抜けたとき、押し黙っていたイリナが不思議そうに道の脇を指さした。
「あれはなに？」
　芝地の一角に、真紅の麝香撫子カーネーシヨンに囲まれたロケット型の彫像が建っている。胴体に開いた小窓には、小型犬の銅像が安置されていた。

「パールスヌイと書いてあるけど、記念碑？」
「あれは……」
　イリナに問われたレフは一瞬言葉に詰まったが、隠してもしょうがないと真実を告げる。
「宇宙へ飛んだ犬たちの、墓ぼ碑ひだよ」
　成功は公表するが失敗は隠すというのが共和国の通例であり、つまり、公表されている数よりも多くの犬が打ち上げられ、犠牲になっていた。
　たとえば一九五七年、共和国は『パールスヌイII号』で実験犬・マールイの打ち上げに成功し、宇宙を旅したと発表した。だが、じつのところ、大気圏を突破したときにはマールイは息も絶え絶えの状態だった。遮熱シールドも冷却装置も働かずにキャビン内が高温になり、間もなく熱死した。
　その事実を知っているのは宇宙開発にかかわる一部の人間だけであり、山奥で暮らしていたイリナが知る由よしもない。
　翳かげりのある眼まな差ざしで墓碑を見つめていたイリナは、碑に向かって歩き出した。そして碑の前に立つと、胸に手を当てて一礼する。
　レフは、祈りを捧げるイリナの背を見て、この少女も犬のように死ぬ運命にあるのだろうかという暗い予感が胸に湧わいた。
「……いや。この子だけじゃない……」
　レフはかぶりを振り、ぽそっとつぶやく。
「俺たちだって、命がけだ……」
　有人飛行計画には何千、何万という技術者たちの汗や涙が詰まっているのだが、開発は失敗の連続だった。
　レフが補欠になる前、候補生全員でロケット発射場へ行き、犬の打ち上げを見学したことがある。遥はるか宇宙へ飛び立つ姿が見られると期待に胸を膨ふくらませていたのだが、ロケットは発射直後に爆発し、す

べて粉々に吹き飛んだ。地じ獄ごくを目まの当たりにしたレフたちは心が砕けるような衝撃を受け、しばらくは食事が喉のどを通らなかった。

壮大な夢を思い描くことはできても科学技術が追いつかず、成功をつかむのは困難を極めた。もし大気圏を抜けて宇宙空間に到達しても、軌道を外れれば闇やみの果てへ飛ばされ、大気圏再突入時には火の玉になって燃え尽きることもある。

事実、実験の成功率は五割を切っていた。

その危険を承知のうえで、レフたちは訓練を続けているのだ。そして今、目の前にいる少女が、安全性を高めるための実験体として町へ連れてこられた。

「……でも、なんでこの子が選ばれたんだ？」

ふと、疑問が口を突いて出た。吸血鬼の個体数が少なく、ほかに検査を通過した者がいなかったのだろうか？

レフはイリナに尋たずねようとして、思いとどまった。

『実験体はモノとして扱うべきである』

所長室でヴィクトール中将の口にしたこの非情な考え方が、皆の共通認識となっていた。

だが、これは冷血だからではない。

むしろその逆で、マールイの死から学んだ教訓だった。

実験犬として拾われてきたマールイはころころとして愛らしく、開発関係者たちから可か愛わいがられていた。そして数か月後『パールスヌイII号』の打ち上げを迎えたとき、技術官たちは別れがつらくて涙を流した。当時の技術での生還は不可能だとわかっていたのだ。担当者だったモジャイスキー博士は打ち上げ直前までマールイに水を飲ませるなどして、最後の最後まで別れを惜しんでいた。

結果、マールイは無残な死を遂げ、コローヴィンもゲルギエフ第一書記までも悲しんだ。

その一件以来、実験体は『同志』ではなく、『モノ』として一線を引くことになった。

レフは思った。

やはり、犬同様にイリナを『モノ』として扱うべきなのかと。

「……いや、無理にそうすることはない」

しばらく考えを巡らせ、そのような結論に達した。『モノ』扱いするのは、悲しみを避けて士気を維持することが第一目的だった。

一方、今回マネージャーとしてレフに与えられた役目は『実験体を訓練に滞とどこおりなく参加させ、無事に宇宙へ送り出すこと』だ。イリナは犬と違って会話ができるうえに、人間に対して悪印象を抱いている。つまり、邪険に扱えばますます敵対視される恐れがあり、その結果、訓練を拒絶されたり逃走を企てられたりしたら最悪だ。優しく扱ってつけあがらせるのは言語道断だが、最低限の関係性は築くべきだろう。

それで、もし打ち上げが失敗してしまったら、悲しみを自分ひとりで呑のみ込めばいい。

それだけのことだ。

きちんと線引きをして、必要以上に根掘り葉掘り訊きかなければいい。

そう心に決めたレフがイリナに目を向けると、祈りを終えて夜空を見上げていた。彼女がどのような表情をしているのかは、レフの立つ場所から見ることはできなかった。

諸作業を終えたコローヴィンは〔運送屋〕を率いて、訓練センターの裏手に停められた黒塗りの専用車に向かっていた。この男は『ライカ44』に常駐しているわけではなく各地を回り、政府の会合に出席するな

ど忙しく動いている。
「チーフ。なぜレフを選んだのですか？」
　見送りに付き添っていたヴィクトール中将が疑問を投げかけた。
「決定事項だよ」
　適当にあしらおうとするコローヴィンに、ヴィクトール中将は眉み間けんのしわを深めて詰める。
「レフの殴なぐった相手が、憎きグラウディン局長の息子だったので、彼に汚名返上の機会を与えたのですか？」
　レフが補欠に転落するきっかけとなった事件の背後には、ロケットエンジン主任設計者ボリス・グラウディン第四設計局長の影があった。
　宇宙開発の二大巨頭である彼らのあいだには、ただならぬ因縁がある。
　遡さかのぼること二〇年、野心に燃えるグラウディン局長はコローヴィンの才覚を妬ねたみ、国家批判の発言をねつ造する罠わなに嵌はめて、無実の彼を鉱山送りにした。
　そして時が経ち、コローヴィンは現場に戻ってきたものの、グラウディン局長が罪に問われることはなかった。もしグラウディン局長を投獄すればエンジン開発が止まってしまうため、国家の都合で「なかったこと」にされた。その息子も権力を持ち、『ライカ44』の技術開発部長として半年ほど在籍していたのだが、横暴の限りを尽くしていた。
　つまり、コローヴィンの心情を考えれば、ヴィクトール中将の指摘は頷うなずけることであった。
「チーフ。私情を挟はさんでおられませんか。上官への暴力はいかなる理由があろうと、軍の服務規律違反です」
　コローヴィンが返事をせずに煙草たばこを取り出すと、ヴィクトール中将の胸筋がぴくぴくと苛いら立だつ。
「チーフ！」

「……今年の六月。候補生たちを集めて、宇宙飛行士が搭乗する『ミェチタ』のキャビンを初めて見せたときのことだ」
「はい？」
　コローヴィンは遠い目をして煙草たばこを指で挟はさむ。
「レフ君はね、キャビンに試乗するとき、帽子を脱いで一礼し、靴くつまで脱いだ。これまで数多くの軍人や技術官と接してきたが、我が子に対して敬意を表したのは彼だけだった。そんな彼にとっては、人種や国境、種族の違いなど、些さ細さいなことかもしれんよ」
「それで、レフを？」
「これからの時代は、地球をひとつと考えることが大事なのではないかね」
　コローヴィンは煙草を深く吸い込み、遥はるかな宇宙へ想いをはせるように味わった。
「……とはいえ、悪党どもに、可か愛わいい翼竜ジラントの翼が折られねばいいが……」
　ヴィクトール中将が声を潜める。
「何か不穏な動きでも？」
「いや……だが、警戒するに越したことはない」
　共和国の宇宙開発には、大きな問題点がひとつあった。航空宇宙局のような専門機関が存在せず、国家委員会の下で各設計局長たちが実績を競い合っていたのだ。候補生や科学者たちが夢やロマンを純粋に追う一方で、栄誉をつかもうとする魑ち魅み魍もう魎りようが蠢うごめき、伏魔殿の様相を呈ていしていた。
　本当の敵は連合王国ではなく、国家の内部に存在する。
「監視の目を怠おこたらぬように」
　コローヴィンは渋しぶい顔つきで片かた眉まゆを上げ、傍かたわらに控ひかえた〔運送屋〕に視線を向けた。

　共同宿舎の一階にある食堂では、食事を終えた候補生たちが『実験体』について雑談を交わしていた。
「いきなり噛かみつかれたりしないよな……？」
「レフのやつ、今頃吸血鬼になってるんじゃないか？」
　皆が皆、幼心に刷り込まれた怪奇伝承を口々に言い、厨ちゆう房ぼうから調達したニンニクを傍そばに置く者もいる。
　その会話の中心には、宇宙飛行士最右翼といわれるふたりの候補生がいた。
　ひとりは、ミハイル・ヤシン候補生。成績筆頭で家柄も良いという完璧な麗うるわしの美青年。
　もうひとりは『サングラードの白しろ薔ば薇ら』と呼ばれた女性エースパイロット、ローザ・プレヴィツカヤ候補生。薔薇のように気品が高く、候補生でなければ女優かモデルをやっていそうな容姿だ。
　ふたりは候補生たちからも一目置かれ、周りにはいつも自然に人が集まっていた。
「なあミハイル、どう思う？」
「さあな。なるようになるだろう」
　問われたミハイルは軽く受け流し、ローザも積極的に会話に参加するわけではなく、それぞれ思うところがあるような顔で冷静に耳を傾けていた。
「──ここが食堂だ」
　扉が開いてレフとイリナが現れると、候補生たちは雑談を止め、いっせいにふたりに注目した。
　だが、皆は首を傾げた。
「おい、レフ。実験体を連れてくるんじゃなかったのか？」

問われたレフは、隣でつんとすましているイリナを指す。
「この子だよ」
「……え？」
「この子」
候補生たちは狐きつねにつままれたような顔をした。想像していた『恐ろしい吸血鬼』とあまりにも違ったのだ。
「……人間みたいだけど……？」「肌とか目は、吸血鬼っぽいような……？」「牙きばは？」
イリナは衆しゆう目もくを集めるなか、表情ひとつ変えずに、候補生ひとりひとりを観察するように見返す。
好奇の目を向ける者。
美しさに見み惚とれる者。
怯おびえて目を逸そらす者。
様々な反応を示す候補生たちのなかで、ミハイルは真っ正面から視線を合わせ、ローザは嫌悪感を露あらわに口元をゆがめた。
「イリナ、自己紹介しなよ」
レフの指示に困惑を浮かべるイリナ。
「自己紹介……？」
「ほら、帽子をとって。見せるものは今見せたほうがいい」
レフに促うながされ、イリナは渋しぶりながらも耳あてつきの帽子を脱いだ。
黒髪のあいだから、尖とがった耳が顔を出す。
「私はイリナ・ルミネスク」
ざわつきを一いつ閃せんするように、イリナの冷たい声が響く。
「人間は嫌いだから話しかけないで。以上」
牙を隠そうともせず言い放った。食堂内は水を打ったように静まり返る。

　苦笑いをして取り繕つくろうレフ。
「ははっ、こんな感じだから……よろしく。じゃあイリナ、こっちへ――」
「まさかここで血を吸うつもり？」
　配膳カウンターへ向かおうとしたとき、ローザが静寂を破った。
　イリナの頬ほおがひきつる。
「あなた、今なんて」
「待て待て！」
　レフは慌あわててあいだに入り、ローザに向けて「違う」と手を振る。
「食事は俺たちと同じ献こん立だてだ。ヴィクトール中将から何も聞いてないのか？」
　ローザは両手を広げて肩をすくめた。
「吸血鬼が来るということだけ。実験体については必要以上に知らなくていいと言われたわ」
　たしかに、イリナについてくわしくなる必要はない。計画上は、イリナは実験データを提供してくれる犬と同じ扱いなのだから。
　だがしかし、このままでは吸血鬼に対する誤解を抱えたままということになる。それに、候補生たちからすれば正体不明の怪かい異いがうろついているのは落ち着かないだろうし、今のようなやり取りが繰り返されるのは煩わずらわしい。
　そこでレフは自己判断で、最低限の情報を教えることにした。
「皆、ちょっと聞いてくれ――」
　十字架が平気なことなど、ついさっき知った真実を伝えていく。すると候補生たちは『恐ろしい吸血鬼像』をひっくり返されたようで、何度も首をひねり、興味深そうに顔を見合わせ、感嘆の溜ため息いきを漏もらした。

「ようするに、基本的には俺たちと変わらない。もし居住区で会ったときに警戒されると市民に正体を疑われてしまうから、ごくふつうに接してほしい」
　候補生の大半は納得したように頷うなずいたが、ローザは不満げに顎あごに指先を当てた。
「ふつうと言われても―」
　ローザのこぼした愚ぐ痴ちをかき消すように、大きな拍手が響いた。
　ずっと静観していたミハイルが立ち上がり、イリナへ歓迎の拍手を送っている。
「ようこそ、宇宙開発の最前線へ」
「なに……」
　突然の歓待に戸と惑まどいを見せるイリナ。だがレフは、彼らしいと納得する。人の目の惹ひきつけ方というのをミハイルは心得ていた。自分に自信がなければできない芝居じみた行動であり、良くも悪くも感心する面だった。
　ミハイルが皆を振り向き、微笑を浮かべる。
「彼女は我々のために身を投じてくれるんだ。乾杯し、歓迎しようじゃないか」
　その言い方にレフは不快感を抱いた。たしかに実験体というのは「身を投じる」ものだが、言葉に優しさがない。
　とはいえ『モノ』扱いするという意味では模範的だ。ミハイルの物言いがマネージャーとしては正解なのだろうが、隣でげんなりしているイリナを見ると、レフは改めて自分には冷酷な態度は取れそうにないと思った。最低限のこととして、機密にかかわるような余計なことをしゃべらず、候補生と実験体という境界線を越えないように気を配れば問題ないだろう。
　ミハイルは髪をかきあげ、配膳カウンターを指す。

「レフ、食事をとってこいよ」
「ああ……」
　歩き出そうとして、レフは、ローザが険しい目でイリナを睨にらみ続けていることに気づいた。その感情は、吸血鬼への嫌悪なのか、イリナの美び貌ぼうに対する嫉しつ妬となのか、それとも両方なのか、レフにはわからなかった。

　配膳カウンターへ行くと、寮母のナタリアがイリナを柔らかい笑顔で迎えた。
「こんばんは。この宿舎で、皆の世話をしているナタリアよ」
　地味なスカーフと丸眼鏡めがねが似合う農村の娘といった風ふう貌ぼうのナタリアは、人間嫌いが溢あふれるイリナの自己紹介を聞いていたにもかかわらず、温かく接する。

「それにしても、可か愛わいいねぇ。イリナさん、レフ君が手を出してきたらすぐ言ってね」
「出しませんから！」
　イリナは不審者を見るような目つきでレフから一歩離れた。
「触れたら噛かむわよ」
「触れないって……！」
　ナタリアはトレイに食事をのせながら、イリナに話しかける。
「お口に合うかわからないけど、どうぞ」
　発酵キャベツがたっぷり入ったスープ。イクラをのせたライ麦パン。牛ひき肉とパン粉をまぶして揚げたカツレツ。理想的な体型を維持できるように、栄養士がしっかりと献こん立だてを管理していた。
「イリナさんは体重が平均以下だから、特別にチョコレートもあるのよ」
　イリナはナタリアが置いた板チョコを見て、小首を傾げた。
「ちょこれーと……？」
「甘くて美お味いしいお菓子。ほかの町では手に入らない貴重品」
　都市圏にしかないチョコレートをイリナは知らず、珍しい舶来品でも見るかのようにじっくりと眺める。
「それから、飲み物は牛乳って聞いているけど」
「そうよ」
　吸血鬼と牛乳のちぐはぐな感じが気になり、レフはイリナに尋たずねる。
「牛乳が好きなのか？」
「私たちの主食は、牛乳や山や羊ぎ乳なの」
「意外だ……」
「動物の乳は、血液からできてる」
「え？」

「乳は、血液の代替品ともいえる」
「あ、そうなんだ……」
　知らなきゃよかったとうなだれるレフ。今後牛乳やアイスクリームを見たら、動物の血液か……と思い出してしまうだろう。

　レフとイリナが席に着くと、小さなショットグラスに入った蒸留酒ジーズニが用意されていた。共和国では何かにつけて国民酒である蒸留酒がふるまわれる。相手が吸血鬼だろうと歓迎の形は変わらず、ミハイルが乾杯の音頭を取る。
「それでは、イリナとの出会いを祝して……乾杯」
「乾杯！」
　候補生たちがグラスを天に掲げ、一息でグイッと煽あおる。
　レフも皆に合わせて飲み干したが、イリナはグラスを手に取ろうともしなかった。
　候補生たちの訝いぶかしげな視線を感じ、レフはイリナに勧める。
「形だけでも口つけたら？」
「いらないわ」
　イリナはスプーンでスープをすくい、我関せずと食べはじめる。
「もしかして、アルコールはダメ？」
「……」
　イリナは自分のグラスを取ると、空からになったレフのグラスに蒸留酒ジーズニを移し替えた。
「あっ……！」
「人間の規則は知らないけど、私の村では、飲酒は二〇歳からと決まっているの」
「え？」
「私は、まだ一七歳だから」

　真顔で答えるイリナ。
「……は？　一七!?　身分証の二一歳ってのは？」
「成人のほうが都合がいいと言われた」
　見た目が幼いとは思ったが、アーニャよりも年下という事実に驚きよう愕がくする。
「は、はは……うん、規則を守るのは軍人として当然だ、ははは」
　予想外の事態になり、レフは笑って誤ご魔ま化かす。
　こうして乾杯の儀が終わると、先に食事を済ませていた候補生たちはひとり、またひとりと食堂を出ていき、レフとイリナだけが残った。
　イリナからレフに話しかけることはなく、ただ黙々と食べ、かちゃかちゃと食器の音だけが響く。レフは食べながら、ちらちらとイリナを観察する。
　イリナはイクラを物珍しそうにつつくと、一粒ずつ口に入れはじめた。
　ぷちぷちとイクラを潰つぶして食べる吸血鬼がどうしても気になってしまい、大好物であるカツレツも今日に限っては味がしない。
「……」
　ぷち、ぷち。
「……」
　ぷち。
「……」
　長い時間をかけてイクラを食べ終えたイリナは、板チョコを手に取った。やや警戒するようにかじると、じっくり確認するように口を動かす。
　余計なことは話さないと決めたばかりのレフだったが、やはり彼女が気になって仕方ない。話してみたいという気持ちと、無視すべきだという職業意識がせめぎ合う。

なかなか大変な二か月になりそうだと、レフは蒸留酒ジーズニをグイッと飲み干した。

緋の瞳　Очи　алый

二か月間、この人間と行動するのか。

イリナはチョコレートを舌先で転がしながら、レフをちらと見る。

担当官が粗暴でなかったのは不幸中の幸いだったと、わずかではあるが安あん堵どしていた。

サングラードでの各種試験や身体検査を思い出すと、屈辱で腹が立ってたまらなかった。

検査担当官たちは防毒マスクと分厚い手袋で防護し、蔑さげすみの目を向け、答えるのも嫌気がさすような質問を機銃掃射のように浴びせてきた。彼らは直接言葉には出さなかったものの『呪われし種』を相手にしているのだという気持ちがありありと態度に表われていた。

それに比べると、レフはまったく違った。

初対面でいきなり素手で握手を求めてきたが、怖いとは思わなかったのだろうか。これまで人間に友好的に振る舞われたことのなかったイリナは不思議に感じていた。

いったい、何を考えているのだろう。

偉そうな上官に指示されたのだろうか。

イリナがレフを観察するように眺めていると、レフはその視線に気づき、酔って少し赤くなった頬ほおを緩ゆるめた。

「どうかした？」

「なんでもない」

あなたのことを考えていたなどとは言えず、視線を逸そらして牛乳の

入ったコップを取る。
　隙すきを見せないように気をつけねばと、イリナは警戒心を呼び起こす。
　レフは穏やかな人間のようだが、油断してはいけない。きっとこの男も、アーニャやナタリアという女も、上層部から命令が下されれば一瞬にして豹ひよう変へんするのだろう。
　天に昇った犬たちと同じように、吸血鬼の命など軽く扱うのだろう、と。
　言うことを聞かねば暴力をふるうのだろう、と。
　処刑と称し、心臓を貫き、首を跳ね落とすのだろう、と。
　しかし、それも二か月耐えればいい。
　イリナはコップを置くと、口の周りについた牛乳を指ですっと拭ぬぐい取った。
　二か月耐えれば。
　私は自由を手に入れられる。

第二章　宇宙飛行士への道

藍の瞳　Очи　индиго

いよいよ本日から、訓練が開始される。

狭い、寒い、暗いの三重苦である独房で目覚めたレフは、訓練用のジャージを着て、隣のI号室へイリナを迎えに行った。

錠じよう前まえはかかっており、逃げ出した形跡はない。

棺かん桶おけから出てきてくれなかったらどうしようかと懸け念ねんしつつ、ノックして声をかける。

「レフだ。開けるぞ」

「どうぞ」

冷めていて色のない声が中から聞こえてきた。

扉を開けると、イリナは棺桶に腰かけていた。白のタンクトップ姿で、首飾りをかけている。上着を羽織ってないのに寒くなさそうなのは『耐寒』の特性だろう。

軍服姿のときにも細身だと思ったレフだが、薄着になると、身体からだの線がよりいっそうはっきりとわかる。少女でも大人でもない、未完成の肉体。軽く触れただけでも崩れてしまう、新雪のような脆もろさ。

こんな華きや奢しやな身体で過酷な訓練に耐えられるのかと、誰もが疑問に思うだろう。

昨夜、レフはイリナを部屋に送ったあと、ヴィクトール中将から計画行程表を受け取った。短期間ゆえにぎっちり詰め込まれており、特訓に慣れているレフでさえ強行軍と感じるほどであった。

もし身体を壊されたら打ち上げどころではない。無理させすぎないように気をつけなければとレフは覚悟を改めた。

「さあ、行こう」

　レフの呼びかけにイリナは素直に応じ、制帽を手に取り棺桶から立ち上がると、首飾りをつけたまま出ようとした。
「首飾りは外していきなよ」
「駄だ目めなの？」
「別にいいんだが、結局、その場その場で外すことになると思う」
「……」
　イリナは首飾りに軽く手を当て、どうしようか迷っている様子だった。常に持ち歩きたいほど気に入っているのだろうか、それとも高価なものなのだろうか。毎日軍服を着ているせいで腕時計以外の装飾品を持っていないレフは、女性の服装にはとくに疎うとかった。
　イリナの胸元で青白く光る宝石に、レフは目を凝らす。
「透きとおってて綺き麗れいだな。なんていう宝石？」
　するとイリナはレフの視線を遮さえぎるように、宝石を手で隠した。
「じろじろ見ないで。穢けがれる」
「え……穢れるって……」
　あまりの言われように困惑するレフ。
「外せばいいんでしょ」
　仕方ないという感じでイリナは首飾りを外すと、繊細な硝がら子す細工を扱うような手つきで棺かん桶おけのなかにそっとしまい、しっかりと蓋ふたを閉じた。その様子から、相当貴重なものだろうとレフは察した。
　イリナは肩にかかった髪をさっと払い、制帽を被かぶった。
「それで、今日は何をするの？」
「ああ……」
　気を取り直し、レフは行程表をイリナに見せる。
「内容は毎日変わるが、これが基本となる」

《第一部　午後五時～》
・体操
・ランニング
・身体検査
・食事
《第二部　午後一〇時～》
・特殊装置を使用した訓練
・座学
・食事
《第三部　午前二時～》
・体力増強トレーニング
・パラシュート降下訓練
《第四部　日の出～》
・食事
・自由時間（シャワー使用可）
・就寝

「俺はマネージャー以前に候補生だから、君を監視しつつ、いっしょに訓練もする」
「そう……まあ、いいけど」
　しぶしぶという感じで頷うなずくイリナ。やりたくないとか異論を唱えられなくてよかったと、レフは内心ほっとする。
「それで、座学ではロケット工学や軌道力学などを学ぶんだが、夜間は指導教官が不在になるので、俺とふたりで自習という形になる。わからないところがあったら聞いてくれ」
「つまり、あなたが教官代わり……？」

イリナは怪け訝げんそうに眉まゆをひそめた。
「そんな顔するなよ。これでも俺はそれなりに成績いいから」
じつのところ、座学が軽んじられるのはヴィクトール中将の「実験体に知識は不要」という判断だった。だが、レフはイリナにそのことは伝えない。伝えることで彼女のやる気が削そがれると考えたためだ。独房で初めて会ったとき、彼女が教書を真ま面じ目めに読んでいたことが深く印象に残っていた。どのような指示をされたのか定かではないが、自主的に勉強してくれているのに、水を差すことはない。
「それから食事だが、座学と同じく食堂の職員がいなくなってしまうので、作り置きを自分たちで温める」
「私には牛乳さえあれば問題ないわ」
つんけんした彼女と柔らかな味わいの牛乳が不釣り合いで、レフはつい口元が緩ゆるんでしまう。昨夜の食事でも、口の周りについた牛乳を拭ぬぐう仕草がなんとも可か愛わいらしかった。
「なに笑ってるのよ」
イリナが不快感を露あらわにじろりと睨にらんだ。
「なんでもないよ」
「あなたは、一生牛乳を飲まないで」
「は？」
「文句があるなら、蒸留酒ジーズニでも飲んでいればいいでしょ」
少し笑った程度でつんつんするイリナをおかしく思うが、レフは顔に出るのをぐっと堪こらえる。
「悪かったよ。じゃあ、さっそく訓練に行くぞ！」
と、促うながしたところで、レフはイリナの格好に違和感を覚えた。
「……この肌寒い季節にタンクトップ一枚で出歩くのは変だ。暑いかもしれないが上着を着てくれ」
「着るわよ。たとえ夕暮れでも、地肌をさらすとヒリヒリするんだか

ら」

　午後五時、太陽は針葉樹林の彼方かなたに落ち、世界は暗あん碧ぺきに包まれはじめる。
　薄うす闇やみの陸上競技場でふたりが時間をかけて柔軟体操や準備運動をしていると、暖かそうな襟えり巻きをつけたアーニャが現れた。
「おそようございます！」
「おそよう？」
「もう夜なので。いかがですか？」
　相手をすると長くなりそうだと案じたレフは「いいと思う」と適当に相あい槌づちを打ち、イリナに声をかけて四〇〇メートルトラックのスタート位置に向かった。
「ランニングで基礎体力をつける訓練だ。トラックを一二周するが、自分のペースで走ればいいから」
　イリナは無言で頷うなずき、爪つま先さきでとんとんと地面を叩たたいた。一般的に吸血鬼は『走る』というより『空を飛ぶ』印象のほうが強いので、果たしてどの程度走れるのだろうかとレフは少々不安だった。
　アーニャが記録時計のボタンを押し、号令を発する。
「スタートっ！」
　最初から無理させることはない。徐々に慣れさせていこう。
　そう思ってゆったりと走り出したレフだが、イリナは予想以上に速く、レフよりも前を走る。ならばと、レフはイリナに合わせるように速度を上げた。
　すると。
　レフが並んだ瞬間、イリナはペースアップし、差を広げた。
「待て！　飛ばしすぎると今日一日もたないぞ！」

「私は私のペースで走っているだけよ」
　レフの注意などまったく聞き入れず、イリナは先へ先へと駆ける。
「速すぎるって！」
「あなたが遅いだけ」
　挑戦的な言葉を吐くイリナを追って走るうちに、レフは「速すぎる」という認識が誤りだと気づいた。イリナの走行姿勢は陸上選手のように美しく、たしかに自分のペースで走っている。
　イリナはふっと振り向くと、目を細めて勝ち誇ったように口角を上げた。
「くそっ……」
　負けず嫌いで燃えやすいレフはイリナに競りかける。するとイリナはさらにグンと加速する。
「あとで後悔しても知らないからな！」
　年下の少女に負けるわけにはいかない。レフは猛然と駆けてイリナを追い抜く。
「人間のくせに生意気なのよっ……！」
　イリナが抜き返す。
「いい加減にしろ……！」
　レフも即座に抜き返す。
　互いに息は乱れ、完全にオーバーペース。もはやランニングではなく自尊心を懸けた死闘である。
「はやすぎですよーッ！」
　目を丸くするアーニャの前を駆け抜け、抜きつ抜かれつ周回を重ね、最後の直線は息が上がってバタバタになりながらも、レフが身体からだひとつ分抜け出してゴールした。
　アーニャが記録時計を見て、口をあんぐり開ける。
「し、新記録です……」

「はぁ、はぁ……そりゃ、そうだろ……」
　レフは地べたにぐったりと寝転んだ。候補生同士で記録を競うことは日常茶飯事だが、まさか吸血鬼の少女と意地の張り合いをするとは夢にも思わなかった。
　ゴール付近で座りこんでいるイリナを見やると、髪は汗で濡ぬれそぼり、肩で息をしながら悔しげに唇を噛かんでいる。あれだけ全力疾しつ走そうして倒れないのは並じゃないと感心したレフは、身体を起こしながらアーニャに尋たずねる。
「彼女たちは、人間よりも基本的な身体能力が優れているのか？」
「いえ、平均値は同じはずですが……」
　もしそうならば、吸血鬼のなかでもイリナだけが飛び抜けていることになる。
　レフたち候補生は全国各地の軍隊から集められ、さらに厳しい試験を突破した選りすぐりの人員だ。モジャイスキー博士がイリナのことを「候補生に勝るとも劣らない」と評したが、体力と根性に秀ひいでたレフと同等の走りを見せたイリナの能力は相当なものといえる。そのことに驚きを隠せないレフは、暑そうに汗を拭ぬぐっているイリナに問いかける。
「もともと鍛えてたりしたのか？」
「勝手に鍛えられたのよ。住んでいたお城は山の上にあって、麓ふもとからは一四八〇段の階段を登らないといけなかったから」
「なるほど、そりゃすごい……」
　ん？
　会話を流そうとして、レフは一点ひっかかった。
「今、『お城』って言った？」
「言った。答えてあげてるんだから、一言一句聞き逃さないでくれる？」

「いや、だって、城なんて耳慣れない言葉だし……」
　吸血鬼は古城に住んでいるというイメージはあるが、まさか、貴族の家柄なのか？
　──という疑問が喉のどまで出たところで、レフはハッと口をつぐんだ。ヴィクトール中将の言いつけのとおり、実験体について必要以上に知ることはない。イリナの過去や実家など、訓練には関係ないのだ。むしろ知れば知るほど、打ち上げ失敗やイリナが脱走して処刑するような事態になったとき、つらい思いをすることになる。
　それがわかっているのに、訊ききたくなってしまう。
　非情になるのは難しいなと、レフは大きく息を吐いた。

　少しの休憩をはさみ、レフたちは生体医学研究所の検査室に移動した。
　Ｘ線撮影など、医師の立ち会いのもとでの精密検査となるが、吸血鬼が専門研究分野であるアーニャは興味津々である。
「うふふ。イリニャンさんにとっては『ライカ44』で初の精密検査になりますので、身体からだの隅から隅までやっちゃいますっ！　身長体重、女体三位寸法、血圧に加え、断層撮影、心電計、基礎新しん陳ちん代たい謝しや……うふふ、うふふっ」
「っ……」
　イリナが後ずさりするほどに、アーニャは高揚している。
「俺、衝つい立たての裏に座ってるから。あとはアーニャ頼んだぞ」
　任せて大丈夫だろうかという一抹の不安もありながら、レフが椅い子すに腰かけると、イリナが軽けい蔑べつの眼まな差ざしを向けた。
「どうしてそこにいるのよ」
「え？」

「ほかの女の候補生が検査するときも、あなたは同じ室内にいるの？」
「いや、いないけど」
「だったら外に出なさいよ」
「でも、監視役だし、衝立の裏なら見えないから……」
「四の五の言わないで。存在そのものが不愉快なの」
「存在まで否定するな……！」
「出てって！」
　イリナが頑かたくなに拒こばんでいると、アーニャが何か思いついたように「あっ」と人差し指をピンと立てた。
「イリニャンさん、恥ずかしいのですか？」
「そんなわけないでしょ！」
　と怒ど鳴なったイリナの頬ほおがぽっと赤くなった。肌が白いからわかりやすい。その反応を見たレフはとんでもない失言をしていたことに気づいた。イリナがあられもない姿で検査を受けているところを想像して、急に意識してしまいどぎまぎしはじめる。
「だったら、さ、最初からそう言えばいいだろ……」
「ほ、ほかの候補生と同じように扱うと言ったのはあなたでしょ！」
「い、いやだって、じっけん……」
　イリナが牙きばを見せてムキになってわめく。
「人間の男というのは、本当に無神経なのね！」
「わかったから！　外出るからっ！」
　アーニャがレフとイリナの顔をまじまじと見比べる。
「どうしておふたりとも耳たぶまで真っ赤なのですか？」
「うるさい！」「黙って！」
　──検査室から出たレフは、壁にもたれてぼんやりと考える。
　恥ずかしがるイリナは、まるでふつうの女の子のようだった。
「……はぁ、やってしまった……」

　実験体ということを意識しすぎていた。失礼なことをしてしまったとレフは反省する。もし衝つい立たての裏で待っていたら、気まずくて大変なことになっていただろう。
「──ほわぁ！　真っ白すべすべです！」
「──じろじろ見ないで……！」
　ドアの向こうから、アーニャの嬌きよう声せいとイリナの悲鳴が響いた。
「ったく、アーニャは……」
　呆あきれつつも、室内の状況が気になってしまう。
「──細くて引きしまってるのに、ぷにっぷにです！」
「──ひゃ、必要以上にさわんないでよっ……！」
「ん……」
　レフは咳せき払ばらいをひとつすると、そっとドアに耳を当て、聞き耳を立てる。女性は苦手だが、人並みに女体に興味があるレフであった。
「──一五八センチ……四三キロ……」
「軽っ……」
　食堂でナタリアが平均体重以下と言っていたが、予想していたよりずっと細い。
「四三って、二〇キロのダンベルふたつだろ……」
　両手でダンベルを上げるような仕草をして想像するレフ。
「──つぎは女体三位寸法ですー、うふふー！」
「──ねえ、目が怖いんだけど……」
「──まずは胸からいきますよ～。ちょっと冷たいですけど動かないでくださいね～……えーと、八一……八二センチ……？」
「──ひっ、なんで指をくねくね動かすのっ！」
「……」

盗み聞きしている罪悪感に苛さいなまれながらも、ついイリナのタンクトップ姿を思い浮かべてしまう。彼女は服の下も人間と同じなのだろうか。共同宿舎の部屋に誰かが持ち込んだ卑ひ猥わいな本の写真が脳裏をよぎる――

「レフ君？」
「っ！！！！」
　背後からいきなり声をかけられ、レフはびくんと飛び上がった。そして、口から飛び出しそうな心臓を必死で押さえ込み、恐々と振り向くと、ナタリアが真顔で立っていた。
「変質的行為だと報告しちゃおうかしら」
「え？　な、なにもしてませんよ!?　壁が冷たくて気持ちいいな、なんて……」
　あまりにも苦しい言い訳をすると、ナタリアはニカっと笑った。
「ふふっ、冗談よ」
　ランニング後に一度引いた汗が、また背中にぶわっと噴きだした。
「あの、ナタリアさん、こんなところにどうしたんです？」
　平静を装って話をすり替えるレフ。生体医学研究所に寮母であるナタリアがいるのはあまりにも場違いであった。
「あなたがここにいると聞いて、食事のことを伝えにきたのよ。初回だし、温める手順もわからないでしょうから」
「そういうことですか……」
　ナタリアは厨ちゆう房ぼうの器具の使い方を書いた紙をレフに渡すと「がんばってね」と手を振って去っていった。
「ふぅ……」
「──あっ、や、やめなさい！　くすぐったいってば！」
「──反応は人間と同じなんですねー。ではこれは？」
「──ひぁっ……これなんの検査なの……ぃっ！」
「……」
　レフは検査室の壁から離れて、気を紛らすために鼻歌を唄う。彼女は実験体で吸血鬼なんだぞと自分に言い聞かせるも、断続的に聞こえてくるイリナの短い悲鳴に心をくすぐられた。

一時間ほどしてイリナの検査が終わり、データをまとめるというアーニャと別れて共同宿舎へ食事に向かう。

その道中、レフはイリナを直視することができなかった。

「なんでさっきから目を逸そらして黙っているの？」

「べつに……」

変なことを想像してしまうとは口が裂けても言えない。盗み聞きの件をもしナタリアに告げ口されたらと思うと、首筋を刃物で撫なでられる気分だった。

午後九時を過ぎた食堂には誰もおらず、卓上蚊か帳やを被かぶせられた食事が寂しく置かれていた。

共和国の伝統料理であるブリュシチという煮込みスープと、ビーツやニンジンなどの根菜を酢で味付けたヴィネグレット。そして、手のひらサイズのアルミチューブが三本。

レフが「げ……」と顔をしかめると、イリナが訝いぶかしげにチューブをつまみあげた。

「これはなに？　歯磨き粉？」

「宇宙食だよ」

「え……！　はじめて見た！　中身はなに!?」

イリナのテンションが急上昇するのと反比例し、レフの気分は下降している。

「国立医学院の研究者が、科学的な視点でいろいろな食材を混ぜたものだよ」

「へぇー」

子どものように目を輝かせてチューブの文字を読むイリナ。そんな彼女の態度にレフは驚き、まじまじと見ていると、イリナが横目で睨にら

んだ。
「なに？」
「……なにか期待しているみたいだが、味つけは最悪だし、離乳食みたいで不ま味ずいぞ。学者連中は栄養バランスのことしか考えてないから」
　宇宙食は候補生全員から不評だった。それほど食にこだわりのないレフも、試作品をはじめて口に入れたときは気持ち悪くて吐きかけたほどだ。
　ところがイリナはレフの忠告など無視して、アルミチューブの口にストローを挿さした。
「いただきます」
　頬ほおをすぼめ、ちゅーちゅーと吸うイリナ。
「不ま味ずいだろ？」
「べつに」
「え？」
「でも、がっかり。宇宙食なんて名ばかりでふつうじゃない」
　イリナはつまらなそうにアルミチューブを置いた。
「いや、ふつうじゃないと思うんだが……」
　もしかして味が改良されたのかと思い、レフは自分の宇宙食を吸った。
「……うげっ」
　にゅるにゅるした食感と統一感のない味や臭気が口内に充満し、慌あわてて水で飲み込む。なにひとつ改善されていない不味さだ。
「……君は、人間と味覚が違うのか？」
　レフの質問に、イリナはげんなりした口調で答える。
「まだひとつ誤解が残ってたみたいね。私たちには、血液以外に対する味覚がほとんどないのよ」

「は……？」
「感じるのは、食感と、香りと、冷熱感と、ピリピリするとかの刺激だけ。ちょこれーとが甘くて美お味いしいと言われたけど、よくわからなかった」
　思わぬ差異に、レフは軽い衝撃を受けた。
「……じゃあチョコを食べたとき、どんなふうに感じたんだ……？」
「ねっとりした粘り気のある、香りの強い、茶色の物体」
　なぞなぞのような解答。いくら人間に似ていても異なる種族なのだと、レフは改めて思い知らされた。
　イリナは吸いかけのアルミチューブをレフに差し出した。
「あなたにあげる。食べる気なくなったわ」
「いるか！　というかだな、不味くても全部食べなければならないと規則で決まっている。だからイヤでも食べろ」
「はぁ……」
　溜め息いき交じりにアルミチューブをくるくる指で回しはじめるイリナ。未知の食べ物への失望は味覚がなくても同じだったのだろうと、レフはよく理解できた。
「がっかりした気持ちはわかるが、次の特殊装置を使った訓練は心身ともに削られるから、しっかり食べてエネルギー補給しておかないとキツいぞ」
「特殊装置って、どういうの？」
「首都の病院でやらされた試験の強化版だ。蒸されたり、回されたり……とにかくキツい。くわしくは現場で説明するから、とりあえず食うぞ」

　ブリュシチを鍋で温め、ふたりしかいない食堂で向かい合って食べる。

アルミチューブを吸うイリナを見て、レフはどこか非現実的な気分になっていた。子どもの頃にさんざん怖がった吸血種族と宇宙食を食べているなど、親が聞いたら腰を抜かすだろう。

そもそもレフの両親は、レフが宇宙飛行士の候補生に選ばれたことを知らなかった。『ミェチタ計画』を含めた宇宙開発には軍事機密が深くかかわっているため、たとえ肉親だろうと口外厳禁とされていたのだ。

一介の飛行士だったレフが候補生に勧誘されたのは九か月前──今年の初冬、二一歳の誕生日を迎えた直後のことだった。

共和国の最北端にある極寒の基地で偵察機のパイロットとして任務をこなしていたとき、所属組織を名乗らない黒ずくめの男に声をかけられた。

「新規開設される飛行士養成学校で、まったく新しいタイプの超音速飛行機に乗ってみたいと思うかね？」

「……それは、なんでしょうか？」

「地球をぐるっと回るような長距離飛行だ。興味があるなら首都サングラードまで試験を受けにきなさい」

謎なぞの男は必要事項だけ機械的に告げると、煙が消えるように去っていった。

ふつうに考えたら、怪しすぎる。

だが、レフは直感的に確信した。

「まさか、宇宙ロケットか!?」

有犬飛行の次は有人飛行だと風のうわさで聞いて以来、期待に胸を膨ふくらませていたのだ。

宇宙を飛ぶことは、初等学校の頃からの夢だった。

夜空を見上げては、星間を旅する未来を空想していた。

いつか来るその日を信じて、空軍のパイロットを志したのだ。

「絶対合格するぞ！　うおおおおおおお！」
　滾たぎる情熱で永久凍土も溶けそうなほどだった。
　田舎の農村地帯で生まれ育ったレフは、試験を受けるときになってはじめて首都サングラードに足を踏み入れた。一二世紀に建造された歴史があり、人口六〇〇万人を超える連邦最大の都市である。
　その軍科学病院に集められた三〇〇〇人の志願者たちは、詳細も明かされないまま検診衣に着替えさせられ、頭から爪つま先さきまで数十項目に及ぶ検査をされ、ひとつでも異常の見つかった者は問答無用で帰された。
　この段階で残った人数は二五〇人。
　さらに。
　経歴や家族、社会的な関心の調査。最新の生化学に基づいた過酷な肉体実験。誤った解答をスピーカーで流され続ける意味不明な筆記試験。
　あらゆる方法でふるい落としにかけられ、最終的に、頭脳明めい晰せきかつ超健康優良児である二〇人の若者が残った。
　そして、まだ雪の残る三月末。空軍総元帥の口からようやく勧誘の目的が明かされた。
「同志諸君、喜びたまえ。君たちは、宇宙を目指すコスモノート候補生である！」
「や、やった……！」
　叫びたくなる気持ちを抑えるのに必死だった。その喜びを家族に伝えることができるのは宇宙を飛んだあとだと承知していた。

　―ブリュシチをすすりながら昔のことを思い出していたレフは、イリナの家族はどうなのだろうと考えた。
　城に住んでいるらしき両親は、娘が実験体になっていることを知っているのだろうか。まさか拉ら致ちして試験を受けさせたなどということ

は……ないと思いたいが。
　ぼうっと考えるレフの前で、イリナはブリュシチをスプーンですくうと鼻先に近づけ、匂いを嗅かぐ。
　匂いで味わうしかないのか。
　もしかして、イクラを一粒ずつぷちぷち食べていたのは、食感を楽しんでいたから？
　……ダメだ。
　心の中でレフはつぶやいた。気になることが多すぎていろいろ訊ききたくなってしまう。こんなときミハイル候補生ならイリナの存在などまったく無視して、詩でも片手に紅茶を飲むのだろうか。それとも訊くだけ訊いて、あとは冷徹に接するのだろうか。
「……」
　レフは頭を振った。宇宙のことだけを考えようと、アルミチューブを手に取る。

　会話のない静かな食事を終えたふたりは、特殊装置を使った訓練の前に、共同宿舎のトイレに寄った。監視役のレフも、さすがに女子トイレにはついていけない。
　確認するのもなんだか馬鹿らしいが、いちおう確認する。
「窓があるけど、逃げないよな？」
「逃げないわよ。逃げたら処刑なんでしょ」
　イリナはぼそっと言うと、トイレへ入っていった。
「ふぅ……大変な役割を仰おおせつかったもんだ」
　レフの吐いた溜ため息いきは、誰もいない廊下の暗がりに溶けていった。

午後一〇時。
「お疲れ様ですっ！」
レフとイリナが訓練センターのロビーに来ると、バインダーを手にしたアーニャが微ほほ笑えみを浮かべて待っていた。検査室でのあれこれが尾を引いているのか、イリナはアーニャからやや距離を置いて警戒している。そんなイリナのことなどアーニャは気にせず、朗ほがらかに行程表を確認する。
「本日の訓練は、熱気室での耐久試験と、加重訓練ですね？」
イリナがピクッと反応した。
「熱気室……？」
「蒸し風呂のような狭い空間です。呼吸をするのも苦しいほどの高温のなか、どのくらい耐えられるかを調べるのですっ！　あっ！　暑いのが苦手なイリニャンさんにとっては、劣悪な環境ですねっ！」
アーニャの声が弾んでいる。
「……あなたは、なぜ楽しそうなの」
「実験とは、科学者の生きがいであります！　うふふふ～」
無む邪じや気きさが逆に恐ろしい。
どんよりと肩を落とすイリナに、レフは「だから過酷だと言っただろ……」と慰なぐさめ、熱気室へ向かう。
訓練センターも食堂と違たがわず、多くの職員は帰宅しており、吸血鬼の活動時間に合わせるということは必然的に残業か夜勤となる。となれば、不平不満が出るのも道理であったが、訓練センターの副長官に限っては、別の理由で機嫌が悪かった。
「まさか『呪われし種』なんかの相手をすることになるとはな。チーフ直じき々じきのご指名じゃなければ絶対断っているところだ」
マスクと手袋を身に着け、十字架の首飾りをぶら下げている白髪の壮

年男性―サガレヴィッチ副長官。イリナの特殊訓練に同席する立場なのだが、会って早々に身体からだ中から嫌悪のオーラを放っており、マスクをしているにもかかわらずニンニク臭が漏もれてくる。
「まったく……吸血鬼などを宇宙に飛ばしたら、神の怒りに触れて巨大隕いん石せきでも降ってくるんじゃないか」
　わざわざイリナに聞こえるように暴言を吐く。
「む……」
　牙きばを剥むきかけたイリナに、レフは小声で事情を説明する。
「副長官は信心深いんだよ。毎日教会で祈ってる」
　以前レフはサガレヴィッチ副長官に「宇宙に神がいることを確認してきてくれ。神の実在を証明するために、私はこの仕事に就ついたのだ」と真顔で語られたことがある。そんな敬けい虔けんな信者がイリナの担当になるとは、なんの因果だろうか。
　サガレヴィッチ副長官はもともと気難しくて怒りっぽいのだが、人間に悪態をつきまくるイリナがもし神経を逆なでするような発言をしたら、大噴火の恐れがある。
「くれぐれも『教会が吸血鬼の怪奇伝承をねつ造した』なんて言うなよ？」
「わかってるわよ。愚かな人間なんて相手する気もないから」
　イリナがつんと澄ましていると、サガレヴィッチ副長官は重く低い声を発した。
「はじめるぞ。神の名のもとに、な……」

　訓練部屋にはたくさんの計測器が並び、無数の小さな赤ランプがチカチカと無機質に点滅している。その中央に、トラックの荷台ほどの大きさの熱気室が鎮座している。
　やってきたレフたちを出迎えたのは、機器の操作を担当する青年技

師、フランツ・フェルツマンだ。洗い立ての綺き麗れいな白衣を着ており、清潔な印象を与える。
「はじめまして、イリナ・ルミネスク同志」
　フランツが恭うやうやしく敬礼すると、イリナは困惑した様子でレフを見た。
「あの愚か者とは全然態度が違うわね……」
　レフは強く頷うなずく。
「彼は邪険に扱ったりしないよ。なあ、フランツ同志？」
　問いかけられたフランツは小声で返す。
「副長官といっしょにしないでくれよ」
　フランツは真ま面じ目めすぎるほどに真面目で、レフは好印象を抱いていた。
　その一方、サガレヴィッチ副長官は隅の椅い子すに腰かけ、悪魔祓ばらいでもするかのように十字架を握にぎりしめて不ふ遜そんな態度をとっている。
「おいフランツ、無駄口叩たたいてないではじめなさい」
　副長官に注意されたフランツは申し訳なさそうに苦笑し、レフたちに「誰から？」と問う。
「最初に俺、次にイリナだ」
　レフが上着を脱いで熱気室へ向かおうとすると、サガレヴィッチ副長官が「待ちなさい」と立ち上がった。
「君が訓練しているあいだ、誰が吸血鬼を監視するのだ？」
「アーニャやフランツがそばにいますし、逃亡の恐れはないはずです」
「そういう問題ではない」
　サガレヴィッチ副長官は鞄かばんからおもむろに鋼鉄の手て錠じようと縄なわを取り出して、レフのほうに向かって放り投げた。
「!?」

　おののいたレフは硬直して受け取ることもできず、手錠は足元に落ちてガシャンと嫌な音を立てた。
　サガレヴィッチ副長官は冷淡な顔つきでレフに命じる。
「実験体は拘束する。そういう規則だ」
「……しかし、彼女は犬では……」
「事情を知らない市民が見たら何事かと思うだろうが、ここでは問題ない」
「いや、しかし……」
　アーニャは口に手を当て、フランツは目を伏せている。レフが対応に困っていると、イリナはすっと両手を差し出した。
「手錠をかけて」
「え？」
「人間の神様は、それで満足するんでしょ？　手錠くらいかまわないわ」
　どこか小馬鹿にしたような物言いで彼女は催促する。そうはいっても、非のない少女を拘束するのはさすがに躊躇ためらわれる。
「早くして。あの人、私に襲われるのが怖いみたいだから」
　嘲るような顔つきのイリナ。サガレヴィッチ副長官が睨にらみを利かし、空気がぴりぴりする。このままでは衝突が起きかねない。
「イリナ、ごめん……」
　レフは手錠を拾うと、イリナの細い手首にガチャリとかけ、縄を足首に巻いて支柱に繋つないだ。そして彼女に憐れん憫びんの目を向けると、跳ねのけるような視線を返された。
「そういう目は嫌い」
「けど……」
「私は自ら拘束を望んだ。そういう設定だから」
「は……？」

言っている意味がわからず、レフはきょとんとなる。
「手錠も縄も、私を彩いろどる装飾品よ」
イリナは胸の前に両手を掲げ、胸を張って背筋を伸ばした。なるほど、その凛りんとした姿はまるで存在そのものが意見広告のようで、反体制的なメッセージすら感じられる。
「敬けい虔けんな信者様。よかったら聖水や十字架もどうぞ」
悪意を手玉に取るような態度。イリナのほうが一枚上手だった。サガレヴィッチ副長官は憎々しげに眉まゆをひそめると、レフに訓練開始を要求して再び椅い子すに座った。その様子を見て、イリナはふんと鼻で笑う。肝が据わっているというか心が強いというか、美しくて運動神経がいいだけじゃないのだなとレフは感心しきりだ。この精神力なら、厳しい特殊訓練もへこたれずに乗り越えてくれるかもしれないと期待が持てる。
「じゃあ行ってくるから、イリナは見学していて。ああ、フランツ。俺が訓練しているあいだ、彼女に特殊訓練の説明をしておいてくれる？」
「了解」
レフは身体からだ中に計測センサーを貼りつけられ、熱気室の椅子に座った。摂氏九〇度の灼しやく熱ねつ空間に一時間こもるという苦行だ。じっとしていても汗が噴き出す。
「ふぅ……熱い……」
壁面の覗のぞき窓越しに、フランツがイリナに話をしているのが見える。

「熱気室は、宇宙飛行士の搭乗するキャビンの内部が、何らかの異常で高温になってしまったときを想定した訓練なんだ」
フランツの解説を、イリナは真ま面じ目めに聞いている。
「高温になるの……？」

「キャビンは耐熱金属や断熱シートで覆おおわれていて、通常は二〇度に保たもたれる。とはいえ、宇宙から地球に帰還するための大気圏再突入時には、機体が数千度の炎に包まれるほどの空力加熱が発生する。もし機体に不備があれば、最悪、茹ゆで釜のようになって……」

フランツは少し言い淀よどみ、イリナからふっと目を逸そらして暗い声で言う。

「熱死した犬が何匹もいる」

イリナは真一文字に口を結び、膝ひざにのせていた拳こぶしをきゅっと握にぎりしめた。

「ちなみに……」

フランツはサガレヴィッチ副長官を横目に見る。

「あの人だけは、マールイが死んだときも平然としていた。犬は実験材料であり、不浄な生き物だそうだよ」

そう言うフランツの瞳ひとみに、暗い翳かげが落ちる。

「いつか天罰でもくだるんじゃないかな……」

「―し、死ぬ……」

一時間してレフがふらふらになって出てくると、フランツが水と着替えを手に駆け寄る。

レフは水をごくごくっと一気に飲み干すと、ようやく息を吐いた。

「ぷはぁ、生き返ったぁ……」

拷問のような訓練で身体からだが悲鳴をあげても、宇宙へ行くためだと思えばレフはいくらでも耐えられた。それに比べて、実験体として迎えられたイリナがどこまで頑張ってくれるかというのは、レフの心配している点であった。

特殊な訓練は熱気室だけでなく、ロケットエンジンが噴射しているときの状況を人工的に作り出す振動訓練や、密室に閉じ込めて空気を吸い

出す酸素欠乏訓練、血管が破裂する危険のある圧力訓練など多種多様だ。

　だが、じつのところ、人間の限界に挑戦するようなこれらの訓練が宇宙飛行においてどれほど効果があるのかは不明だった。ただ、少しでも肉体や神経系を極限状態に慣らしておこうという考えのもとで行われていたのだ。打ち上げの行程は探り探りであり、まったくの未知への挑戦だった。

　レフはイリナの手て錠じようと縄なわを外しながら忠告する。

「本当にキツいぞ。暑さに弱いならなおさらだ。限界になる前に早めに教えてくれ」

「あなたには負けないわ。一時間と一秒耐える」

「対抗しなくていいんだよ……！」

「見てなさい」

　威勢よく熱気室に向かったイリナだが、扉を開けた瞬間、熱気を浴びて顔を歪ゆがめた。

「異界……」

「ほらな……」

「逃げてもいいんだぞ。命の保証はしないがね」

　サガレヴィッチ副長官が怪しく目を細めると、イリナは椅い子すに腰かけて胸高に腕組みした。

「どうぞ、はじめて」

　扉が閉じられて訓練が開始されると、平然としていたイリナにあきらかな変化が起きた。すぐに涙目になり、白い肌は紅こう潮ちようし、髪がぐっしょりと濡ぬれそぼって額や首筋にへばりつく。

　覗のぞき窓越しに注視していたアーニャが心配そうな声をあげる。

「熱で溶けそうです……」

「測定数値に異常は？」

「今のところ大丈夫ですけど」
　レフはジェスチャーでイリナに「どうだ？」と尋たずねたが、イリナは首を横に振って平気だと主張する。どこまで負けず嫌いなんだと呆あきれつつ、倒れるなよと見守り続けた。そしてついにイリナは一時間と一秒を達成した。
「──み、みみ、みず……」
　干からびそうになったイリナは、フランツから水を受け取ると頭からかぶった。
「ふぅ、もう一杯……ううん、五杯……もっと……」
「大丈夫か？」
　レフが声をかけると、イリナは濡ぬれた髪をサッとかき上げた。
「あと三時間は耐えられたわ」
「嘘うそつけ……」
　しかし、ランニングといい、なぜここまで対抗意識を燃やすのだろうか。サガレヴィッチ副長官への態度も含め、人間に屈したくないという以上の何かをレフは感じる。
「では次の訓練をはじめる。早く準備しろ」
　サガレヴィッチ副長官がパンパンと手を叩たたいた。ほとんど休む間もなく、レフたちはフランツに別れを告げて移動を開始した。

　午前〇時半、加重訓練室。
　体育館ほどの空間の中央には一本の太い柱が立ち、そこから水平に伸びた鉄骨の先に箱型のカプセルが取りつけられている。カプセルに人を座らせて高速で回転させ、強烈な加重をかける装置──遠心加速器である。
「仰々しいわね……」

まだ汗も乾ききっていないイリナは、未知の殺さつ戮りく兵器を前にしているかのように表情が硬い。
「さっきの熱気室に比べれば楽だぞ。五分で終わるし」
「そうなの？」
イリナの頬ほおがゆるんだ。平気だと強がっても、やはり熱気室は地じ獄ごくだったのだ。それにしても、イリナは本心が意外と表に出るのだなとレフは感じた。
「これは、どんな訓練？」
「数ある特殊装置のなかでも重要なものだ。さっきの熱気室は不測の事態に備えてだが『加重』は避けて通れないから」
ロケットの打ち上げは重力に逆らう行為であるがゆえに、地上にいるときの何倍もの重みが圧おしかかる。その圧は相当なもので、実験犬はキャビン内で身動きできなくなり、顔がひしゃげ、目からぼろぼろと涙をこぼした。
「ねえ、レフさん……」
アーニャがつんつんとレフをつついた。
「ん……？」
振り向くと、サガレヴィッチ副長官が何か言いたげに腕を組んでいた。
「あっ、開始します！」
レフは文句をつけられる前に遠心加速器のカプセルに入る。
狭い空間のなかにある拘束椅い子すに横たわると、担当技師にしっかりと固定ベルトを締めてもらう。
レフがグリップを握にぎると、重々しい起動音を立てて、カプセルがぐるぐると回転をはじめる。最大で地上の一二倍の加重が身体からだを押し潰つぶす。頭や目が痛み、胃がむかつき、身体中の血液が鉛のように重くなる。そんな状況に耐えるだけではなくて、作業もあり、発光盤

に現れる数字を読み取って記録しなければならない。
　五分経ち、地じ獄ごくから解放されたレフは足元をふらつかせながらカプセルから出た。
「はぁ……じゃあ、イリナの番だ。カプセルのなかで吐くなよ？」
「吐くわけないでしょ」
　肩をすくめたイリナだが、熱気室の恐怖が蘇よみがえったのか、赤い瞳ひとみがうるっと揺れた。
　カプセルに入ったイリナが椅子に座ると、担当技師が固定ベルトを締める。それを確認しにきたサガレヴィッチ副長官が、ぴくりと眉まゆを動かす。
「もっとキツく締めろ」
「十分だと思いますが……」
　担当技師は躊ちゆう躇ちよするが、サガレヴィッチ副長官の威圧には逆らえず、イリナの身体にベルトが食い込むほど強く締められた。イリナは無言でサガレヴィッチ副長官を睨にらみ、両者の視線がぶつかって火花が散る。傍かたわらで見守っていたレフは嫌な予感がしつつも、ベルトを緩ゆるめることはできない。
「やれ」
　サガレヴィッチ副長官が合図を出すと、カプセルが回転をはじめる。
　計測器の針が三Ｇ、四Ｇ、五Ｇ、六Ｇと徐々に上がっていく。
　サガレヴィッチ副長官は冷笑を浮かべて、担当技師の肩を叩たたく。
「もっといけるだろう。遠慮なく加圧しろ」
　機械がうなり、回転速度が勢いを増す。
　イリナは、目を閉じ、口を固く結び、ぐっと耐えている。
　九Ｇを超えた。初回にしてはやりすぎだ。
　レフは黙っていられずサガレヴィッチ副長官の前に立った。
「そろそろいいのではないですか？　慣れていない彼女にとっては、身

体への負担が大きすぎます」
「短期間で仕上げるための教育だ。それとも、私のやり方に文句でもあるかね」
　吸血鬼に私し怨えんでもあるかのような仕打ちにレフは憤いきどおる。だが、候補生の立場で上官に不服を申し立てるのは規則違反であり、レフは歯がゆさを感じながらやむを得ず引き下がった。歯向かうことは『殴打事件』以来、控ひかえることに決めていた。
　結局一〇Ｇまで上げて、回転は終了した。
　カプセルを降りてきたイリナは、顔色がいっそう青白く、よろめいて床に座りこんだ。白いタンクトップには、訓練前にはなかった赤いラインが入っている。
「どうした……？」
　レフは目を凝らして、ハッと息を呑のんだ。
　血だ。
　ベルトで締めつけられていた箇所に、血が滲にじんでいる。回転するなかで押されて擦すれたのだ。
　レフとアーニャが慌あわてて駆け寄る。
「大丈夫か？」
「たいしたことないわ」
　イリナは血で汚れた箇所を軽くさすった。
「アーニャ、生体データに異常はないか？」
　データを確認したアーニャの手に力が入る。
「……数値に問題はありませんが、早く手当てを」
　サガレヴィッチ副長官はイリナに見向きもせず、担当技師に告げる。
「カプセルが汚れてしまった。消毒薬と聖水で綺き麗れいに拭いておけ」
　まるで病原菌扱い。この調子だと、ベルトで締めたのも痛めつけるた

めの故意だろう。イリナはサガレヴィッチ副長官を睨にらんで立ち上がろうとしたが、腰を少し上げただけでふらつき、立つことができなかった。
　副長官としてひどすぎる行為に文句を言いたかったレフだが、拳こぶしをぐっと握にぎりしめて怒りを呑み込んだ。
「では、これにて本日の特殊訓練は終了とする」
　サガレヴィッチ副長官はイリナに十字架を切って去っていった。
「……」
　憮ぶ然ぜんと口をとがらせるイリナに、レフは頭を下げる。
「宇宙開発には数多くの人がかかわっていて、なかにはああいう偏屈な人間もいる。どうか気を悪くしないでくれ」
「あんな輩やからが副長官なんて、人間の品性を疑うわ」
　アーニャもうんうんと納得する。
「実験体を大切にしないのは研究者の恥です。イリニャンさん、着替えと応急処置の道具をお持ちしますね」
「そうね。聖水で消毒してもらおうかしら」
　イリナは膝ひざに手を当てながらゆっくりと起き上がり、冷然と微笑した。
　軽口を叩たたく余裕があるのなら大丈夫だろうとレフは少し安心した。
　それにしても、彼女の血も、自分と同じ赤色なんだな。
　レフは血の染みたタンクトップを見て、ふとそんなことを思った。

　午前一時半。
　アーニャと別れ、座学の時間。ここから先の時間帯はアーニャも教官もおらず、ふたりだけで過ごすことになるのだが、イリナはいっさい怠

なまけることなく黙々と教書を読んでいる。
「わからないことがあれば質問してくれ」
　レフが声をかけると、イリナは教書に目を落としたまま答える。
「気が散る。静かにして」
「す、すまない……」
　座学のあとは食事だが、彼女は食堂にも教書を持ち込み、酢漬けのニシンをもぐもぐと食べながら天文学書を熟読する。レフは今まで「食事の時間は息抜き」と考えていたが、本気で宇宙を目指すならば彼女の姿勢が正しいのではないかという思いにかられ、次の食事からは自分も教書を持ち込もうと決めた。
　イリナの呆あきれるほどの勤勉な姿勢は次の体力増強トレーニングも同様で、筋トレや鉄棒など指定された分量をサボることなくこなした。レフが指導教官だったら、間違いなく『優』の成績を与える出来だった。

　午前三時。
　屋内にあるプールで水泳の訓練を終え、『吸血鬼は水を怖がる』という伝承が嘘うそ偽いつわりだと身をもって示したイリナは、プールサイドで水着姿のまま休憩していた。隣に腰かけているレフは、目のやり場に困りながら話しかける。
「疲れてないか？」
「余裕よ……。吸血鬼は夜の民たみだから……」
　終始強がっていたイリナだが、さすがに疲労が溜たまっているようで声に元気がなく、ぼんやりとした表情でふくらはぎを手で揉もんでいる。
　レフは横目でイリナの身体からだをちらちらと盗み見る。足の指先か

ら頭のてっぺんまで、尖とがった耳と牙きばを除いたらやはり人間の少女にしか見えない。
　人間の一七歳ならば、働いているか高等学校で学んでいるかのどちらかだが、この顔立ちならどこでも注目の的だろうと整った横顔に見み惚とれていると──
「ねえレフ」
　イリナがいきなり振り向いた。視線がバチッと合って、レフは慌あわてて顔を背そむける。
「……なによ」
「ん……？　いや、足つらいのかなって……」
　イリナは「あっ」と声を漏もらすと、ふくらはぎに当てていた手をすっと外した。
「べつにつらくない」
「……で、何か言おうとしてただろ？」
「あのね、宇宙船の操作はいつ練習するの？」
　小首を傾げるイリナに、レフは首を傾げ返す。
「操作なんてしないぞ？」
「じゃあどうやって飛ばすの？　乗ったら自動的に連れていってくれるわけじゃないでしょ？」
　レフは唖あ然ぜんとなった。
「……聞いてないんだ？」
「何を？」
　たしかに実験犬には詳細を教えないが、イリナが勘違いしているのは大問題だ。
「イリナの考えで正しいよ。ロケットは全自動だ」
「えっ……!?」
　開いた口が塞ふさがらないイリナに、レフは座学で学んだことを伝え

る。
「連合王国のロケットは操作が必要な手動制御だけど、共和国は完全な自動システムを組んでいるんだ。チーフが『人間は過ちを犯す』っていう考えを持ってるらしくてね」
「なるほどね。たしかに過ちばかりだもの」
　可か愛わいい顔して辛しん辣らつな毒を吐く。だが実験体として独房に押し込めている以上、反論できたものではなかった。
「……まあ、だから、イリナはロケットの先端に搭載されるキャビンに乗り込んだら、座っているだけで宇宙へ行ける」
「科学技術は認めるわ……どういう仕組みなのかわからないけど、すごいわね」
　悔しげに頷うなずくイリナ。
「俺もくわしいことは知らないが、五〇〇〇本もの真空管を使った八ビットの『電子式汎用計算機』が動きを管理するらしい」
「八ビット……」
「わかるのか？」
　イリナは首をふるふると振るった。
「わからない」
「なんだそれ……」
「でも。その八ビットが人間より優れているなら、あなたの脳みそは一ビットくらいで、人間より優れた私は、一六ビットくらいかもしれないわね」
　わからないと言ったにもかかわらず、イリナは自信満々に自分の頭をとんとんと指さした。レフは正直なところ何ビットでもいいと思ったのだが、言われっぱなしなのも癪しやくなので、反撃を仕掛ける。
「打ち上げ後は管制室から送る電波司令で舵を制御し、電子頭脳プログラムが働き、磁気テープで記録をとり、ロケットを三段階に切り離して

大気圏を突破し、宇宙で軌道に乗せ、計器が太陽を感知して方向位置を調整し、帰還のための大気圏再突入までオートメーション装置が自動でやってくれる」
「おーと、めーしょん……」
　イリナは目をパチクリさせている。
「どうだ？　一六ビットの脳みそなら理解できるだろ？」
「……つ、つまり、科学技術の結晶よ。人間も……なかなかやるじゃない……」
　うつむいて口をもごもごさせるイリナ。その様子がなんだか可か愛わいくて、レフはもう少し攻めてやろうかと思ったが、年下の少女相手に意地悪するのも大人げないと思い直して、話をもとに戻す。
「すべて操縦は自動でやってくれるから、俺たちにできるのは、訓練で打ち上げに耐えられる身体からだを作っておくことなんだ」
「なるほどね」
「とはいえ……だ。たったひとつ、自動じゃないものがある。このあとに訓練するパラシュート降下だ。この技能は絶対に習得しないといけない」
「絶対に？　どうして？」
「宇宙船に乗ったまま、地上へ降りる手段がないんだよ」
「ん……？」
　宇宙から帰還する方法の理想形は、キャビンを逆噴射させて軟着陸させることなのだが、その技術はまだ完成していなかった。つまり、キャビンに乗ったまま降下すると、減速せずに地面に衝突することになり、搭乗員は死亡する。
「そこで考案されたのが、パラシュートだ」
　大気圏再突入後、高度七〇〇〇メートルに達したところでキャビンから搭乗員を座席ごと船外へ射出し、ひとつめのパラシュートを開傘す

る。ここまでは自動で行われるが、そこから先は、搭乗員自身の操作となる。

　空中で座席を切り離し、もうひとつのパラシュートを開き、安全な着地点を目指して降下するのだ。

　現時点では、これ以外に方法はなかった。

「ところでイリナ、パラシュート降下をやったことは……？」

「ないわよ。見たこともない」

　さらりと答えたイリナだが、レフは不安だった。

　未経験者が、たった二か月で超高空からの単独降下を無事成功させる。しかも、前人未到の宇宙からの帰還。以前、その困難さについてヴィクトール中将に確認したところ、返事はあっさりとしたものだった。

　──キャビンから搭乗員が射出されれば問題ない。訓練を積んだ候補生ならば、パラシュートを開き、無事着地できるだろう。

　──降下時の荷重に耐えられず、意識を失う可能性もあるのでは……。

　──それを調べるための実験体だ。

　つまり『未経験者のイリナは着地に失敗しても構わない』ということだ。パラシュートをうまく操れなければ骨折したり、最悪の場合、死ぬというのに。

「レフ、どうしたの？」

　イリナに顔を覗のぞき込まれ、どきっとするレフ。

「ああ……訓練のことを考えてた」

「私がパラシュートで降りられれば問題ないんでしょ？」

「まあ、そのとおりだ」

「見くびらないで。あなたができるなら、私にもできるわ」

　どこからその自信は来るのだろうとレフは困惑したが、そう言い切れるだけの身体能力を持っているのは事実だった。

幸い、パラシュートといっても空挺部隊が戦地に素早く降下するためのものではなく、大きくてゆっくり降りるものだ。再突入で気を失わなければ、無事着地できる可能性は高い。

レフは気を取り直す。

「よし、着替えたら行くぞ」

空が深い青に染まり、濃霧にけぶる夜明け前。ふたりは町はずれにあるパラシュート降下訓練施設にやってきた。

ここにはふたつの設備がある。

ひとつは、鉄骨を組み上げて作った八〇メートルの降下塔。こちらはパラシュートを使って実際に降下する。この塔は監視塔も兼かねているので、頂点ではサーチライトが煌こう々こうと輝き、あたりを照らしている。

そしてもうひとつの設備は、一一メートルの跳出塔。高さへの恐怖に慣れるために用いられ、航空機の胴体を模した飛び出し口からワイヤーで滑走し、向かいの土手に着地する。

「まずは跳出塔からだ」

「楽しそうじゃない」

「ああ、これは今までの訓練と違って楽しいぜ。パラシュートで大空から見る景色なんて、本当に最高だから！」

階段で最上階まで上がるとヘルメットを被かぶり、イリナを飛び出し口の最前部に立たせてハーネスを装着し、基本姿勢を教える。

「両腕を胸の前で組み、頭を下げて顎あごを胸につける。首をしっかり曲げておかないとむち打ちになるぞ」

「……」

イリナは硬直して動かない。

「どうした？」
　不思議に思って顔を覗のぞき込むと、恐ろしいものを見たかのように凍りついていた。小刻みに身体からだが震え、呼吸が乱れている。
「イリナ？」
「……」
　まさか。
「怖いのか？」
「そ、そんなわけにゃ！　ないでしょ！」
　あきらかに動揺している。
「額に汗が浮かんでるけど……？」
「き、き、気のせいよ！」
　顔面蒼白のイリナは汗を拭ぬぐって後ずさりしようとしたが、ハーネスで固定されているので逃げられずに身体が引っ張られる。
「ひぁっ……」
「おい……」
「……と、ところでっ」
「ん？」
　イリナは潤うるんだ瞳ひとみをレフに向ける。
「キャビンの逆噴射が完成するまで待てないの？」
　いきなり話をそらすイリナ。
「待っていたら連合王国に先を越されてしまうという上層部の判断だ」
「く、くだらない対抗意識ね。まったく人間というものは……」
　口では悪態をついているが身体は正直で、イリナの膝ひざがガクガクと震えはじめた。
「膝震えてるけど……」
「……む、武者震い！」
　と言いつつ、イリナは両脇の柵さくをぎゅっと握にぎりしめている。

「おいおい……」
　間違いなく高所恐怖症だ。
　吸血種族は空を飛ぶという怪奇伝承はなんだったのか？
　ふと、レフの脳裏に疑問が浮かんだ。
　イリナは、どうして実験体として採用されたんだ？　高所恐怖症を飛行士にするなんて無茶だろう。
　そこまで考えて、レフは気づいた。
　高所恐怖症の検査がなかったのではないか？
　レフが受けた選抜試験に、そのような検査はなかった。
　当然だ。
　全国から集められた選りすぐりの飛行士たちに、高い場所が苦手な者などいるわけがない。
　それについてイリナに確認すると。
「高所での検査なんて、受けてない」
　やはり。吸血鬼に対する先入観が試験官にもあったのかもしれない。
「ちなみに、飛行機に乗ったことは？」
「ないわよ。首都へ行くのも、ここに来るのも、ずっとトラックで運ばれてたもの……」
　強制的に連れられてきたことを思うと可か哀わい想そうな気持ちになる。だが、高所恐怖症だとヴィクトール中将に報告したらどうなるだろうとレフは想像する。もし飛び降りすらもできないとなれば実験体として不適格となり、軍事機密を多少なりとも知ってしまった以上『処分』や『永久鉱山送り』になる可能性もある。そしてもちろん、職務を全うできなかったレフの評価も落ちるだろう。
　ここは、互いのためにも克服してもらうしかない。縮ちぢこまって怯おびえるイリナを前に、レフは鬼教官になることを決意した。
「俺の通っていた空軍士官学校では、怖がる者には洗礼を与えていた」

「……レフ、顔が怖いんだけど……あの……」
　消え入りそうな声で訴えるイリナの襟えり首くびをレフは掴つかんだ。
「きゃっ！　な、なにするのよっ……！」
　抵抗するイリナを強引に引っ張り、飛び出し口の前に立たせる。
「首を引け！　むち打ちになるぞ！」
「ちょ、ちょちょ、ちょっ……」
　レフは心のなかで謝りながら、イリナの背中を思い切り突き飛ばした。
「飛べ！」
「あっ……!?」
　ハーネスに吊り下げられたイリナの身体からだが飛び出し口から落ちていく。
「ひっ……」
　声にならない悲鳴を上げ、イリナは硬直したままワイヤーを滑走していった。

　着地場にレフが迎えに行くと、イリナはハーネスをつけたまま、壊れた操り人形のようにへたり込んでいた。
「生きてるか？」
　しばらくしても、イリナは立ち上がろうとしない。
「どうした？　怪け我がでもしたか？」
　イリナは恥ずかしそうにもじもじしながら、つぶやいた。
「手を貸して。腰が立たない……」
「そこまで怖かったのか……」
「あなたが突き落としたせいでしょ。反省しなさいよ」
　ぎろりと睨にらむイリナだが、涙目で全然迫力がない。

「はいはい」
　ハーネスを外して、引っ張り起こす。
「よいしょっと……」
　手を引きながら、イリナの身体の軽さにレフは驚いた。体重をダンベルで想像していたが、手に伝わってくる重みは、本当に子どものようだ。
「ねえレフ……」
「ん？」
「このこと誰かに言ったら、噛かむわよ……」
　立ち上がったイリナは、辱はずかしめを受けたような顔でレフをじっと見つめる。
「言わないから大丈夫だって。噛まれたくないしな」
　独房で出会って間もない頃は、イリナを氷と闇やみの吸血姫のように感じ、畏い怖ふの念すら抱いたレフだったが、ひとつ秘密を知ったことで親近感を覚えはじめていた。

　東の空が白みはじめるなか、ふたりは訓練塔を離れ、共同宿舎へ食事に向かっていた。
「これで今日の全行程は終わりだ。こういう生活が二か月続くことになる」
「余裕ね」
　さっきまでの怯おびえはどこへやら。
「喉のど乾いたし、一杯飲んでくよ。訓練後の日課なんだ」
　レフは道の脇に設置された炭酸水の自動販売機へイリナを連れて行く。
「これはなに？」

「見たことない？　こうやるんだ」
　置いてある硝がら子すのコップを水洗器で洗い、注ぎ口にコップを置き、銅貨を入れる。コップに炭酸水が注そそがれると、レフは片手を腰につけて、ぐいっと飲み干した。
「ぷは～。最高。イリナも飲む？」
　レフの様子をまじまじと見ていたイリナは、目を瞬またたかせた。
「たんさんすい？　水とは違うの？」
「飲んだことないのか」
　共和国ではどこにでもある一般的な飲み物だが、山奥の村に自動販売機が設置されているわけはなかった。
「飲んでみなよ。スカッとして美う味まいぜ」
「私には味覚がないと知ってるでしょ」
　ぷくっと頬ほおを膨ふくらませるイリナ。
「問題ないよ。味じゃなくて、爽快な刺激を楽しむものだから。ほら、一杯おごってやる」
　コップに炭酸水を注ぎ、イリナに渡す。するとイリナはコップを鼻に近づけて、くんくんと匂いを嗅かぐ。
「んっ……？　ぴちぴちと何かが飛んでくるわ……。どういう物質なの？」
　レフに悪戯いたずら心ごころが芽め生ばえ、イリナを焚たきつける。
「炭酸を飲むのが怖いのか？　人間なら一気にいくぞ」
　その言葉を受けたイリナは、レフに鋭するどい眼まな差ざしを向けた。
「怖いわけないでしょ。私も一気よ」
　イリナはコップを傾け、勢いよくごくごくと飲んだ。
「っ!?」
　イリナの目が、まん丸に見開かれた。

「うあ、うあ、うあっ……」
　毒物でも飲んだかのように手からコップが滑り落ち、舌をベーッと出して喉のどをかきむしって悶もだえる。
「あはははっ！」
　腹を抱えて笑うレフ。
「騙だましたわね！」
　イリナの白い頬が恥ずかしさで真っ赤に染まる。
「ご、ごめん！　けど……はははっ」
「笑うな！　人間の飲み物なんて金こん輪りん際ざい飲まないから！」
　レフは落ちたコップを拾いながらイリナに微ほほ笑えみかける。
「ええ～？　美う味まかっただろ？　気分がすっきりしてない？」
「すっきり……？　ん……」
　イリナは首を傾げて口元に手を当てたが、ハッと目を見開いた。
「美お味いしくないっ！」
「今一瞬考えただろ」
「その口を閉じなさいよ！　噛かむわよ！」
　牙きばをひん剥むくイリナ。相手をするのがおもしろくなってきたレフは、コップを洗いながらイリナに微ほほ笑えみかける。
「炭酸檸檬水レモネードとか最高だぞ」
「ん？　れもねーど？」
「檸檬れもんの香りがして、さらに爽さわやかなんだ」
「へぇ……」
　と食いつきかけたイリナだが、ふっと醒さめたように声を低くした。
「……それで？」
「飲みたきゃ今度買ってやるよ」
「飲まないって言ってるでしょ」
「けど、香りなら楽しめるだろうし。炭酸水も本当は美味かったんだ

ろ？」

「不ま味ずかった！　聖水以下の毒！」
　人間のものは何が何でも認めたくないようだ。
「べつに我慢しなくてもいいのに……」
「あなたは牛乳だけ用意すればいいの。いいわね！」
　イリナはプンプンむくれて早足で歩きだす。
「おい、食堂はそっちじゃない」
「わかってるしっ……！」
　くるりと踵きびすを返したイリナは両手で両りよう頬ほほを押さえたが、耳たぶや額まで真っ赤なのは隠しきれていない。どれだけ意地っ張りなんだと、レフは笑いたいのを必死に堪こらえた。

　午前七時。
　食事を終えて独房に戻ると、シャワーの時間となる。
　イリナは看守所に用意されていた着替えを手に取り、「覗のぞかないでよ」と一言残してシャワー室へ入っていった。
　レフはシャワー室の扉の前に座って、イリナが出てくるのをぼんやりと待つ。
「はぁ、疲れたぁ……」
　普段の何倍も気を遣うので、肉体よりも精神的な疲労が濃かった。
「でも、炭酸飲んだときの、あの反応……ふふっ」
　今思えば、イリナに会う前に首筋を隠したことが馬鹿らしい。
　美しいが生意気で、人間嫌いを標ひよう榜ぼうしている吸血鬼。分類学上は人間ではなく、人間とは異なる特徴もある。だが、イリナと接していると、まるで人間の少女と過ごしているような錯覚を覚える。
「……実験体なんだよな」
　意識していないと、大事なことをうっかり忘れそうになる。

犬の墓ぼ標ひように祈っていたイリナの小さな背中がレフの脳裏に蘇よみがえった。いつも強気で平静を装っているが、命を失う覚悟ができているのだろうか。あのとき空を見上げて何を思っていたのだろうか。

「……あぁ、ダメだ。『モノ』扱いなんてできるかよ……」

イリナのことを考えれば考えるほど情が移ってしまうとわかっているのに、つい気にしてしまう。

「滞とどこおりなく訓練を進めて、実験飛行にそなえること……か」

与えられた指令を思い出すと、胸の奥がざわついた。レフの役目は打ち上げの直前までで、打ち上げの成否は天に任せるしかない。マールイのように墓ぼ碑ひに入ってしまうのかは、神様の気分次第だ。

「……はぁ」

悲しみを背負うと決意したものの、早くも重くのしかかっていた。

「……先のことはいい。今は高所恐怖症の克服だ」

シャワーの音を聞きながら、レフは気持ちを新たにした。

緋の瞳　Очи　алый

人間なら冷たさを感じる温度のぬるま湯をイリナは頭から浴びる。腰まである艶つややかな黒髪が、贅ぜい肉にくのない背中を覆おおうように流れる。細くて頼りない鎖骨は、遠心加速器の訓練で締めつけられた箇所が痣あざとなり、痛々しく腫はれ上がっている。

「とんだ失態を見せちゃった……」

イリナは跳出塔での訓練を思い出し、重い溜ため息いきを吐ついた。

地面を見下ろしたとたん、身体からだが震え、足が動かなくなった。

墜落する自分を想像して、吐き気に襲われ、心臓がどくどくと脈打った。

まさかあんなことになるとは思ってもおらず、自分が情けなくなった。

「そのうち……慣れるのかな……」

石せつ鹸けんの泡を身体に滑らせながら、イリナは別のことを考えようとする。

真っ先に出てきたのは炭酸水だった。

飲んだ瞬間、口が溶けて爆発しそうになったが、しゅわしゅわして爽さわやかで、頭がすっきりして心や身体に染みわたる感覚は、儀式で山や羊ぎの血を飲んだとき以来の衝撃だった。

「れもねーどたんさんすい……？　どんなだろ……」

身体を洗う手が止まり、檸檬れもんの香りがする未知の飲み物をしばし空想した。

「……ダメ。人間の飲み物なんて認めちゃいけない」

牛の乳で十分、とイリナは首を振った。

人間など、宿願を果たすために利用するだけの存在なのだ。

今は利用されてやればいい。

身体の汚れは流れ落ちても、心に根を張った闇やみが綺き麗れいに洗われることはなかった。

第三章　夜間飛行

藍の瞳　Очи　индиго

訓練がはじまってから、二週間が経過した。
日曜日は訓練も休みだったが、イリナは「本を読んでる」と頑かたくなに独房から出てこなかったので、レフは久々にひとりの時間を楽しもうと、行きつけのジャズバー『ズヴェズダ』へ向かった。

テーブル席が八つある隠れ家のような空間には煙草たばこの紫し煙えんが漂ただよっている。レフはカウンターの隅に腰かけ、電気蓄音機で再生される心ここ地ちよいジャズのリズムに身体からだを揺らす。赤く濁にごった茱グ萸ミの実の浸酒ナストイカをきんきんに冷やしたショットグラスで一息にあおると、身体の芯がカァッと熱くなった。
「ふぅー……」
店に来る道中、数人の候補生とすれ違ったが、挨あい拶さつを交わしただけでイリナについて尋たずねられることはなかった。皆はヴィクトール中将から告げられた『実験体について必要以上に知ることはない』という指示をしっかり守っており、レフは距離を置かれているようにも感じた。
「……イリナ、今頃まじめに自習してんのかな」
頭を空からっぽにするつもりで飲んでいても、気がつけば彼女が頭のなかにいた。
サガレヴィッチ副長官の嫌がらせのような訓練は続いていたが、そのおかげかイリナは極限状態にどんどん耐性がついていき、ついにはサガレヴィッチ副長官が十字架を握にぎりしめて悔しがるほどに成長していた。

検査も訓練も、パラシュート以外は順調だった。
イリナが少しは高所に慣れることを期待していたレフだったが、跳出塔からの滑走を何度やっても震えは止まらず、ショック療法として訓練塔からパラシュートが開いた状態で飛び降りさせたときには失神寸前になり、「吸血鬼殺し」呼ばわりされた。
今のまま打ち上げを迎えれば、七〇〇〇メートルからの降下時には確実に気を失い、着地失敗してしまう。
「なんとしても対処法を探さないと……！」
じっとしていられず、あてもないまま店を飛び出した。

「──今日は高所恐怖症を克服するための、特別な訓練をしようと思うんだ」
座学の前に、レフはイリナに切り出した。さすがのイリナも高所恐怖症を認めており、反論してこなくなっていた。
「どんなの……？」
「図書館でいろいろ調べてみた。まあ、人間用の克服法しか見つからなかったけど」
「人間用……」
ふくれっ面になるイリナ。
「聞くだけでも聞けって」
「わかった……」
レフはメモ帳を懐から取り出すと、イリナに読んで聞かせる。
「まず、『怖くない』という自己暗示は逆効果。高いところが怖いのは『落ちたら死ぬ』という動物的本能だから、否定しなくてもいい」
「ふーん……」
「それから、想像力が豊かすぎるのも原因のひとつらしい。もしかし

て、地面に衝突する姿を想像してないか？」
「してる……」
「そういう負のイメージを払拭して、良い想像をするんだ。たとえば……イリナの城は山の上にあったんだろ？　高いところは見晴らしがいいとか」
　イリナは澄ました顔でさらっと言う。
「人間を見下ろせるとか？」
　予期しない毒をぶつけられてレフは一瞬たじろいだ。
「ほかにないのか……」
「えーと……星が、近い」
「そうそう、綺き麗れいだよな。それから高さに慣れる方法として、屋上に立って一〇分くらい我慢するという方法もあるらしいが、イリナが飛び降りるのは、遥はるか上空の七〇〇〇メートルだ。ふつうの高さに慣れたところで意味がない気がしている」
「だとしたら、どうするの？」
「座学と体力トレーニングの予定を変更して、ちょっとした荒療治をする」
「え、え、荒療治……」
　びくびくするイリナに、レフは軍用飛行場の使用許可証を見せた。
「複座式の訓練機で、空を飛ぶ」
「飛ぶ!?」
　イリナは腰を抜かさんばかりに驚いた。
「空は気持ちいいぜ！　怖さなんて風の彼方かなたに吹き飛ぶはずだ」
「あ、あなたが、操縦するの……？」
「もちろん！　自分で飛ばすのは一〇か月ぶりだけどな」
　ニカッと微ほほ笑えみ、親指を立てるレフ。
　唖あ然ぜんとなったイリナだが、レフに「絶対落ちないから信じ

ろ！」「空は最高だから！」などと何度も熱く説得されるとついに折れ、「大丈夫、大丈夫……」とつぶやいて自分を納得させた。

午前四時、『ライカ44』から一〇キロ離れた平原にある軍用飛行場。

誘導灯の光る滑走路を、レフとイリナの搭乗した訓練機が離陸に向けて疾しつ走そうする。

操縦席にいるレフは酸素マスクに付けられた通信機で、後部のイリナに呼びかける。

「心配いらないからな！」

「うん……！」

バックミラーに映るイリナは、小さくなって上着の裾を握にぎりしめ、ぎゅっと目を瞑つむっている。

レフは速度計を確認する。

「Ｖ１……」

ジェットエンジンが噴射し、車輪が激しく地面と擦すれ、振動がシートに伝わる。誘導灯が高速で後ろに流れる。

「ＶＲ……飛ぶぞ！」

スロットル全開、レフが操そう縦じゆう桿かんを手前に引く。

機体が地面を離れ、ふわりと浮き上がる。

「ひっ……！」

離陸の瞬間、イリナが短い悲鳴を上げた。

「今……と、飛んだの？」

「ああ。ぐんぐん上昇してるよ」

コクピットを覆おおう天てん蓋がいの向こうには星の瞬またたく夜空が広がり、眼下では、湿地帯の沼が水鏡となって月を映している。

「どうだ？　綺き麗れいだろ」

「真っ暗……」
　イリナは目を瞑ったままうつむき、ふるふると震えている。
「目を開けろっ！」
「わ、わかってるわよ……」
　そーっと薄目を開け、警戒しながら栗り鼠すのようにちょこまか首を振るイリナ。そんな彼女に、レフは「右上を見てみな」と声をかけた。
　怖々と目を向けたイリナは、ハッと息を呑のんだ。
　銀色に輝く美しい月が浮かんでいる。
「あ……」
　あれほど怯おびえていたイリナが、景色にすっかり魅入られている。まるで恐怖を消し去る魔法を月にかけられたかのように。
「……」
「まだ怖い？」
　レフに問いかけられたイリナは胸に手を当て、ふぅ、と息を吐いた。
「よくわからない……。心臓はどきどきしてる……」
「けっこう慣れたように見えるけど」
「そうかしら……」
「だって震えてないし、目もしっかり開けてるだろ？」
「え……」
　イリナは言われて気づいたようだ。レフは彼女の変化が自分のことのように嬉しくて満面の笑みを浮かべる。
「はじめて自分の手で飛行機を飛ばしたときは翼を手に入れた気がして、地上に縛られることはないんだと人生観が変わった。君も恐怖ではなく自由を感じてくれたらいいんだけど」
「自由……」
　何かを感じ取りそうなイリナを見たレフは、もっと飛ぼうと決めた。
「予定外だけど第二段階にいく。加重訓練も兼かねて、一気に高度七〇

〇〇メートルまで飛ぶ！」
「へ？　ちょ、ちょっと、聞いてないけど!?」
　シートを揺すって動揺するイリナに、レフは無情に宣告する。
「逃げられないぞ？　ほら、しっかりつかまってろ！」
　操そう縦じゆう桿かんを引いて機首を上向かせると──
「今度は目を閉じるなよっ！　推力増強装置オーグメンター！」
　排気口から紅ぐ蓮れんの炎が噴き、猛烈に加速。身体からだに強烈な圧がかかり、イリナの顔がひきつる。
「ひぃ……！」
　漂ただよう雲を一瞬で突き抜け、高空へと上昇。
　そしてわずか数十秒後、視界を遮さえぎるもののない星の海に到達。ゆったりとした水平飛行に戻すと、身体がふわりと軽くなる。身も心も解き放たれるようなこの感覚がレフは大好きだった。
「到着！」
「ひぃ……ふぅ……。あなた……殺す気でしょ……」
　イリナの恨みがましい視線を後頭部に感じながら、果てなく広がる大空を指さす。
「宇宙から帰還してきたときは、この高さから空中に放り出されることになる」
　落ち着きを取り戻したイリナは、輝く星々を仰ぎ見て、しみじみと感嘆する。
「……想像もつかないわ」
「しばらく遊覧飛行するから、高こう高こう度どの世界に慣れるんだ」
「うん……」
　イリナのために久しぶりに操そう縦じゆう桿かんを握にぎったレフだったが、地表と宇宙の境目を飛んだことで、内なる魂がふつふつと高揚していた。

宇宙から見下ろす地球を想像する。きっと青くて美しい球体なのだろう。無重力空間を飛ぶ感覚は、大空の飛行と全然違うのだろうか。地球を客観的に見たら精神が崩壊するという学者の意見があるが、レフは絶対に耐えられる自信があった。

だが、補欠では宇宙飛行の夢は叶わない。飛ぶことが決定しているのは、後ろで静かに風景を見ている吸血鬼の少女だった。

「なあイリナ……」

レフは前を向いたまま、ぽつりと声を漏もらした。

「なに？」

「……ああ、いや」

感傷的になって、宇宙への想いなど、よけいなことを口走りそうになった。これまで愚ぐ痴ちや弱音を誰にも吐露したことがなかったというのに、なぜか彼女には言いたくなってしまった。

「もし気分が悪くなったら、早く言えよ」

気遣いつつ、宇宙を飛べる彼女にうらやましさも感じていた。仮に自分が実験体として指名されていたら快諾していたのにとレフは思う。しかし、その一方で、人間嫌いの彼女を純粋に応援している自分にも気づいていた。任務云うん々ぬんではなく、頑張りに応えたいと。

夜の終わりが近づき、世界は透きとおった濃紺になっていく。それと同時に、北西の果て、闇やみに隠れていた険しい山岳地帯が薄ぼんやりと姿を現した。共和国とリリット国を分かつ山脈だ。かつての大戦時には激しい山岳戦が繰り広げられたのだが、雪の帽子をかぶった山々は美しく、遠目に見る分には、暗い歴史は影も形もない。

「イリナの故郷は、あの向こうだよな」

「ん……」

窓の向こうを、イリナはじっと見つめている。その眼まな差ざしは、

これまでレフに見せたこともないような愁いを帯びている。
「もっと近づいてみるか？」
　声をかけると、イリナは見られたくないものを見られたというようにハッと表情を変えた。
「いい」
　寂しさと怒りの入り混じった声で否定すると「もう帰ろ。日も昇るでしょ」と強く続けた。
　故郷で何かあったのだろうかとレフは少々ひっかかったが、たしかに朝も近いし燃料も減っているので、操縦桿を押して降下をはじめた。
　イリナはずっと黙りこくっていて、レフも声をかけづらく話しかけないでいたが、地上が近づいてきたころ、通信機越しにポソッとイリナの声がした。
「ありがとう」
「えっ？」
　彼女らしからぬ言葉だったので、レフは聞き間違いかと思い、バックミラーでイリナを見た。するとイリナは天てん蓋がいの外に目を向けたままポソポソと続ける。
「あなたのおかげで、空に慣れたみたい」
「あ、ああ……そりゃよかった」
　酸素マスクで顔が隠れているのでイリナの表情は確認しづらいが、少し照れているように見える。
　と、イリナがじろっと視線を合わせ、レフの座席の背中をゴツンと蹴けった。
「前向きなさいよっ！」
「！」
　イリナの大声が鼓こ膜まくを貫き、誤って操そう縦じゆう桿かんを引きそうになった。

「頼むから叫ばないでくれ……」
　レフは視線を戻し、正面を向く。ずっと反抗的だったイリナに感謝されたことで、少しだけ心が通じ合った気がした。
　淡く白みはじめた東の地平線を眺めて、レフは思う。
　やっぱり、空は自由なんだ。

　飛行場に戻ると、場内がなにやら慌あわただしい。日の出直後にもかかわらず、輸送機の飛行準備が開始されている。
「なんだ……？」
　困惑するふたりの前を、台車が荒々しい音を立ててとおりすぎる。荷台の箱には『緊急輸血用パック』という記載があった。
　間違いなく、どこかで、何かが起きた。
　レフは近くにいた職員に尋たずねる。
「どうしたんですか？」
　問われた職員は顔をしかめたが、レフが身分証を呈示すると、言葉少なに答えた。
「アルビナールで事故が発生し、数人の技術官が負傷したとのことだ」
　その回答にレフは違和感を覚えて追及しようとしたが、職員は勘弁してくれという表情で去っていった。
「あるびなーる？」
　首をかしげるイリナに、レフは一般国民が知り得ない内情を伝える。
「ロケットや人工衛星を打ち上げる重要拠点だ」
『アルビナール宇宙基地』は赤道近くの岩石砂漠に建設された〔閉鎖行政領域体〕のひとつで、『ライカ44』からは南東に二〇〇〇キロも離れた僻へき地ちにある。
「数人が負傷した程度の事故で、遠く離れた飛行場から輸血パックを運

ぶか……？」
　失敗は隠す共和国のことだ。恐ろしい裏があるのではないかと、レフはざわつくような胸騒ぎに駆られた。

　果たして、レフの予感は的中した。
　国営放送は「国家委員会の委員長が、不運な飛行機事故で亡くなった」と詳細をぼかして報道したが、それは一般市民向けの虚偽報告であった。
　ヴィクトール中将の口から衝撃的な真実が明かされたのは、事故から二日後のことだった。
　大陸間弾道ミサイルの発射試験中に大爆発が起き、視察に訪れていた委員長を含む、一五〇名近い命が奪われていた。
　爆発の原因は「電気回路の不具合に技術官のミスが重なった」と結論づけられていたが、「計画を潰つぶそうとした何者かの陰謀」という不穏なうわさも流れた。それも、連合王国の諜報員の仕業ではなく、内部犯という疑いで。
　そのような疑惑が出てしまう理由は、共和国の台所事情にあった。
　惑わく星せい探査など二〇を超える宇宙開発計画を共和国は抱えていたものの、国家予算は限られており、各計画責任者はあらゆる手を使って予算を奪い合っていた。一〇〇〇人の部下を持つコローヴィンでさえも国立科学院の支援が必要であり、一方、コローヴィンの政敵であるグラウディン陣営には、政府首脳をパトロンに持つ科学者もいた。
　純粋に宇宙を夢見ていたレフは、候補生になって欲望にまみれた世界を知ったとき憂ゆう鬱うつな気持ちになった。
「こんな裏側、イリナには言えないな……」
　よりいっそう人間に不信感を抱くだろうし、これ以上人間のことを嫌

いになってほしくない。

　アルビナールの大惨事は『ミェチタ計画』にも悪影響を及ぼした。事故死した委員長が計画の管理権限を持っていたため、代理人が決まるまではロケット開発を一時停止するしかなかったのだ。その煽あおりを受けて、候補生たちの訓練も中断。レフとイリナも例外ではなく、特殊装置や飛行機の使用が制限され、降下塔での練習を繰り返していた。
　降下塔での訓練は、八〇メートルの高さからパラシュートを開いたまま飛び、マットに着地するというものだ。本来は受け身を取ることが主眼に置かれた訓練なのだが、イリナの場合は高所恐怖症克服の意味合いが強かった。
「ひぃぃ……！」
　悲鳴を上げながらパラシュートを広げてゆらゆらと舞い降りてくるイリナに、レフは地上から叫んでアドバイスを送る。
「五点着地だぞ！　つま先、すね、もも、背中、肩！」
「わ、わかってる……！」
　ぎこちない受け身をとりながら着地したイリナは、勢いあまってマットに顔を打ちつけた。
「痛ぁっ……！」
　震えて腰を抜かしたときに比べればイリナはかなり落ち着いてきたが、飛行機で飛ぶのとパラシュート降下はまったく違うものであり、なかなか思いどおりにはいかなかった。とはいえ、飛び降りられるようになっただけでも大きな進歩だとレフは手ごたえを感じていた。
「うぅ……鼻打った……」
　起き上がったイリナは、鼻の頭を赤くして涙目になっていた。
「……ちょっと休憩しようか」

　マットに並んで腰かけ、水筒の水を飲みながら雑談する。夜風が寒くてレフは上着の前をぴったりと閉めるが、イリナはまるで平気そうにしている。
「そういえばアルビナールの事故、結局どうなったの？　もしかしてこのまま計画中止になったりするの？」
　イリナに問われて、レフは内心焦った。あまり突っ込まれたくなかったので適当に誤ご魔ま化かしてきたのだ。もし中止になればイリナの実験飛行も無期延期になるが、現時点では計画続行という方針で上層部は動いていた。
　しかし嘘うそもつけないので正直に伝える。
「あと数日もすれば委員長の後任が決まって、再開するらしい」
「そうなのね……」
　イリナは感情の読み取れない声で静かにつぶやいた。何か気の利いたことを言おうとレフが頭を悩ましていると、イリナのほうから話しかけてきた。
「気になってたんだけど、どうして宇宙基地でミサイルが大爆発したの？」
「エンジンの燃料のせいだけど」
「違うわ。ミサイルの発射試験をしていたことについてよ」
「……もしかして、ロケットの本来の使用目的を知らないのか？」
　イリナは小首を傾げた。
「宇宙に行くものでしょ？」
「いや、戦略兵器だよ」
　イリナの顔が曇る。
「……どういうこと」
「核弾頭を連合王国に打ち込む代わりに、人間を搭載したキャビンを宇宙へ飛ばすのさ。宇宙飛行士というのは、ようするに人間ミサイルだ。

神様もびっくりして逃げ出すかもな」
　候補生のあいだで流行った冗談だが、イリナはくすりとも笑わなかった。
「……冗談だよ。俺は、宇宙へ飛ぶためだけに、ロケットを開発してほしいと願ってる」
　その言葉を聞いたイリナは、レフの目をじっと見つめた。
「そういう未来は訪れるの？」
　レフは苦笑し、頭を掻かく。
「ま、理想論だよ」
「あなたみたいに思っている人間は少ないということ？」
　子どものように率直なイリナの質問に、レフはたじたじになりながらも答える。
「現場で働く候補生や技術官の大半は、平和利用を願ってるよ。開発競争なんて関係なく、純粋に夢を追っている。でも、表立って声を上げることはできない」
「どうして？」
「クビにされてしまうからさ」
　イリナは口をへの字に結んだ。
「ほんとくだらないわ」
「今はまだマシだよ。戦時中なんてもっとひどくて……俺の恩師なんて、秘密警察に連行されてしまったんだから」
「連行……？」
　レフは遠い目をして、まどろみはじめた三日月を眺める。
「終戦直前、初等学校の先生に『飛行機は空を飛ぶもので、人を殺す武器ではない』と教えられた。その翌日、先生は村から消えてしまった。本当のことを言っただけなのに、『民衆の敵』扱いされたんだ」
　レフの横顔を見つめて聞いていたイリナは「ひどい」とつぶやいた。

レフはしんみりした顔で頷うなずくと、胸に手を当てる。
「もし先生が生きているなら、俺が宇宙飛行士になった姿を見てほしい」
「うん。無事だといいわね……」
　目を伏せたイリナを見て、レフはよけいなことを語ってしまったと口をつぐんだ。今は戦時中ではないとはいえ、もし〔運送屋〕に聞かれたら問題発言に受け取られかねない。どうして彼女にこんな話をしたのだろうか。
「……昔話はここまでだ。さあ、訓練を再開しよう」
　レフは話を切り上げるように、水筒を片づけた。
　アルビナールの事故から一週間。後任が決定し、ゲルギエフ第一書記の鶴の一声で『ミェチタ計画』が再始動。特殊装置や飛行場の使用も解禁された。
「『呪われし種』なんか打ち上げようとするから、事故が起きたんだ」
　相変わらずのサガレヴィッチ節にもイリナは負けず、特殊装置の訓練を順調にこなしていき、訓練塔からのパラシュート降下でもきちんと受け身が取れるようになった。
　そしていよいよ、高空からの実戦降下訓練をする段階に進んだ。無論、初回からイリナ単独で降下するわけではなく、教官役のレフがイリナの背中に被かぶさっていっしょに降下する『タンデムジャンプ訓練』となる。

　午前三時。粉雪の舞う、凍えるような夜更け。
　ヴィクトール中将から指名されたパイロットが操縦するヘリで、レフとイリナは空へ飛び立った。
　雲を見下ろすほどの限界高度まで上昇すると、降下体勢に入る。防寒

仕様のフライトジャケットとヘルメットを装着したふたりは、レフの腹部とイリナの背中を密着させた状態でハーネスに繋つながれ、降下口の縁に座っていた。
　がちがちに硬直しているイリナの耳元で、レフが降下について話す。
「宇宙から帰還してくるときは、キャビンから射出後、ブランコに座ったような体勢でパラシュートを開く予定だ。それとは降下体勢が違うが、基本を覚えるに越したことはない」
「……」
　レフの言葉は、イリナの耳を素通りしたようだった。
「おーい……」
　ヘルメットをこつんと叩たたくと、イリナはビクッと身体からだを揺らした。
「こっ、こ、ここから飛び降りるのは、高すぎるんじゃない？」
「今日は俺が全部操作するから。身をゆだねてくれればいい」
「で、でも……」
「ちょっと寒いけど、風はなくて穏やかだし、気持ちいいジャンプになる。その代わり、絶対に暴れるなよ？　パラシュートの紐ひもが絡まったら墜落死まである」
　イリナは今にも泣きそうな顔つきで牙きばを剥むいた。
「脅すのはそのくらいにしなさい……」
「ははっ。じゃ、飛び出しイグジツトの姿勢を取れ。両手を胸の上で交差させて、肩を掴つかむ」
　指先がジャケットに食い込むほど強くイリナは両肩を掴むと、覚悟を決めたように息を大きく吸い込んだ。
「よし行くぞ。三、二、一、〇！」
　レフは素早く数えると、ためらうことなく空中に飛び出す。
　硬直したままのイリナを腹這ばいの姿勢にさせ、落下しながら小型の

傘ドローグシユートを出す。傘さん体たいは無事に開いたが、イリナが金切り声で騒ぐ。
「止まらない!?　開いたんでしょ!?」
「問題ない！　これは主傘じゃなくて、姿勢制御と予備減速用だから！」
「早く主傘を開いてよ！」
「落ち着けっ！　落ちてるっていうより、クッションに乗って空に浮かんでる感じじゃないか!?」
「え、え、え」
　パニック状態に陥っているイリナ。レフはイリナの背中越しにでも、彼女のひきつった顔が想像できた。
「自由落下を続けるから、両手両足を開いて大の字になって！」
「こ、こう……!?」
　イリナはおずおずと手足を伸ばした。
「そうそう！　頭を上げて、エビ反りの姿勢で！」
　レフの助言で正しい姿勢を取ったイリナだったが、しばらくすると、苦しそうに手足をばたつかせた。
「……っ……うぅ、息が、苦しい……！」
「鼻を両手で包むように囲んで！　風の抵抗が減って楽になるから！」
　言われたとおりに手を持っていくイリナ。
「ふう～……」
　最初はあたふたしていたイリナだが、時間が経つにつれてパニックは収まり、降下が安定していった。
　雪雲を抜け、粉雪を舞う空を自由落下する。
「いい感じだ！」
「主傘はまだなの!?　地面近づいてきてる!!」
「開くから慌あわてるな！　ほらっ！」

　シルクの主傘が大きく膨ふくらんで落下速度が緩ゆるやかになると、イリナは大きな安あん堵どの溜ため息いきを吐ついた。
「はあ～……」
「どうだった？」
「……肌のぞわぞわが治らない」
「無事生還するためには、地上までの目測の仕方、着陸、着水の方法。強風やきりもみ状態への対応。いろいろ学ばないといけない。少しずつ身体からだで覚えていくぞ」
「わかった……」
　数分後。
　地上に降りたとたん、イリナは骨が抜かれたようにペタリとへたりこんだ。
「……」
「大丈夫か？　前みたいに、また腰が抜けたか？」
　レフがハーネスを解いて声をかけると、イリナはよろめきながらも、自分の足で立ち上がった。そしてジャケットに付いた草をサッと払うと、胸を張って決意を漲みなぎらせる。
「今日、もう一回飛べる？」
「えっ？」
　思わぬ提案に、レフは目を丸くした。
「日の出までまだ時間あるでしょう？　忘れないうちに、おさらいしたいんだけど」
「あ、ああ。パイロットに頼んでみるけど……」
　前向きな姿勢にレフは感心しつつも、同時に疑問も抱いた。各種技能を身につけなければ命にかかわるという点を考慮しても、積極的すぎるのではないか。
　イリナは逃げ出すどころか、まったく不平不満を漏もらさないことに

も違和感がある。
　もしかして、弱みでも握にぎられているのだろうかと不安がよぎる。
　パラシュートを畳んでいるイリナを見たレフの脳裏に、以前、飛行機からリリット国を見たときの寂しげな声が蘇よみがえった。
　家族を人質に取られていたり、自分が生いけ贄にえとなることで誰かが救われるという密約があるのかもしれない。
　共和国は、目的を達成するためなら、なんでもするから。
　―ゲルギエフが政権をとって以降は『平和愛好国』の名のもとに弾圧や粛しゆく清せいは減ったが、それでも〔運送屋〕は以前と変わらず極秘裏に活動をしていた。
「渋しぶい顔をしてるわね？」
　レフが考え込んでいると、イリナが横から覗のぞき込んできた。
「ん……、ちょっと疲れただけだよ」
「私がこんなに元気なのに、情けないわね」
　間違いなく空から元気だが、朗ほがらかに気丈に振る舞うイリナを見て、レフは苦笑した。
　彼女が実験体になった経緯を訊きくべきか、レフはずっと悩んでいる。もしよからぬ事情があったりすると同情してしまい、監視役として冷静な判断ができなくなる気がしていた。
　だから深入りせず、一線を引いたまま、ひたすらレフは降下を繰り返す。
　だが無視しようとすればするほど、彼女の存在は心にじわじわと浸潤していった。

　レフがイリナと出会って約ひと月が経った一一月半ば、ついに打ち上げの日程が決定した。起きたばかりで眠そうな目をしていたイリナにそ

のことを告げると、彼女の瞳ひとみが覚悟の色に変わった。
「発射場はアルビナール宇宙基地。日時は三週間後――二月一二日、午前五時四分だ」
「いよいよ、なのね……」
　感情の昂たかぶりを抑えているようなイリナに、レフは淡々と飛行予定を伝える。
「大気圏を突破して軌道に乗ったあと、時速二八〇〇〇キロメートルの速度で、無重力空間を六分間飛ぶ。地球の周りを一時間五〇分弱かけて一周し、基地の近くの砂漠地帯に帰還する。それまでに、なんとしてもパラシュート単独降下を成功させるぞ」
「ええ……」
　緊張した面おも持もちでイリナは深く頷うなずいた。
　慎重を期して、まだ単独での降下訓練をさせていなかった。もしイリナに骨折のような大怪け我がをされると、打ち上げ自体が中止になってしまうためだ。
「ところで、今日、サングラードから重要な物が届いたんだ」
「重要な物……？」
「イリナの宇宙服だよ」

　科学製造企業の開発者たち五名が宇宙服一式を手に、訓練センターの一室にやってきた。試着してサイズを確認するためである。
　レフとイリナの前に、見慣れぬ装備がずらりと並んでいる。
　顔をすっぽり覆おおう大きなヘルメット、強きよう靭じんな合成ゴムで加工された青色の与圧服、鮮やかな橙だいだい色いろの上着。
　感嘆の溜ため息いきを漏もらすふたりに向けて、無精ひげをはやした開発者は胸を張って語る。
「これらの装備は耐圧性と気密性を兼かね備え、派手な橙色は真っ白な

雪原に降下した場合に発見しやすいようにするためだ」
　レフは自分が着るわけでもないのに鼓動が高まり、手のひらに汗が滲にじんだ。その気持ちを知ってか知らずか、イリナはヘルメットを手に取って、レフに見せつける。
「すごく重い……」
「俺たち候補生でも、採用品は着たことないんだぞ」
「ふふっ、私が一番乗りなのね」
　イリナは得意げに微ほほ笑えみ、試着をはじめる。宇宙服はひとりで着られないので、開発者が装着を手伝う。レフはその様子を眺めていると、心を掻かきむしられるような焦燥感に駆られた。補欠の自分は飛べるかすらも不明だが、彼女はもうすぐ飛ぶんだよな、と。
「──ふぅっ、これで完成……？」
　二〇キロある装備を身に着けたイリナは、頑強なヘルメットとゴワゴワした与圧服にすっぽり包まれ、どう見ても服に着られている感じだった。
　イリナは開発者に囲まれて、様々なチェックを受ける。
「着心ごこ地ちはどうだ？」
「暑くて重くて動きにくい……蒸し風呂みたい……」
　その答えが気に入らなかったのか、開発者は口調を荒くする。
「それだけ気密性が高いんだ。極限の世界へ行くのだから我慢しなさい。ちなみに、帰還時はその格好でパラシュート降下することになる」
　イリナは宇宙服を着たまま「三〇回跳んで」「全力で走って」「五〇回屈伸して」など矢継ぎ早に指示され、小さな身体からだを必死になって動かす。レフは見ていてちょっと可か哀わい想そうになったが、心を鬼にして静観する。
　そして、すべてのチェックを終えたイリナは息つく暇ひまもなく、身ぐるみをはがされるように宇宙服を脱がされた。

　汗で全身がびしょ濡ぬれになったイリナは下着や肌の色が完全に透けているのだが、のぼせて頭がぼんやりしているようで、自分の姿にまで気が回っていない。
「予想以上に大変だったわ……」
「ん、そうみたいだな……」
　レフが直視できずに目を逸そらすと、イリナは姿見に映った自分を見て「ひっ！」と短い悲鳴を上げた。慌ててその場にしゃがみ込むと、恨みがましい視線をレフに向ける。
「じろじろ見てた……」
「み、見てないって！　誤解だ！」
　あたふたするレフに、イリナは真っ赤な顔で牙きばを剥むく。
「私の担当を名乗るなら、着替えくらい用意しなさいよ……！」

　着替えのためにトイレに入ったイリナをレフは待ちながら、自分の将来について考えていた。コローヴィンには「未来に期待している」と声をかけてもらっていたが、その激励が候補生への再昇格である確証などいっさいなかった。そして彼女が打ち上げ後にどういう待遇となるのかも不明だった。無事生還した実験犬たちはデータを採取されながらのんびりと暮らしているが、ひょっとして自分はこの先も彼女の付き人として独房暮らしになるのではと想像すると、胃がきりきり締めつけられた。
　額に手を当てて何度も溜ため息いきを吐ついていると、カツカツと靴くつ音が聞こえてきた。振り向くとトレーニング用のジャージを着たローザが不愉快そうな顔つきで近づいてくる。
「吸血鬼が宇宙服の試着をしたらしいわね」
「まあ、全然似合ってなかったけどな」

「ずいぶん真ま面じ目めに訓練をこなしているみたいじゃない」
　褒ほめているのではなく、何か言いたげな棘とげのある声。
「うん、頑張ってくれてるよ」
　レフは適当に受け流そうとするが、ローザは立ち去らず、訝いぶかしげな目を向ける。
「あの子、なにか企んでいるんじゃないの。連合王国の諜報員だとか」
「いやいや。俺がずっとついているが怪しい行動をとったことは一度もない。それに、ここに連れてこられる前に、家族構成などは念入りに調査されているはずだ」
「ずいぶん信じているのね」
「俺は任務をこなしているだけだ」
「任務……？」
　ローザは苛いら立だたしげに胸の前で腕組みした。
「あなたは、吸血鬼なんかに先を越されるなんて、屈辱だと思わないの？」
「うらやましいとは思ったが、屈辱とは思わない」
　レフが否定し続けていると、ローザは呆あきれたように首を振った。
「ほんとお人好し。まあ、あなたは『補欠』だものね。一番手を争う意識が希薄なのかもしれないわ」

あきらかに、イリナに先を越されることを妬ねたんでいる。以前食堂でイリナが自己紹介したときのローザの厳しい視線は、敵対者に向けるそれだったというわけだ。
「ふっ。まあ、どうでもいいけど」
腕組みを解いてローザは自じ嘲ちようし、ひどく冷たい声色で続ける。
「吸血鬼なんて、仮に生還したとしても、実験が終われば廃棄されて、存在すらなかったことにされるでしょうし」
「廃棄……？」
レフの心にさざ波が立った。
「考えてもみなさいよ。犬と違って話ができる実験体を、いつまでも生かしておくと思う？　祖国にとって不都合な事実が明かされる前に、芽は摘んでおくはずよ」
反論できなかった。
どう転んでも、イリナの運命は明るくない。「実験に協力してくれてありがとう」と解放されて故郷に帰るということは、共和国が崩壊しない限りありえない。
「涙ぐましいわね。殺されるのに努力して」
「そんな言い方はないだろ」
「もしかして、あの子は訓練を張り切って『役に立つから殺さないでほしい』と媚こび売ってるんじゃないの？」
「イリナが命がけで頑張ってる姿を見たら、そんなこと言えないはずだ」
レフが少し語気を荒らげると、ローザは喧けん嘩か腰でつっかかってくる。
「肩入れしちゃって。噛かまれて眷けん属ぞくになったんじゃないでしょうね？　それとも、ずっとふたりでいるみたいだけど、色目でも使

われた？」
　自分のことをけなされたわけではないのに、レフは怒りを抑えられなかった。
「いい加減にしろ！　彼女はそんな人間じゃない！」
「人間？」
　ローザは目を見張った。
「あなたはアレをそういう目で見ているの？」
「あっ……？」
　勢いで口から出てきたとはいえ、レフは自分の発言に動揺を隠せない。
「言い間違えだよ！　そんな細かいこと、どうでもいいだろ……！」
　必死に取り繕つくろうレフを、ローザは軽けい蔑べつするような眼まな差ざしで見る。
「情にほだされて考えが甘いから補欠なのよ。『呪われし種』なんて、実験犬と同様に『モノ』として扱うべきでしょ」
　候補生として取るべき態度を指摘され、レフは首の後ろを掻かく。
「自分が甘いやつだっていうのは、よくわかってるよ……。でも、呪われたなんてのはくだらない偏見だ。二度と口にするな」
「はいはい……」
　うんざりと肩をすくめたローザの視線がスッとレフから外れ、トイレの出入り口に向いた。レフも気配を感じて振り返ると、イリナが着替えを握にぎりしめていた。
「あっ……」
　まずいことになったとレフが場を乗り切る言葉を探しているうちに、イリナはすたすたとローザのもとへ歩み寄り、正面に立った。
「私に言いたいことでもあるの？　それなら直接言えばいいでしょ？」
　一回り背の低いイリナが鋭するどい目つきで見上げると、ローザは一

歩も引かずに顎あごを上げてイリナを見下ろす。
「私は、あなたの打ち上げが成功したとしても認めない」
「人間なんかに認めてほしくないんだけど」
「吸血鬼なんかに言われたくないわね」
　冷たい火花が散り、放っておけばつかみ合いに発展しかねない緊張感が漂ただよう。
「ふたりとも、まあ、落ち着け……！」
　猛獣の檻おりに飛び込む覚悟でレフが割って入り、強引に仲裁する。
「……ふん。せいぜい死なないように気をつけるのね。レフも血を吸われないように」
　捨て台詞ぜりふを残し、ローザは去っていった。その背中を睨にらんで悔しげに歯噛がみするイリナに、レフはおそるおそる尋たずねる。
「ずっと聞いてたのか……？」
「途中から」
　イリナはふくれっ面のまま、頭を掻かきながら答えた。「殺される」とか「廃棄」とかまで聞かれたのかとレフは気にかかったが、それを追及されると返答に困るので、突っ込んで訊きけない。かと言って沈黙するのも嫌なので、当たり障さわりのない慰なぐさめの言葉をかける。
「気にするなよ、ローザってほんと強気で、誰に対してもあんな感じだから。とくに君が女性だから余計に……」
　するとイリナは、真っすぐにレフを見た。
「あなたは私のことを、どう思っているの？」
「えっ……？」
　思いもよらぬ質問に、口が開いたままになった。
　するとイリナは慌あわてて手を胸の前で振った。
「誤解しないで！　へんな意味じゃないわよ！　長くいっしょにいるのに、私についてあまり聞かないから気になっただけ」

　死別したときのことなどを考えて敢えて触れないようにしてきたレフだが、それをそのまま伝えるのはさすがにできないので、別の理由で流すことにした。
「んー……無理やり連れてこられたのに頑張ってるなとは思ってたけど」
　するとイリナは、ぽかんとなった。
「誰かから聞いたの？　無理やりって」
「え？　いや……そうかなって」
　レフがそっと顔色を窺うかがうとイリナは目線を上にあげて、言おうかどうか迷うようなそぶりを見せてから、言った。
「無理やりは誤解。私のほかにも候補はいたけど、私は自ら望んで来たの」
「望んで……!?」
　甚はなはだしい勘違いをしていたと知ったレフは軽い衝撃を受けた。たしかに立候補ならば、各種訓練に積極的なのも理解できる。
「じゃあ、弱味を握にぎられてるとかはないんだ……？」
「なにそれ？　たとえばどういうこと？」
「……家族の身柄を拘束されているとか」
　イリナの目に一瞬狼ろう狽ばいが浮かんだようにレフは感じたが、すぐに彼女は首を強く横に振った。
「ありえない。勝手にねつ造しないでくれる？」
「すまない……」
「……もういいわ。行きましょう」
　家族について触れられたくないような雰囲気でイリナは話を切り上げると、くるりとレフに背を向け、訓練室へと歩きはじめた。
　どうも釈然としない。ここに自ら望んで来たことと、訓練機で飛んだときに故郷を拒絶したことが重なる。

「家出……とか？」
　何を抱えているのか気にかかるが、くわしく訊きくと再び心を閉ざされそうだったので、ぐっと飲み込んだ。

　その後の訓練も、イリナはいつもと変わらず熱心にこなした。そんな彼女の姿を見ていると『廃棄』のことを聞かれたとは思えず、レフは安あん堵どした。だがレフ自身の頭にはその残酷な言葉がこびりついており、彼女と話すたびにチクッと胸の奥が痛んだ。

　一一月も後半に入ると、霜の精マロースと呼ばれる北極気団が氷の息を吹き、身体からだの芯まで染み入る冷たさが『ライカ44』を包む。街路の並木は雪帽子を被かぶり、人工湖には厚い氷が張る。
　長く厳しい冬のはじまりである。
　底冷えする独房では、支給品の軍用コートに身を包んだレフが、上着だけで平然としているイリナに次週の予定を告げる。
「週明けから『無響低圧室』での孤独訓練だ」
「なにその怪しいものは……」
　聞き慣れない訓練にイリナは眉まゆをひそめる。
「無響低圧室というのは、空気中の酸素の割合を高めに設定し、圧力を下げた気密空間のことだ」
　そこでは外部の音が聞こえないどころか、室内の音も壁に吸収され、空気もまったく動かない。そんななか、身体からだ中にセンサーを付けられ、何日もひとりで過ごす。定められた時間がきたら外部に無線で連絡するのだが、外部からの返答はない。
「……なぜそんなことをするの？」
「飛行士が搭乗するキャビンは、外部とは完全に切り離された空間だ。

その孤独に慣れることが目的のひとつ。もうひとつの目的は、不測の事態のシミュレート。宇宙にたどりついたはいいが、トラブルが発生して地球に帰還できず、長時間漂ただようことになるかもしれない。……これは、ないことを願うしかないんだけど」

　事故の内容をイリナに伝えるのが、若干気まずい。搭乗者が注意して避けられるものではなく、発生したら致命的だからだ。

　話が進むにつれてイリナの表情が険しくなっていく。

「そこには、どのくらい閉じ込められるの？」

「一日以上、一〇日未満ということしか教えられない。鍵かぎが開いたら終了だ」

「はぁ……」

　イリナは肩に垂れた髪をつまんで、溜ため息いき交じりにねじる。想像するだけで気が滅入るのだろう。レフ自身、もっとも苦手とする訓練だった。

「それで……監禁されるのは精神的につらいから、明日の休日、行きたいところがあれば行って、気晴らしすることを勧めるよ。その、まあ……もれなく俺の監視つきだけど、もしよければ……」

　女性を遊びに誘うことに慣れていないレフは、口がもごもごとなった。

　イリナは無言でまじまじとレフを見つめていたかと思うと、急に目が泳いで髪をいじりはじめた。

　その反応にレフは困り、軍用コートのボタンを無意味に外したり嵌はめたりする。

「……あ、あの、嫌なら、いいし……」

　髪をいじっていたイリナは、レフと目線を合わさずにつぶやく。

「あなたは休みの日、どこへ行っているの……」

「俺？　俺は……ジャズバーかな」

「……それでいいわ」
「へ……？」
　イリナは目を逸そらしたまま答える。
「じゃずばーでいいと言っているの」
　意外すぎる回答にレフは戸と惑まどう。
「ジャズ、好きなのか？」
「え？」
「だって、酒は駄だ目めって言ってたし……」
「その……ち、違うわよっ……その……」
　イリナは困ったように髪の先をねじるだけで答えないので、レフは念を押す。
「休日だとけっこう人もいるけど、いいのか？」
「え？　え？」
　二度訊ぎきしたイリナの反応から、レフは察した。
「もしかしてジャズバーがどういう場所か知らない？」
「……」
　髪を触りながら口をとがらせるイリナ。レフがしばらく黙っていると、イリナの頬ほおがじわじわと紅こう潮ちようしていく。
「知らないんだな……？」
　レフが問いかけても、イリナは唇を噛かんで押し黙っている。
「……まあ、酒以外にも飲み物はあるし、音楽を楽しめばいいと思うけど……。でも、どうしてジャズ―」
「とにかく連れてけばいいのっ！」
　イリナはそっぽを向いて棺かん桶おけに入ってしまった。
　ぱたん、と蓋ふたが閉じられる。
「あ……」
　これまで人との接触を嫌っていたのにどういう心境の変化だろうとレ

フは気になったが、イリナに訊いたところで答えてくれそうになかった。
「というか……ふたりで、バー……？」
　想像しただけで、腹のあたりがもぞもぞした。

　そして休日。
　レフは非番用のレザージャケットとコットンパンツ、イリナは首飾りをつけて耳あて帽を被かぶり、膝ひざまで覆おおい隠すような黒いポンチョという格好で研究所を出た。
　ジャズバー『ズヴェズダ』へ向かって、薄く雪の積もった舗装路を歩く。
　普段は飾りけのないジャージや窮屈な軍服ばかりだったせいで、ゆるゆるのポンチョを着たイリナが新鮮に感じられる。
「私服で並んで歩くの、はじめてだな」
「落ち着かない……」
「俺も……」
「私も……」
「……寒いな」
「べつに……」
「……」
「……」
　息苦しいような沈黙が訪れた。レフは何を話していいかわからず、道端に落ちている松まつ毬かさをなんとなく蹴けったり、イリナはイリナで煙突から立ちのぼる煙を眺めたりしている。
　会話が途絶えたまま居住区に入り、ネオンの灯ともりはじめた商店街に着いたところで、ミハイルと三名の候補生が前からやってきた。ミハ

イルはレフとイリナに気づくと、にこりともせず軽く手を上げた。
「奇遇だな。どこ行くんだ？」
　会話のきっかけができて、天の助けと内心喜ぶレフ。
「『ズヴェズダ』だよ。そっちは？」
「玉突きさ」
　ビリヤードで玉を突く仕草をして、ミハイルはイリナに目をやった。
「君、ローザとやりあったらしいね」
「あんなの相手にしてないわよ」
　イリナがうんざりした様子で答えると、ミハイルと候補生たちは顔を見合わせて苦笑した。
「何がおかしいの」
　こんな会話なら不要だ。なにより街中で言い合いになるのは避けたい。レフはつっかかろうとするイリナの前にすっと身体からだを入れた。
「じゃ、俺たち行くから」
　そう言うと、イリナの肩を叩たたいて先に進むよう促うながす。するとミハイルは去ろうとするふたりに冷たい笑みを投げかける。
「実験の成功を期待している」
　おそらくミハイルたちもイリナを疎うとましく思っているのだろう。レフは返答の代わりに軽く片手を挙げ、イリナを引っ張るように連れていく。
「感じ悪い」
　ぼそりとこぼすイリナ。
「気にするな。彼らも羨うらやんでるだけだ」
　イリナにそうやって声をかける一方で、レフは自分が候補生たちから疎外されているように感じていた。だが、イリナをないがしろにしてまで彼らに取り入ろうという気持ちは、ひとかけらもなかった。

『ズヴェズダ』の扉を開けると、軽やかなジャズの音色と煙草たばこの紫し煙えんがふたりを迎えた。店内はそれなりに混んでいるが、騒がしいわけではない。
　イリナは物珍しそうにきょろきょろ見回すと、電気蓄音機とスピーカーに目を留めた。
「くるくる回っている円盤から、音が出ているの？」
「あれはレコード」
「……はじめて聴く音楽」
「ジャズは連合王国側の文化だからずっと禁じられていたんだけど、最近になってようやくお許しが出たんだ」
『ライカ44』では正規のレコード盤が流通しているが、ほかの地域では、レントゲン写真を切り取ってプレスした粗悪品が出回っていた。リリット国の山奥にはラジオの電波すらも届かないため、音楽文化は中世で停滞したままだった。
「どう？」
　直立したまま聴き入っているイリナにレフが尋たずねると、イリナは頬ほおを和やわらげた。
「いいんじゃないかしら」
「よかった！　じゃあ飲み物を注文しようか。何がいい？　牛乳？」
　メニューを見たイリナは、つっけんどんに答える。
「せっかくだから、れもねーど……とかいうのでも飲んであげるわ」
「ふふっ。了解」
　レフはカウンターで炭酸檸檬水レモネードと茱グ萸ミの実の浸酒ナストイカ、おつまみの乾パンを受け取り、イリナと端の席に着いた。
「お疲れさま」

グラスを重ね、カチンと音を鳴らす。
イリナは炭酸檸檬水の匂いを嗅かいで、一口だけ飲む。そして、しばらく味わうと、もう一口こくりと飲んだ。
「悔しいけど、おいしいわ」
小さな牙きばをチラッとのぞかせ、イリナは目を細めてにっこり微ほほ笑えんだ。
「あ……」
はじめて見る彼女の笑顔に、レフはドキッとなった。あどけなくて、純真無む垢くな少女のようで、一瞬で目も心も奪われた。
「なによ。せっかく褒ほめてあげたのに？」
イリナは不思議そうにレフを見つめて、小首を傾げた。
「ああ、いや、人間の飲み物も悪くないだろ」
顔が熱くなっているのを悟られないように、レフは浸酒ナストイカをぐいっと飲む。
「それはなんの飲み物？　赤くてきれい」
「蒸留酒ジーズニに、茱グ萸ミの実を三週間浸けこんだ果実酒。隠し味にゴロツキアザミの蜂はち蜜みつを入れるのが俺の好み」
「へぇー」
もしイリナがアルコールを飲んだらどんな反応するかなと、レフに悪戯いたずら心ごころが芽め生ばえた。
「一口だけ飲んでみる？」
「でも……私は一七歳って言ったでしょ」
「君の村では二〇歳からかもしれないけど、共和国では一六歳で飲酒は解禁されるんだよ。『よその修道院に行ったら、そこの規則に従え』と言うだろ？」
「んん……」
悩んでいるイリナに、レフはもうひと押しする。

「炭酸水を飲んだときみたいに、新鮮な感動があるかもよ？」
「……じゃあ、一口もらう」
　イリナはグラスを手に取り、くいっと飲んだ。
「！」
　その瞬間、目をまんまるにした。
「ひぇぇ、舌が、口が、燃えるっ……」
　慌あわてて炭酸檸檬水レモネードを飲むイリナを見て、レフはぷっと吹きだした。
「ははっ、キツかった？」
「私にはまだ早いみたい……。消毒薬の匂いがしたわよ……ふぅ……」
　手でぱたぱたと顔を扇あおぐイリナ。
　ちょっと悪戯いたずらが過ぎたかなとレフは反省する。
「口直しに牛乳でも飲む？」
「たんさん牛乳というのはあるの？」
「やめとけ……」
　想像しただけで気持ち悪くなった。
　イリナはジャズが気に入ったようで、跳ねるピアノやうねる金管楽器の音色に合わせて軽く身体からだを揺すっている。話しかけて邪魔するのも野暮な気がしたので、レフはグラスを傾けぼんやり時間を潰つぶす。
　すれ違う人がイリナをちらちら振り向くのは、煙の漂ただよう店内に似つかわしくない美しさに目を奪われてのことだろう。常連のレフが連れてきた少女は何者だという声も聞こえてくる。吸血鬼と飲んでいるという不思議な気持ちと、美少女を連れているという誇らしさがレフのなかに同居している。
「この曲はなんていうの？」
「『愛しのあなた』だよ」

「これ好きー。なんて歌ってるのかわからないけど。知らない国の言葉だね」
　何杯か飲んでほろ酔いになっていたレフは、禁を破ってイリナに話しかける。
「村に住んでた頃、休みの日は何をしてたんだ？」
「んー、どおしてー？」
　舌足らずな甘い声が返ってきた。イリナの頬ほおはほのかに紅こう潮ちようしており、わずかな量だったにもかかわらず酔っているようだ。
「うん、なんか気になってさ」
　レフの問いに、イリナは顎あごに人差し指を当てて、ひとつひとつ思い出すように答える。
「本を読んだりー、植物を育てたりー、牛や山や羊ぎの世話をしてたよー」
「牧歌的だな……」

「ほかにやることなかったもん。ねー、レフは、ここに来る前、何してたのー？」
　ほんわかした口調に変わっているイリナに対して、レフは真顔で語る。
「俺は、ずっと空を飛んでた」
「空……？」
「ここに来る前は空軍のパイロットで、学生のあいだは地元の飛行クラブに入ってた。小さい頃、自作の飛行機で屋根から飛んで怪け我がしたこともある」
　レフは自分で言いながら、本当に空と生きてきたようなもんだなと感じる。
「ふふっ、変な子ー」
　イリナは氷の溶けかけた炭酸檸檬水レモネードをこくこくと飲むと、ふっとレフに顔を向けた。
「じゃあ、宇宙に行こうと思ったのは、いつなのぉ？」
「……空を飛ぶよりも、ずっと昔だ」
　記憶の底にある情景が、鮮明に浮かんでくる。
「五歳のとき、満月を横切る戦闘機を見たんだ。そのとき思った、あれに乗れば月にも行けるのかもしれないって。今思えば馬鹿なことなんだけど、本気でさ、いつか行ってやろうって決めた。月まで飛んで、火星や金星まで旅をするぞって」
「うん……」
　熱っぽい視線で、イリナはレフの話に真剣に聞き入っている。
「俺が空軍に入ろうと思ったのは、前に話した初等学校の先生と出会ったから」
「飛行機は武器ではない、だよね？」
「ああ……」

　レフは残っていた浸酒ナストイカを飲み干し、グラスを握にぎりしめる。当時の憤いきどおりが胸にこみ上げ、声に力が入っていく。
「戦争が終われば、世界は変わると思った。まだ各地で小競り合いはあるけど、少しずつ、確実に変わりはじめてる。だから、先生が連行されたのはいまだに納得いかない！　だって先生は正しいこと言ってたんだし、どうして酷ひどい目に遭わなきゃいけないんだ。宇宙ロケットだって、連合王国を倒す武器じゃなくて、平和の象徴であるべき――」
「声大きいわよ」
　聞き覚えのある声とともに、後ろから肩をポンと叩たたかれた。
「っ!?」
　レフが驚いて振り向くと、そこにはビールグラスを手にしたナタリアがいた。
「ナタリアさん……!?」
　スカーフとエプロンを外していたので、レフは一瞬誰かわからなかった。眼鏡めがねをかけていなければ、別人だと思ってしまったかもしれない。
「どうして、ここに……」
　ナタリアは空からになりかけたグラスをレフに見せる。
「私だってお酒を飲みにくらい来るわよ。それとも、いつも食堂でスープを煮込んでろって言うの？」
「いえ、すみません。ちょっと意外だったので」
　彼女にも寮母以外の顔があるんだよなと、当然のことを思うレフ。
　するとナタリアは呆あきれたように溜ため息いきを吐つき、レフの耳元に顔を近づけると、そっと囁ささやく。
「そんなことより、熱く語るのはいいけど……連合王国云うんぬんは〔運送屋〕に聞かれるとマズいんじゃないの？　目立ってたわよ」
「あ……」

　レフは自分がいつのまにか立ち上がっていたことに気づいた。周りが見えなくなるくらい情熱的なのは、レフの良いところであり、悪いところだった。
　静かに腰を下ろすと、頭をぽりぽり掻きながらイリナに謝る。
「ごめん……」
「迷惑……」
　苦笑いするイリナに、ナタリアが同情した視線を向ける。
「イリナさんも大変ね。『雪解けのレフ』の相手をすると疲れるでしょ？」
「雪解け？」
「空や宇宙のことになると熱くなって、周りの雪や氷が溶けると評判なの」
「へぇ……」
　イリナは頬ほお杖づえをついて、レフをジーッと見る。
「私が熱さに弱いの知ってるわよね？」
　おどけたように冗談を言うイリナ。
「だからごめんって……」
　女性ふたりから責められては、レフは小さくなるしかなかった。
「でもレフ君。イリナさんをバーなんかに連れてきちゃって……酔わせて悪さするつもりじゃないでしょうね？」
「しませんよ。なんでいつもそういうこと言うんですか」
　レフが文句をつけると、ナタリアはきょとんとした。
「なんでって、検査のとき壁が冷たいとか──」
「あーあーあー！」
　身体検査の盗み聞きをバラされそうになったレフが大声をあげると、店内の客がいっせいに三人を見た。
　ナタリアが口に人差し指を当てて「シー」とする。

「だから声が大きいのよ、あなたは」
「いや、だって……」
　レフがちらりとイリナを見やると、訝いぶかしげな視線をぶつけられた。
「冷たい壁？」
「な、なんでもないって。ねえ、ナタリアさん……」
　懇願するように同意を求めると、ナタリアは悪戯いたずらっぽく微ほほ笑えんだ。
「ええ、冬になると壁も冷たいという話。じゃあ、おふたりさん、またね」
　ナタリアはビールを飲み干し、去っていった。
「はぁ……」
　気持ちよく酔っていたレフだが、一気に現実に引き戻された。
　ふと時計に目をやると、午後九時を回っている。二度も大声を出したせいで居心ごこ地ちの悪さを感じているレフは、場所を変えようと決めた。
「このあとどうする？」
「ほかには何があるの？」
「たとえば映画──」
　映画館は一晩中営業していると言いかけ、今週は怪奇映画特集だったのを思い出した。ニンニクや十字架に弱い吸血鬼がハンターに狩られるのをイリナと見たら修羅場だ。
「映画は眠くなるしやめよう。えーと……」
　普段は共同宿舎の門限を守って規律正しく暮らしていたレフは、夜の事情に疎うとかった。こんな遅くにフットボールの試合もないし、ビリヤード場には候補生がいるし、出来ることは──
「あっ。スケートは？」

「スケート？」
「町はずれの湖に氷が張ってるから。スケートは知ってる？」
　ぐっと身を乗り出すイリナ。
「得意よ」
「どう？」
「でも、靴くつを持ってないわ」
　イリナが残念そうに肩をすくめると、レフは親指を立てた。
「買ってあげるよ。すぐそこの雑貨店で売ってる。まだ開いてるはずだし」
「借りは作りたくない」
　首を振るイリナだが何やらそわそわしており、意地を張っているだけで本当はやりたいのだと感じ取ったレフは、もう一度誘う。
「訓練の一環ってことでいいから。候補生ってわりと給料いいんだぜ。使う暇ひまがないから貯金もけっこうあるし」
「補欠のくせに給料は一人前なの？」
「うるさい！　早く行くぞ！」

　雑貨店でふたりぶんのスケート靴ぐつを買ったレフとイリナは、町はずれの湖に向かう。
「どうして、あなたのぶんも買ったの？」
「座って待ってるだけなんてつまらないだろ？　それに、じっとしてたら凍死するよ」
　レフの言葉を待っていたかのように、霜の精マロースの凍える息がビューッと吹き抜けた。
「うぉ寒い……！」
　身体からだを温めるため、調達した蒸留酒ジーズニの小瓶びんの栓を開け、一口飲む。

「さっきから飲みすぎ」
　イリナに白い目で見られる。
「非番の日くらい許してくれよ。共和国民にとっては水みたいなものなんだ。俺たちは君みたいに耐寒性ないからさ」
　雑談を交わしながら湖までやってきた。くるぶしまで積もった柔らかい雪を踏みしめ、湖こ畔はんにたどりつく。
　湖面に張った氷は月明かりに照らされ、静かに白銀の光をたたえている。
「貸し切りね」
「こんな寒い夜に滑る物好きはなかなかいないよ」
「あなたもでしょ」
「監視で付き合ってるんだよ」
　興味がないフリをするレフだが、真夜中の学校に忍び込むような妙な高揚感があった。
　ふたりはベンチに積もった雪を払って腰かけ、スケート靴に履き替える。
「誰もいないし、帽子はいらないわよね？」
　イリナは耳あて帽を脱ぐと、うきうきした様子で氷のうえに足を乗せた。レフもあとを追ったが、酔いが回っており、ぐらりと体勢を崩しかけた。
「おわっ……ちょっと飲みすぎたかも……」
　そんなレフを見たイリナの口元に微笑が浮かぶ。
「競争よ」
「は？」
「湖を先に一周したほうが勝ち」
　言い終えるまえにイリナは氷を蹴けった。
「ちょ、待て――」

つるっと、こけそうになったレフだったが、すんでのところで踏みとどまった。
「あっぶね……！」
急いでイリナを追いかけようとするものの、レフは身体が自分のものではないようにふわふわして真っすぐ進まない。かたや酔いの完全に醒さめているイリナは、覚えたての『愛しのあなた』を鼻歌まじりに優雅に滑っていく。

何度も転びそうになりながらレフが湖を一周して戻ると、イリナは腰に手を当て、わざとらしくあくびをした。
「遅すぎて眠るところだったわ」
「しらふだったら、こんなことはないのに……」
酩めい酊てい状態で運動したせいか頭がぐわんぐわんする。
「ちょっと休む……」
レフはベンチにぐったりと身体からだを預け、黒髪をなびかせて滑るイリナをぼんやり眺める。
降りそそぐ月光がスポットライトのようにイリナを浮き彫りにする。舞い上がる氷の粒がきらきらと星ほし屑くずのように輝く。
めまいで揺らぐ視界のなかに、幻想的な光景が広がる。
儚はかない雪の妖精が湖面に魔法陣を描くような、秘密の神聖な儀式のようで、レフは時が経つのも、凍える寒さも忘れ、魅入られる。
イリナは窮屈な現実から解放されたように、その生命を謳おう歌かするように、静寂の世界を自由に舞い踊る。
月がベールのような薄雲に隠れると、妖精の円舞曲は終わった。
「楽しかったぁ……」
イリナはレフの隣に腰を下ろした。額にはうっすらと汗が浮かび、頬ほおは林りん檎ごのように上気している。

濡ぬれた髪が凍るような氷点下のなか、これといった会話もなく、なんとなく夜空を見上げる。天上には、どこまでも永遠に続くような、果てしない銀河が横たわっている。
「あそこに飛んでいくなんて、信じられないよな……」
レフが独り言のようにつぶやくと、イリナが悪戯いたずらっぽく問いかけた。
「補欠でも飛べるの？」
「いや……それは……」
飛べないとは言いたくなくて、言葉を濁にごすレフ。
「あなた、それなりに成績が良いと言ってたわよね？　どうして補欠なの？」
レフは言うべきか迷ったが、いまさら隠すこともないだろうと思い、告げる。
「上官に暴力をふるったからだよ」
「暴力……!?」
レフからほど遠い言葉を聞いて、イリナは目を丸くした。
苦い記憶がよみがえり、レフは奥歯を噛かみしめる。
「技術局の幹部の息子が、新卒の技術官を奴隷扱いしててさ。失敗の責任をなすりつけてクビを通告して、必死に謝ってるのに靴くつで踏みつけて……そいつはずっと前からそういう態度を取ってたんだけど、我慢できなくて、つい突き飛ばしてしまった」
イリナは感心したように頷うなずく。
「さすが『雪解けのレフ』ね。熱いわ」
「その呼び方やめてくれ……」
なんだか照れくさくて頭を掻かいたレフだが、一方で手を上げてしまったという後悔の念が身体からだのなかを蠢うごめき、蒸留酒ジーズニを飲んで気を紛らわせようとした。

「そんな口が焼けるもの、よく飲めるわね……」
　呆あきれるイリナに、レフは何気なく言う。
「二〇歳になったとき、もう一度挑戦したら？」
　するとイリナは一瞬言葉を詰まらせ、靴先で小さな雪塊を崩した。
「……うん。それまで生きてたら、誕生日の祝杯を蒸留酒であげるわ……」
　イリナの声は弱々しく震え、最後は消え入りそうだった。
「ん？　どうした……」
　異変を感じ、レフが声をかけると、イリナは無理に作ったように硬く微ほほ笑えむ。
「実験体は、廃棄とか、殺されるかもしれないんでしょ？」
「えっ……!?」
　背中から水を浴びせられたような気がした。
「……ローザの言ったこと、聞いてたのか？」
「あなたもあの女も、大きな声だったし」
　あの一件のあともイリナは変わることなく、ふつうに訓練を続けていた。だから、レフはまさか聞かれていたとは思いもしなかった。
「まったくひどい国よね」
　気丈に振る舞うイリナに、レフはなんと言葉をかけていいのかわからなかった。
　帰ろうと切り出すこともできず、胃は鉛のように重くなり、心の底まで冷たくなる。ひらひらと舞う粉雪が手の甲に落ちては溶けて、消えていく。
「……オーロラ……」
　重い静寂に包まれていた湖こ畔はんに、イリナの囁ささやきがかすかに響いた。
　うつむいていたレフが顔を上げると、星々の煌きらめく夜空に碧みど

りのカーテンが揺れている。
　憂愁の翳かげりを浮かべたイリナは、右手を天に掲げて、たなびくオーロラを人差し指でなぞっていく。
「私の村では、オーロラは、死者の世界へつながる架け橋と言われているの」
「うん……」
「飛行機は武器ではない……。人間が皆、そういう考えなら、村は燃やされなかったのに」
「え……？」
　イリナは掲げていた手を静かに下ろすと、祈るように胸に手を当てた。
「私が三歳のとき、お父さんとお母さんは、戦争に巻き込まれて、殺された」
「そんな……」
　レフは胸を突かれ、言葉を詰まらせた。そしてイリナは感情を押し殺しているような声で、淡々と吐露する。
「鏡台の下に隠れた私の目の前で、お母さんは心臓を貫かれて、お父さんは首を刎はねられた。お城は壊されて、村のみんなも、たくさん死んでしまった。森に火を放たれ、牛や山や羊ぎも殺されてしまった……」
　首飾りの宝石を、イリナはそっと手で包む。
「どうして、こんな目に遭わなきゃならないのって……燃えた森を眺めながら、ずっと考えてた。お城の地下室で、昔に書かれた本を、ひとりで読んでた。どこかに答えがあるのかなって……何年も、何年も……」
　瞳ひとみを潤うるませるイリナ。レフは気の利いたことなど言えず、蒸留酒ジーズニの瓶びんを固く握にぎりしめる。
「……昔の話よ。忘れて」
　イリナは目尻に滲にじんだ涙をそっと指で拭ぬぐうと、ぎこちなく苦

笑して「あっ、そうだ」と指を立てた。
「あなたは『吸血鬼は月の民たみである』っていう言い伝え、知ってる？」
　いきなり振られて戸と惑まどったレフだが、イリナの気持ちを察して話を合わせる。
「ああ。子どものころは本気で信じてたよ」
「私もたんなる伝説だと思ってた。でも、人工衛星が撮影した月の裏側の写真を新聞で見たとき、目を疑ったの。祖先が一六世紀に描いた月の絵と、あまりにそっくりだったから」
「えっ、どういうことだよ？」
　レフが食らいつくと、イリナは残念そうに首を横に振った。
「その絵は黴かび臭くさい手稿のなかに載ってたんだけど、説明が暗号のような文字で綴つづられていたから内容はわからない。でも、私は確信したの。吸血鬼は、月の民だって。月の民だから、この惑ほ星しで虐しいたげられてるんだって」
　イリナは首飾りを外すと、宝石を月にかざした。
「ルーンヌィ・カーミェニ。代々伝わる、月の石」
　月光を浴びた宝石は、オーロラのゆらめきとともに青い輝きを微細に変える。
「虹の入り江……夢の湖……眠りの沼……」
　イリナは宝石を月光に透かしながら、穢けがれのない声で月の詩を紡つむぐ。
「嵐の大洋……蒸気の海……」
　切ない祈りを感じる詠唱が、レフの心にしんしんと染み入る。
「テネリッフェ山塊……腐敗の沼……」
　月が返歌をするかのように一筋の風が吹き降り、イリナの黒髪がふわりと舞い広がる。

「大波の入り江……ラプラス岬……」
　そして、静かに詠うたい終えたイリナは宝石を手のひらにのせ、じっと見つめる。
「この石を持って、月に行きたい。でも……」
　イリナは宝石をそっと手で包み、胸に当てる。
「私には翼なんてない。伝承みたいに空も飛べない。飛行機も科学もない山奥の村で、月に祈ることしかできなかった。……そんなとき、共和国の人間がやってきたの」
　夜空を見上げたイリナの瞳ひとみに月光が降り注そそぎ、情熱を秘めたような緋ひ色いろに染まる。
「私は、実験体でもいいから、人間の力を借りてもいいから、宇宙に行きたかった」
　真しん摯しな想いにレフは胸を揺さぶられた。だから彼女は嫌な顔ひとつ見せず、積極的に訓練に参加していたのかとようやく腑ふに落ちた。候補生の誰よりも強い気持ちで、人間に負けないという鋼の意思で。初日に墓ぼ碑ひの前で夜空を見上げたときも、きっと唇を噛かみしめていたのだろう。
　彼女の秘めた想いに気づかず、いろいろ疑った自分が恥ずかしかった。
　イリナは月に目を向けたまま、覚悟を心に刻むように続ける。
「宇宙から帰還すれば、廃棄されるかもしれない。でも、それでいい。このまま生きていたところで、私の夢は叶わないから。人間よりも先に、私は宇宙を旅したい。宇宙が人間に穢けがされる前に、月を見てみたいの」
　目に浮かんだ涙がこぼれないようにイリナは天高く見上げ、震えを抑えた声で言う。
「だから、もう少しだけ、私に付き合って」

「もちろん。何があっても、俺は君の味方だ」
　訓練を手伝うことしかできないが、彼女の夢を叶えてやりたかった。
「ありがとう、レフ……」
　星ほし屑くずのような粉雪がはらはらと舞い降り、イリナの頬ほおで溶けて消えた。そして、彼女は切なげに微ほほ笑えむと、よいしょっと立ち上がった。
「もうちょっと滑ってくる」
　氷の湖へ歩いていくイリナの背中を見ながら、レフはかじかむ指で蒸留酒ジーズニの栓を開けた。ごくりと飲むと、喉のどが焼け、身体からだの芯が燃えるように熱くなった。

間奏　интерлюдия

藍の瞳　Очи　индиго

　宇宙基地にある発射管制棟ブロツクハウスで、レフはモニターの映像をじっと見ていた。
　光の届かない暗くら闇やみのなか、イリナを乗せた巨大なロケットが今まさに打ち上げられようとしている。狭いキャビンのなかで座っているイリナはまるで蝋ろう人形のように身動きひとつせず、静かに目を閉じている。
「エンジン点火！」「主燃焼！」「エンジン噴射！」
　技術官たちの声がレフの頭に響く。
「発射！」
　主任の号令とともにロケットのエンジンが火を噴き、打ち上げられた──刹那、ロケットは傾いて炎に包まれ、大爆発した。
「！」
　轟ごう音おんが耳をつんざき、壁がびりびり揺れ、モニターがブラックアウトする。
　砕けたロケットの破片が発射管制棟に土ど砂しや降ぶりのように降り注そそぎ、天井にがんがんと当たる。技術官が逃げ惑うなか、レフは金縛りにあったように呆ぼう然ぜんと突っ立っている。
「あ、あぁ……」
　発射管制棟全体を揺らすような大きな衝撃とともに天井が崩れ、燃え盛るキャビンがレフの頭上に落ちてくる──

「うああっ──！」
　独房の寝台でレフは飛び起きた。心臓は破裂しそうなほど激しく打

ち、額に汗が噴き出す。
「……夢？」
　イリナの独房とを分かつ壁を見て、レフは安あん堵どの溜ため息いきを吐ついた。しかし、今は隣にイリナはいない。彼女は『無響低圧室』に隔離され、五日間の孤独訓練に入っていた。
　レフは独りで自らの訓練をこなしながら、定期的にイリナの様子を見に行っていた。だが、外部と完全に遮断されている彼女とは接触できず、モニターで監視しているアーニャから話を聞くだけだった。
　寝る前に見に行ったとき、モニターに映ったイリナは、つまらなそうな顔で算数の問題を解いていた。レフがぼんやりとイリナを眺めていると、アーニャに「レフさん元気ない」とか「イリニャンさんがいないと張り合いがないですか？」とか突っ込まれた。
「そんなことないって。ひとりの時間ができて嬉しいくらいだ」
　そう否定したものの、日常の一部が欠けたような物寂しさをレフは感じており、熱気室の訓練をする前にも担当技師のフランツに指摘された。
「彼女のことが気になるのかい？」
「え……」
「可か愛わいいもんね」
　フランツは真顔でそう言った。
「な、なに言ってんだよ？　監視役として気になってるだけだって」
　焦るレフにフランツは近づくと、いきなりレフを抱き寄せて背中をぽんぽんと叩たたいた。
「なっ!?　なんだよ!?」
　焦るレフの耳元で、フランツはそっと囁ささやく。
「この先いろいろあると思うけど、頑張れよ」
「……どうした、急に？」

　すっとフランツは身体からだを離し、翳かげりのある微ほほ笑えみを浮かべる。
「もしかしたら、僕はこの町を出るかもしれない」
　思いもよらぬ告白にレフは面食らった。
「えっ？　技師を辞めるのか？」
「いや、異動……かな」
　その声には、思い詰めたような重みがあった。レフはふと、フランツがサガレヴィッチ副長官を苦手としていることを思い出した。
「副長官になにか言われたのか？　俺でよければ相談に乗るけど」
「……忘れてくれ。じゃ、訓練を開始しよう」
　フランツはレフを熱気室に促うながすと、いつもどおり作業をはじめた。レフは彼の態度にちょっとした違和感を覚えたが、その違和感は灼しやく熱ねつ地じ獄ごくで汗とともに流れ出てしまった。

緋の瞳　Очи　алый

　イリナが無響低圧室に入室して丸二日が経過していた。身体のいたるところにセンサーが取りつけられているが、テープで貼られているせいでかゆみが出ている。
「剥はがしたい……」
　つぶやきは、すーっと壁に吸い込まれた。
　外部の音はいっさい聞こえず、換気扇の音だけがコーコーと静かに鳴っている。部屋の隅にはイワシや牛肉の缶詰、宇宙食のアルミチューブ、飲料水などの保存食が山積みで、まるでシェルターに閉じ込められているような状態である。ずっと孤独に生きてきたイリナでも、かなり精神的にまいる訓練だった。

「はぁ……」
　あらかじめ定められていた作業工程に従って知能テストを解いていると、突然、電気が消えて真っ暗になった。
「わっ……」
　暗視の特性があるイリナですら何も見えない、完全な暗くら闇やみ。
　やることがなくて床に寝転ぶと、心も身体からだも闇やみに溶けてしまうような感覚に襲われる。もしこのまま外の世界が滅んでも気づかないだろうなとイリナは感じた。
「……今頃レフは、何してるんだろう……」
　最初は煩わずらわしかったが、ずっといっしょにいたせいか、離れるとなんだか寂しい。それにレフは、ローザの嫌味に本気で怒ってくれていた。人間扱いされたのは癪しやくに障さわったが、実験体ではなく、ひとりの人として見てくれているのは、とても嬉しかった。ひとりなら絶対に立ち入らなかったジャズバーは大人になった気分がしたし、スケートも楽しかった。
　こんなに心が満たされたのは、いつ以来だろう。
「……だめ」
　イリナは唸うなると、髪の毛をわしゃわしゃと揉もみしだいた。
「何考えてるのよ……。人間から離れられて、せいせいしたじゃない……」
　起きているとよけいなことを考えてしまうので、眠ることにした。
　だが、目を閉じると、昔のことを思い出してしまう。
「……あんなこと、どうして、レフに言っちゃったんだろ……」
　鏡台の下まで、父と母の血が流れてきたこと。
　可か愛わいがっていた牛が焼け死んでしまったこと。
　大切なドレスが砂まみれになってしまったこと。
　狭い棺かん桶おけのなかで、未知の月世界や、遥はるかな宇宙を想像

したこと。
　ずっとひとりで、月を見ていたこと。
「……」
　悲しくなって、寂しくなって、胸がいっぱいになって。
　涙があふれ、つーっと頬ほおにこぼれ落ちた。
「ん……ん……」
　堰せきを切ったように、涙が出てくる。
「お願いだから、電気点つかないでよ……」
　イリナはうつ伏せになる。
　人間に泣き顔なんて見られたくなかった。
　とくにレフには、絶対に。

第四章　血の契り

藍の瞳　Очи　индиго

五日間に渡る無響低圧室での訓練を終え、イリナが出てきた。
「ふぅ……」
枯れた老木のように生気のない彼女に、レフは炭酸檸檬水レモネードを差し出す。
「お疲れさま」
「たんさんっ!?」
と、顔を綻ほころばせたイリナは受け取ろうとして、突然真顔になった。
「……なんて、喜ぶと思った？」
「は？」
「捨てるのはもったいないから、もらってあげるけど」
イリナは奪うようにコップを取ると、一気に飲み干した。
「ふぅ……不ま味ずいわ」
「……まあ、五日で終わって良かったな」
「二度と入りたくない。よくもこんなくだらない訓練を思いつくわね。人間の脳みそってどういう構造しているのよ」
久しぶりに暴言を聞くと、レフはなぜかホッとした。
「どうしてニヤニヤしてるの……」
イリナに疑わしい目で見られたレフは、咳せき払ばらいをする。
「んん……ええと、これからは、降下訓練に集中するぞ。早く習得しないと本番に間に合わないからな」
降下を上達させるための方法を検討した結果、小細工は使わずとにかく回数をこなすことに決めたレフは、ヴィクトール中将に訓練行程の変

更を承認してもらっていた。
「今後は座学や体力トレーニングを辞めて、午後一〇時以降を丸々パラシュート訓練に当てる。炭酸水を飲み終えたらさっそく開始だ！」
　通常なら一日休息させるべきだが、日程が迫っているためレフは鬼になった。イリナも降下が弱点だとわかっているようで、疲れているにもかかわらず、嫌な顔ひとつせずに炭酸水を飲み干した。
「上達しなかったら、あなたの教え方が悪いせいだからね」
　──三日間で三〇回もの降下をするとさすがにイリナも慣れたようで、恐怖で震えることはなくなった。タンデム降下は問題なくこなせるようになったため、いよいよ、初の単独降下をする。
　霜の精マロースの寒風が吹きすさぶ月夜、軍用飛行場を飛び立ったヘリは限界高度まで上昇した。
　飛び出し口で硬い表情をしているイリナの肩を、レフはポンと軽く叩たたく。
「やることはタンデムと変わらない。腹這ばいの姿勢を保持して、手足を使って空気の抵抗を利用し、コントロールする。タイミングを見計らって主傘を開いたら、目標地点を目指す。絶対頭を下に向けるなよ！」
「う、うん！」
「安心しろ、俺が隣にいるから」
　イリナはレフの目をじっと見つめて覚悟をしたように頷うなずくと、飛び出しイグジツトの姿勢を取った。
「いつでもいいわよ……！」
「よし！　三、二、一、〇！」
　イリナの背中を押して先に飛び降りさせると、レフはすぐにあとを追った。
　自由落下をしながらレフはイリナの手を取り「大丈夫だ」と頷く。イ

リナはぎこちない笑みを浮かべて、しっかりと手を握にぎり返した。
　パラシュートを開くタイミングになったところで手を離し、お互いがぶつからない位置まで距離を取る。
　レフは親指を立てて「パラシュートを開け」と合図を送る。イリナは手順を間違えることなく落ち着いてリップコードを引き、無事に主傘を開いた。レフはホッと息を吐き、自分の傘を開く。
　レフの少し上空にイリナがいる形でふたりは降下していく。
　ここまでは順調。問題は着地だ。
　近くに水場はないので溺おぼれる心配はなく、柔らかい草の生えた平原なので岩石に激突することもない。受け身をちゃんと取りさえすれば、大怪け我がをすることはないはずだ。
　いよいよ地面が近づき、ふたりはランディングの体勢に入る。
「うまく降りてくれよ……！」
　レフは一足先に着地すると即座に立ち上がり、イリナの落下地点へ走りながら叫ぶ。
「受け身！」
　上空から降りてくるイリナの顔は強こわ張ばっており、着地のときに足を躓つまずかせてしまった。
「っ……！」
　うまく受け身を取れなかったイリナは不格好に転がり、そのまま地面に仰向けになった。
「イリナ！」
　慌あわててレフが駆け寄ると、イリナは胸を大きく上下させて安あん堵どの溜ため息いきを吐ついた。
「降りれたぁ……」
　イリナが微ほほ笑えむと、レフもつられて笑顔になる。
「はじめてにしては上出来だ。ただ、これは初歩の初歩。『きりもみ状

態』になったら、迅速に脱しないと危険なことになる」
『きりもみ』は、もっとも警戒しなければならない最悪の状況だ。
　レフはパラシュートを外しながら、イリナにその恐ろしさを伝える。
　大気圏への再突入後、キャビンからの射出がうまくいかなかった場合、空中を落下しながら身体からだが高速回転してしまう可能性がある。
　それがきりもみ状態だ。
　眼球が切られたように痛んで視界がぼやけ、遠心力で血液が身体の末端に昇って指先がちぎれそうになり、頭は鉛を流し込まれたように重く、方向感覚を失う。
「もしそうなったら、落下姿勢を安定させ、パラシュートが正常に開くように努めなければならない。最悪の場合、意識を失ったまま、地上に激突する」
「えっ……」
「これは脅しじゃないぞ。今度タンデムで、実際に体験してもらう」
　きりもみの訓練は想像するだけで頭痛がしたが、一度は絶対に経験させておかねばならないことだった。
　パラシュートを畳み終えて空港へ戻ろうとしたとき、イリナが空を指さした。
「レフ、あれはなに？」
　見ると、遥はるか上空から、強い光を放つ火球が落下してくる。
「流れ星や、砲撃じゃないわよね……？」
　レフにも正体がわからない。
「隕いん石せきでもないし、衛星か!?」
「こっちに来てない!?」
　火球がぐんぐん接近してきて、イリナが後ずさった。
「いや、少し逸それる……！」

頭上をかすめるように落下してきた火球は──

ドン！

ふたりから数百メートルの地点に落下。激しい衝突音が響き、振動が地面を揺らした。

墜落方向には、小さな炎がゆらめいている。

「どうするの……？」

狼狽うろたえているイリナに問われてレフは迷ったが、ここは『空軍中尉』として確認すべきだと判断した。

「行こう」

墜落現場に駆けつけたふたりは、その惨状に顔をしかめた。

直径二〇メートルほどのクレーターの中央に、キャビンの残骸が埋まっている。銀色であるはずの表面は黒く焦げ、半壊した開口部から機械類が飛び散っている。

「なにを打ち上げたんだ……？」

「レフ、あそこ、なにか落ちてる」

イリナの指した先に目を凝らすと、ちらちらと燃える炎に照らされ、黒い塊がふたつ転がっているのが見えた。

「なんだあれ……」

嫌な予感がしたが、ここまで来たら確かめざるを得ない。

怖々と近づくと、だんだんと形が見えてきた。

真っ黒な塊から、形の崩れた頭と、焼けただれた足が突き出している。

「犬!?」

どきりとしてレフは思わず声を上げた。

それは、無残な姿に成り果てた二匹の犬だった。もはや生物としての形を成していない、ただの炭。

「っ……」
　イリナは口に手をあて、しゃがみ込んだ。みるみるうちに顔は青ざめ、がたがたと震える。
「はぁ……はぁ……」
　呼吸は乱れて、目尻に涙が溜たまる。
「おい、大丈夫か？」
　レフはイリナに寄り添い、落ち着かせようと背中を優しくさする。だがイリナの震えは治まるどころかひどくなり、過呼吸のようになって、顔から血の気が引いていく。
「ちょっと離れよう……！」
　動けなくなったイリナに肩を貸そうとしたところ、車両の走行音が聞こえてきた。
　猛スピードで走ってきた車両はクレーターを囲むように止まり、黒い外がい套とうを纏まとった〔運送屋〕やヴィクトール中将率いる軍部の処理班がどかどかと車から降りてきた。
　レフが姿勢を正して迎えると、ヴィクトール中将と処理班員が睨にらんだ。
「状況を詳しく聞かせてもらおうか」

　イリナを休ませるために停車している車両に乗り込み、憔しょう悴すいしている彼女の横で、レフは一部始終をヴィクトール中将に伝えた。
「──以上です」
「わかった。お前たちはこのまま帰れ。他言無用だ」
　話を切り上げて降車しようとするヴィクトール中将をレフは呼び止める。
「墜落の原因は判明しているんですか？　それがわからないと、イリナも安心して訓練できません」

レフはあえてイリナの前で原因を訊きいた。詳細が不明なままでは、彼女の不安は解消されないと決断したのだ。

ヴィクトール中将はイリナを見やると、苦々しい口ぶりで告げる。

「打ち上げは成功し、軌道上でのデータも採録した。だが、大気圏への再突入時にトラブルが起きた。角度がずれた上に、遮熱シールドにも異常が発生してキャビン内部に火が点つき、すべて燃えた」

大気圏への再突入こそ最大の難関で、これまでに何度も失敗を繰り返していた。それが今回、最悪の形でイリナの目の前に落ちてきた。

レフは以前、打ち上げの爆発事故を目まの当たりにして食事が喉のどを通らなくなったことがある。そんな彼から見て、イリナが相当な衝撃を受けたことは一目瞭りよう然ぜんだった。憔しよう悴すいしきっている彼女を見ると、自分のことに意識が向かず、彼女のことが心配でしょうがなかった。

車両で『ライカ44』に送られるあいだ、イリナはずっと口に手を当てて怯おびえるようにうつむいていた。レフは何度か声をかけたが、わずかに頷うなずくだけで返事はなかった。

生体研究所の別棟に向かって赤松の森を重い足取りで歩いていると、レフは木々の向こうの薄うす闇やみに何かの気配を感じた。それが人か小動物なのかはわからなかったが、今は虚うつろな顔をしているイリナのことで頭がいっぱいで、とにかくまずは落ち着かせようと先を急いだ。

独房に着いてもイリナは無言のままで、レフの視線を避けるようにシャワー室へ入っていった。

「しまったな……」

墜落現場を見に行かなければよかったとレフは今さら悔やんだ。まさか犬の死し骸がいが転がっているとは思わなかった。

　励ましの言葉を探しながらイリナがシャワーを終えるのを待っていると―
「―ん……うぅ……んっ……」
　シャワー室から、嗚お咽えつのような、吐くような、苦しげな呻うめきが聞こえてきた。
「イリナ……」
　レフは扉をノックしかけて、手を止めた。今声をかけたところで、イリナは頑かたくなに拒こばむだけだろう。
　そして、いつもより五分くらい遅くイリナは出てきた。うつむいて髪を前に垂らしており、表情がわからない。話しかけられずにまごつくレフの前を彼女は素通りしかけて、足を止めた。
「おやすみなさい……」
　イリナは震える声でつぶやき、独房へ歩き去った。一瞬見えた目は、泣き腫はらしたように赤かった。
　レフは何もしてやれない自分が悔しくて、シャワー室の扉をがつんと叩たたいた。味方だと言ったくせに追い詰めてしまうなんて、とんでもない馬鹿だ。

　翌日。イリナの目の下には黒いクマが浮かび、腫はれぼったくなっていた。
「眠れなかったのか？」
「寝たわよ。たっぷりと」
　心配するレフをよそに、イリナは相変わらず強がる。
「そういうあなたこそ、クマできてるわよ？」
　レフ自身も、イリナのことが気になって熟睡できなかった。一晩慰なぐさめの言葉を考えたが何も思いつかず、よけいなことを言うと逆効果

になりそうだと恐れ、あまり会話もないまま訓練に入った。
　時折イリナは重い溜め息いきを吐ついているものの、体操とランニングはいつもどおり何事もなく終え、食事の時間になった。
　一時的なショックだったのかとレフが安心しかけたそのとき、イリナに異変の兆候が出た。食事にまったく手をつけず、牛乳すらも飲まず、ただ、じっと座っている。
「どうした？」
「べつに……」
　イリナは羊肉の串焼きを手に取り、かじった直後──
「……うっ」
　吐き気をこらえるように手で口を押さえると、席を立ってトイレへ駆け出した。
「おい……!?」
　追いかけたが振り切られてしまい、レフはイリナが戻るのを待って尋たずねた。
「昨日から気分が悪そうだけど、大丈夫か？」
「この料理が口に合わないだけよ……」
　真っ青な顔をしたイリナは力のない声で悪態をつき、結局、一口も食べなかった。
　そんな状態で特殊訓練を受けるのは、当然厳しい。遠心加速器を終えたイリナは額に脂汗を浮かべ、もはや気力だけで意識をたもっているようだ。
「実験体らしい姿になってきたじゃないか。偉いぞ」
　サガレヴィッチ副長官の呪じゆ詛そを跳ね返すこともできないほど、イリナは元気がなくなっている。続く酸素欠乏実験を終えたころには魂が抜けきったようにふらついており、事情を知らないアーニャは彼女の変調におろおろしている。だが、墜落事故の件は固く口止めされていた

ので、レフはアーニャに理由を告げることができなかった。

　イリナは二食目もまったく口にせず、水しか飲まない。それなのにイリナは訓練を続けようとレフに意気込みを見せる。
「パラシュート……今日は、きりもみ訓練ね……」
「馬鹿言うな。きりもみは中止だ。体調が万全でないなら気を失うぞ」
　厳しくレフが言うも、イリナは首を横に振って立ち上がろうとする。
「だいじょう……っ」
　イリナは席を立った瞬間、ぐらりとよろめいた。
「あっ！」
　レフは支えようと慌あわてて駆け寄ったが、間に合わず、イリナは崩れるように倒れた。
「ちょっと、滑っただけ……」
「医務室に行くぞ」
　レフに抱え起こされたイリナは唇をぎゅっと噛かんで、小さく頷うなずいた。

　担当医師の診断は、極度の貧血ということだった。
　寝台に横たわったイリナは自じ嘲ちようする。
「ふふっ、吸血鬼が貧血とはね……」
　レフは医師に退席してもらい、イリナとふたりきりで話をする。
「無理をしたら打ち上げどころじゃなくなる。飛びたいなら正直に言ってくれ」
　イリナは目を伏せ、ぽそぽそと言う。
「……こわくて、ぜんぜん眠れなかった……。黒焦げになった犬みたいに私もなるのかと思ったら……急に頭がぐらぐらして……」
　やはりあんなものを見せてしまった自分に責任があったのだと、レフ

は深く悔いた。
　唇を震わせる彼女を見ていると、痛ましくてならない。人間の大人たちに囲まれて実験体扱いされるなか、ずっと気を張っていたが、自らの未来を暗示するような死し骸がいを目にし、心が弾けてしまったのだろう。
　いくら強がっても、彼女は一七歳の少女なのだ。
「明日は休息日だ。一日ゆっくり休みな」
　レフが優しく声をかけると、イリナは少しだけ表情を和やわらげた。

　しかし、翌日も水しか飲めない状態が続いた。点滴するも回復の兆きざしが見えず、担当医師も「人間の治療では効果がないのか……または精神的な問題だ」と匙さじを投げた。レフから話を聞いたナタリアが温かい牛乳粥がゆを持って様子を見に来たが、イリナは一口食べただけで嘔おう吐としてしまった。
　眼鏡めがねの奥に見えるナタリアの瞳ひとみが鈍にぶく光る。
「なにか異変を感じたら、すぐに教えて」
　ナタリアはいつもより低い声でレフに告げると、厳しい顔つきで去っていった。
　イリナは眠りに落ちても苦しそうに呻うめいて、すぐに目覚めてしまう。
　寝台の傍そばで肩を落として座っているレフに、イリナは血の気のない顔でぽそぽそと話す。
「悪夢を見るの……。打ち上げ直後にロケットが爆発して……オーロラの向こうは地じ獄ごくで、炭みたいに真っ黒になった私が、焦げた牛や犬といっしょに、手招きしているの……」
　爆発事故の悪夢はレフも見ていた。不吉な符合にただ背筋が寒くなる。

　そこへ生体検査の結果を手にアーニャがやってきたが、表情は冴えない。
「数値がよくないです……。栄養を取らないと、過酷な訓練に耐えられる状態ではありません……」
「食事は受けつけないしな……」
　吸血鬼にとって栄養価が高くて、活力を取り戻す薬になるようなもの。そんなものがこの町にあるのか。
「あ……」
　レフは、イリナとはじめて会ったときにアーニャが言っていた吸血鬼の特性を思い出した。
「生き血を飲んだとき、活力が漲みなぎったって……イリナ、頷うなずいてなかったか？」
　言いにくそうに、イリナはぼそっと答える。
「……うん」
「それならアーニャ、輸血パックは手に入らないか？」
「体調不良を訴えれば、病院から分けてもらえるかもしれません」
「いやよ」
　イリナがはっきりと拒絶する。
「どこの馬の骨ともわからない人間の血なんて、身体からだに入れられるわけないでしょ」
「血が穢けがれるってわけか……。じゃあ、動物の生き血ならいいのか？」
「本当は、いやだけど……」
　レフの提案に、イリナは口ごもりながら呟つぶやいた。
「……と言ったものの、この町に生きた動物を売ってる店なんてないし、手近なところで、実験動物とか……」
　レフが探るような視線をアーニャに向けると、即座に首を横に振っ

た。
「モジャイスキー博士が激怒すると思います」
「そうだよな……」
　狩りで調達するのは無茶だし、野良犬を探してくるのは時間がかかる。だったら、どうすれば血が手に入るのか。
　名案が浮かばず、思い悩んで両手で顔を覆おおったとき、レフは指先にこめかみの脈動を感じた。
「！……」
　異常な考えだが、灯台下もと暗くらしとはこのことだろう。
　レフは恐れを振り払い、イリナに切り出す。
「俺の血はダメか？」
「……え？」
　イリナも、そしてアーニャもぽかんと口を開けて言葉を失っている。
「血を吸われても、眷けん属ぞくにはならないんだろ？　だったら献血と変わらない。いちおう、どこぞの馬の骨ではなくて、身分はしっかりしてる」
　レフが真顔でイリナを見つめると、イリナは狼狽うろたえて目を泳がせた。
「え、え、え……」
「俺の血が美う味まい保証はないけどな。首は怖いから……左腕でいいか」
　善は急げとレフが上着を脱ぎはじめると、イリナは慌てて手で制した。
「ちょ、ちょっと！」
「ん？」
　イリナは耳を赤くして、気恥ずかしそうに目を逸そらした。
「……本気？」

「回復するかもしれないなら、試したい。宇宙へ行くという君の夢を叶えたいから」
　近くでアーニャが聞いていたが、レフは想いを真っすぐに伝えた。イリナはしばらく黙考していたが、レフの真しん摯しな気持ちが伝わったのか、首を縦に振った。
「わかったわ。あなたの血をいただく」
「ああ」
　居づらそうにしていたアーニャが椅い子すを倒しそうな勢いで立ち上がった。
「あ、あの、わたくし、しばらく外にいますね」
　アーニャはそそくさと部屋を出て行き、パタンと扉が閉まると、気まずい静寂がふたりを包んだ。
　時計の針の音がかちかちと響く。
　上着を脱いで左腕を出したレフは、おずおずとイリナに尋たずねる。
「ええと……どうすればいい？　噛かまれるところ、消毒液で拭けばいいか？」
　頬ほおを紅こう潮ちようさせたイリナは恥ずかしそうに髪をいじっている。
「わ、わからないから、任せる……」
　恥じらっているイリナを目にして、レフも少し照れてしまう。
「任されても困るんだけど……っていうかなんで照れてるんだよ……」
「知らない……」
　困ったレフは、とりあえず消毒しようと左腕の肘下あたりを拭く。
　イリナはもじもじしながら、両手の人差し指で自分の牙きばに触れる。
「……私、歯磨きしたほうがいい……？」
「いや、いいよ」

　レフは寝台に腰かけると、左腕の下にタオルを当て、イリナの顔の前に差し出す。
「それじゃ……」
「うん……」
　イリナは身体からだを起こすと、胸に手を当て、ふぅ……と長い息を吐いた。
「どきどきする……」
「俺だって」
　鼓動の高鳴りがイリナに伝わるんじゃないかというほど緊張しているレフは、注射をするときのように拳こぶしを強く握にぎった。
　イリナはそっと、血管の浮き出たレフの腕に顔を近づけた。湿った吐息が腕にあたり、こそばゆいような、仄ほのかな温かさをレフは感じ、ぞわっと鳥肌がたつ。
「いただきます……」
　イリナは小さな口をできるかぎり開いて、レフの腕に牙きばを当てた。二本の牙が食い込み、皮ひ膚ふが突き破られる。
「っ……！」
　声を出しそうになったのを歯を食いしばって我慢する。鈍にぶい痛みとともに、腕を優しく吸われる感触がある。柔らかな舌が腕を舐なめ、血と唾だ液えきに濡ぬれる。しばらくするとレフは頭がぼうっとしてきて、苦痛は甘美な感覚に溶けていった。腕に頭をのせているイリナを見ていると、今まで感じたことのない奇妙な興奮が脳や心臓を突きあげ、自制が効かなくなり、空いている右手でイリナの頭をそっと撫なでた。

「ん……」
　イリナはぴくっと身体からだを震わせたが、顔を上げることなく、そのまま血を吸う。眷けん属ぞくになるのではないが、吸血鬼の少女を愛おしく思うような感情がレフの身体を包む。
　時間の経過もわからないほどに意識がぼやけてきた頃、イリナは口を離して、頭を上げた。
　血と唾液で艶なまめかしく光る口元をぬぐい、妖あやしい上目遣いでレフを見つめる。その瞳ひとみは血の色に染まっていて、表情はどこか大人びていて、レフは息を飲んだ。
　黙っていると心も身体もどうにかなってしまいそうだったので、動揺を抑えてイリナに話しかける。
「……も、もう、いいのか？」
　するとイリナは、照れ臭そうにつぶやく。
「おいしかった……」
　青白かった頬ほおは血色がよくなっており、たしかな回復が窺うかがえる。
「そりゃ、よかった」
　レフが唾液と血にまみれた腕を見ると、イリナは慌あわててタオルを腕に被かぶせた。
「やだ、あんまり見ないで……」
「ごめん……！」
　タオルで拭き取ると、数ミリほどの穴が二か所開いていた。レフは怪け我がの治療と同じ要領で消毒し、包帯を巻いていく。
　口元を綺き麗れいに拭いていたイリナが、レフの横顔をじっと見つめた。その視線に気づいたレフは治療の手を止め、イリナの方を向く。
「どうかした？」
「……あなたは、不安じゃないの？　爆発するかもしれないミサイルで

飛ぶこと……」
「もちろん不安だよ。だけど、命を懸けてでも叶えたい夢だから」
　一切の迷いを感じさせないレフの言葉に、イリナは目を見開いた。
「命を、懸けてでも……」
「ああ。俺に生きる意味があるとしたら、宇宙に行くことだけだ。そのためなら、すべてを捨てられる」
　イリナは寝台の淵に腰かけ、身を乗り出した。
「どうしてそこまで思えるの……？」
「……そうだな。きっかけはいろいろあったと思うけど、言葉にするのは難しい。確かなのは、宇宙に行きたいっていうこの気持ちだ」
　レフは自分の胸に拳こぶしを当てると、イリナに頷うなずきかける。
「それに、君も同じだろ？　実験体になってまで飛ぼうとしたんだから。俺からしたら、君のほうがよっぽどだと思うぜ」
「あ……」
　思わず口を手で押さえたイリナに、レフはにこっと笑いかける。
「俺たちが乗るのは人を殺す兵器じゃない。夢を運ぶ宇宙ロケットなんだ。だから、爆発なんてしないさ」
　なんの根拠もないレフの励ましに、イリナは口をとがらせる。
「あのね。もし私の乗ってるロケットが爆発したら、人間の科学者たちが無能なせいよ。パラシュートで降下なんて馬鹿じゃないの」
　生意気なイリナに戻った。そのことがレフは嬉しくて、ふっと口元が緩ゆるむ。
「またニヤニヤしてる」
「ん？　気のせいだよ」
　レフはイリナの視線を苦笑でかわして、再び包帯を巻きはじめた。

月は変わり、一二月。打ち上げ予定の一二日まで、残り僅わずかとなった。

訓練は最終段階に突入し、快復したイリナにパラシュート降下技能を叩たたきこむ。単独降下は身体からだを傷めずに着地できるようになったものの、強い風が吹いていると流されてしまい、目的の地点に降り立てない。

そして完全復調したイリナに、まだ経験させていなかった『きりもみ状態』をタンデム降下で体験させた。

「──目が切れる……！　ねえレフ!?」

「俺だって痛いよ！　我慢しろ！」

「指が……ちぎれる！　頭が……割れる……！」

地上に降りたイリナはパラシュートをつけたままぐったりと地面に横たわり、魂を抜かれたように放心した。そんな彼女を見守るレフの心中には、得体の知れない塊がごろごろと転がり、日に日に大きくなっていた。

イリナが訓練に復帰する直前、ヴィクトール中将から衝撃的な決定事項を聞かされたのだ。

──実験体が搭乗するキャビンに、本来積まれるサバイバルキットの代わりに『爆薬』が搭載される──と。

そういう措置が取られることは、レフもうすうす察していた。

これまで行われた犬の打ち上げ実験でも、爆薬は搭載されていたからだ。

もしロケットやキャビンに不具合が発生して国外に墜落しそうになった場合、犬の命よりも機密技術を守ることのほうが重要であり、自爆処理がなされた。

そして今回、爆薬搭載の可否は繰り返し検討されたが「搭乗者が人間に近い吸血鬼であれど実験体は実験体」という考えが国家委員会の判断

だった。
　さらに犬よりもはるかに大きなイリナを打ち上げることは想定以上に搭載機器を圧迫しており、その改良が遅れに遅れ、機器が正常に動作しない可能性が高まっていた。イリナが無事に帰還する確率は、計画当初の五割よりも大幅に下方修正され、三割を切っていた。
　コローヴィンは「絶対に上手くいく！」と爆薬に反対していたが、つい先日の『パールスヌイVI号』の墜落事故があった直後では説得力がない。
　委員会内で「計画すべてを延期すべきでは？」という意見も出たが、ゲルギエフ第一書記が強引に決定を下した。
　──延期して連合王国に負けたらどうする!?　予定どおり進めろ。今日の不可能は、明日は可能になる！
　国の決定とはいえ、レフは納得がいかなかった。
　連合王国に勝つためにイリナの命をないがしろにするなんて、ひどすぎる話だ。延期しないのならば、大きなトラブルが発生していっそ『ミェチタ計画』が中止になればいいのにとレフは思った。そうしたら、イリナは廃棄もされないし、死ななくてすむ。
「……あ」
　レフは自分の思考に驚いて、声を漏もらした。候補生としては計画を達成することこそが念願だというのに、中止を願うなんて。
　傍そばで痛そうに目をこすっているイリナを見て、レフは言いようのない切なさを覚えた。
　レフにとって彼女は、もはや実験体などではなく、夢を共にする同志であり、純粋な心を持つひとりの少女だった。
　そんな彼女を失いたくないと強く思う。
　とはいえ、打ち上げはどう足あ掻がこうと実行される。仮にイリナを逃がしてもいつかは必ず捕らえられ、レフ自身も処罰されて候補生追放

になる。
　つまり、取るべき道はただひとつ。
　宇宙飛行というイリナの夢を叶えるため、できるかぎりバックアップする。
　よろよろと立ち上がったイリナに、レフは迷いを捨てるように声をかける。
「もう一回飛ぼう。今度はふつうに単独降下するぞ」
「わかった。絶対に成功させるわ」
　やる気に満ちたイリナの眼まな差ざしに、レフの胸の奥がキリキリと痛んだ。

　打ち上げまで残り六日。
　今日の訓練を終えるとアルビナール宇宙基地へ移動し、実際に宇宙服を着てキャビンに搭乗する模擬訓練がはじまる。
　特殊装置を使った訓練も最後となり、これまでで最大の負荷がかけられる。
　遠心加速器で振り回されるイリナを見ていたレフは、計画行程を完かん遂すいして誇らしく送り出すという達成感はまったくなく、胃が重くなるような複雑な気持ちを抱いていた。
　制限時間の五分が過ぎ、レフはイリナを出迎える準備をする。だが、遠心加速器は止まることなく、一一Ｇの荷重をイリナにかけ続け、重いモーター音を響かせてぐるぐる回り続けている。
「ん……？」
　レフとアーニャは同時に異変に気づき、顔を見合わせた。担当技師が慌あわてた様子でスイッチを何度も押すが回転速度は落ちるどころか加速し、イリナも何かを訴えようと口をぱくぱくしている。

　重力を示す針が、一二Ｇ、そして一三Ｇへと上がった。候補生でも一二Ｇが限界値だというのに、このまま続けたらイリナの骨は折れ、血管が破裂してしまう。
　まさかイリナを痛めつける指示が出されているのかと疑ったレフは、部屋の隅で腰かけているサガレヴィッチ副長官に目を向けた。その瞬間、サガレヴィッチ副長官は椅い子すを蹴けるように立ち上がり、担当技師を怒ど鳴なりつけた。
「何事だ！」
　振り向いた担当技師は真っ青になっている。
「異常発生です！　機械に不具合が発生したようで止まりません！」
　本当の事故が起きているのだとレフは焦る。
　生体反応の数値を見たアーニャがわめく。
「意識や生命兆候が低下してます！」
　イリナはぎゅっと目を瞑つむり、苦しそうに眉み間けんにしわを寄せている。
「早く止めてくれ！」
　レフの叫びもむなしく、遠心加速器は残酷な拷問器具のようにイリナを痛めつける。このままでは本当に命が危ない。
「くそっ！」
　イリナを救うには機器を壊すしかないと決断したレフは、配電盤に駆け寄り、蓋ふたを強引にこじあける。その行動に仰天したサガレヴィッチ副長官が声を荒らげる。
「貴様、なにをする気だ！」
「電源を強引に落とします！」
「馬鹿者！　戻れ！」
「じゃあ早く止めてください！　それとも死なせる気ですか!?」
「戻れと言っているだろう！」

　言い争っているあいだにも、イリナの身体からだは加重で潰つぶされていく。
「イリナ！」
　激高するサガレヴィッチ副長官の前で、レフはすべてのコードを力任せに引っこ抜いた。
「貴様！」
「俺には彼女を守る義務があるんです！」
　さらにレフはパイプ椅い子すを掴つかみ上げ、メーターや回路を殴なぐりつけて破壊する。すると電源を失った遠心加速器は回転速度を落とし、ほどなくして停止した。
　レフと担当技師が慌てて救出に向かうと、イリナはぐったりとしていて意識が朦もう朧ろうとしており、いつかと同じように服に血が滲にじんでいた。
「大丈夫か!?」
　レフが呼びかけると、イリナはかすかに微ほほ笑えんだ。
「平気よ……。ちょっと、頭がくらくらするけど……」
　カプセルから虚脱状態のイリナを運び出して床にそっと寝かせると、アーニャは「お医者さん呼んできます！」と転がるように走っていった。
　ゆっくりとイリナを休ませたいレフだったが、サガレヴィッチ副長官が怒ど鳴なり散らす。
「おい貴様！　自分のやったことの意味がわかってるだろうな！」
「はっ……！」
　処罰は覚悟の上だった。減給では済まされないだろう。さらなる怒声に身構えるレフだったが、サガレヴィッチ副長官はイリナの前に立ち、嫌悪の眼まな差ざしで見下ろした。
「それからお前。呪われし種なんかが乗るから壊れるんだ。死んで詫び

るか？」
　ひどい暴言に、レフは奥歯をぐっと食いしばり腹立たしさをこらえる。助けに入りたいが、ここで歯向かえば過去の事件の二の舞だ。しかし、黙って見ているだけでいいのかという憤いきどおりがせり上がってくる。機材を破壊したのだから、今更赦ゆるされるわけも──
　すると、イリナはつらそうに身体を起こして、無言で非難の視線をぶつけた。
「なんだその目は」
　威圧されてもイリナはまったくひるまず、強気な声を搾しぼり出す。
「言わなきゃわからないの……？　憐あわれな人間を蔑さげすんで見ている目よ……！」
「どの口が言ってるんだ？」
　サガレヴィッチ副長官は冷酷に吐き捨てると、靴くつの裏側でイリナの肩を強く蹴けった。
「痛っ！」
　苦痛に顔をゆがめて肩をさするイリナ。あまりの仕打ちにレフは一瞬思考が停止、助けに入ろうと動いたときには、すでにイリナが罵ば声せいを浴びせたあとだった。
「暴力をふるうことが神の教えなのね！」
「穢けがれが神の名を口にするな」
　サガレヴィッチ副長官はイリナを再度蹴けり飛ばし、唾つばを吐きかけた。
「宇宙の塵ちりになれ」
「……ふざけるな！」
　我慢の限界を超えたレフはサガレヴィッチ副長官に詰め寄り、鋭するどい一喝を食らわす。
「いい加減にしろ！」

「っ！」
　レフの激しい怒気にサガレヴィッチ副長官はビクッとのけぞった。レフはさらに距離を詰め、彼の首からぶら下がっている十字架をもぎ取るような力で握にぎりしめた。
「なにが神だよ!?　命を懸けて宇宙を目指しているイリナの想いを踏みにじりやがって！　あんたみたいな心ない人間がイリナを傷つけるんだ！」
「貴様……！」
「二度とイリナに触れないでくれ！　俺は同じ人間として恥ずかしい！」
　怒りに押されて後ずさりするサガレヴィッチ副長官は踵かかとを段差にひっかけ、体勢を崩してみっともなく尻しり餅もちをついた。
「ぐっ……！」
　レフは痛そうに腰をさするサガレヴィッチ副長官を見下ろし、大声で吼ほえた。
「イリナに謝れ！」
「レフ！　私はいいからっ……！」
　イリナの悲痛な叫びで、ハッとレフは我に返った。
「あ……」
　ゆっくりと立ち上がるサガレヴィッチ副長官を見て、とんでもないことをしてしまったと悔いた。
　だが、レフは頭を下げない。
　謝る必要はないと思った。
　悪魔のような形相をしたサガレヴィッチ副長官は、レフの胸倉を絞め殺すような勢いでつかむと、冷酷に言い放った。
「軍法会議にかけてやる」
　レフはイリナの哀しげな視線を感じたが、振り向けなかった。

事件後、レフはイリナと言葉を交わすことも許されずに訓練センターの所長室へ連行され、軍部の判断が下されるまで独房に留置となった。

「──はぁぁ……」

打ち上げまで残り四日。何百、何千回というレフの溜め息いきが独房に満ちていた。

一方で医師の診断で異常のなかったイリナは、打ち上げが予定どおり実行されることとなり、アーニャやヴィクトール中将たちとアルビナール宇宙基地へ旅立った。

そのことを食事を運んできた〔運送屋〕から聞かされたレフは、絶望に打ちひしがれた。このままイリナと再会できず、永遠に別れることになるかもしれない。

そう思ったのには理由があった。所長室でヴィクトール中将から聞かされたのだが、キャビンの軽量化が間に合わず、急きょ底部以外の断熱シートを薄くしたという。もはや打ち上げのレベルに達していない代しろ物もので、生還確率は一割を切っていた。

そして、自分の宇宙への夢も潰ついえた。上官に歯向かうという同じ過ちを繰り返してしまったことを猛省しても、もう遅かった。前回のように直接手を上げたわけではないが、今度は副長官が相手だ。おそらく追放になるのは間違いないだろう。いや、果たしてそれだけですむか。

「はぁ……」

空からっぽの身体からだから、溜息だけがこぼれ落ちる。

「イリナは、模擬訓練をやってるのかな……」

かつて見学した宇宙船のキャビンの内部を思い出す。

未知の世界とつながる神聖な場所という畏敬の念を抱いて、靴くつも帽子も脱いだ。

魅入られたように、計器類を眺めまわした。
「打ち上げは、どんな感覚なんだろう……」
以前観た、実験犬マールイの打ち上げ記録映像を思い出す。
打ち上げの瞬間、マールイは驚いたように目を見張った。加速が増すにつれて重力に押しつぶされていったが、四本の足で必死に踏ん張っていた。
やがて、マールイは宇宙に達して、ふわりと宙そらに浮いた。
「イリナも、同じ体験をするんだろうか……」
そこでマールイは死んでしまったが、彼女は無事に帰ってこられるのだろうか。
ちゃんとパラシュートで降りられるだろうか。
もう一度、いっしょにスケートができるだろうか。
二〇歳の誕生日に祝杯をあげる約束は叶うだろうか。
左腕の袖をまくりあげると、血を吸わせたときに開いた穴はふさがりかけていた。

処分決定の連絡がないまま、溜息の数だけ時間は過ぎていった。
食事は喉のどを通らず、ロケットが爆発する悪夢に何度もうなされ、レフの頬ほおはこけていった。
そして、ついに打ち上げの日――二月一二日が目前に近づいている。
時計の針は午後一一時を回り、予定どおりならば、イリナを乗せたロケットが翌朝午前五時過ぎには打ち上げられる。
だが、レフは宇宙から遠く離れた地下牢ろうにいた。星空さえも見えないどん底の地で、後悔ばかりが募っていった。悔しくて涙がこぼれそうだった。
「くそっ……！」

行き場のない怒りが鬱うつ積せきし、拳こぶしで床を殴なぐりつける。何度も、何度も、殴る。

だが、レフは間違ったことはしていないと信じていた。あのままイリナが乱暴されるのを見過ごして候補生に再昇格しても、それは自分の信念に反することだ。

「イリナ……どうか、無事に宇宙に行ってくれよ……」

血のにじむ拳を見つめた、そのとき。

カツン、カツンと、数人が通路を歩く足音が響いた。

その靴くつ音は、レフの牢ろう獄ごくの前で止まった。

ついに、処分が決まったのかもしれない。

レフが心の準備をするまもなく、ドアが開いた。

ふたりの〔運送屋〕が立っている。その後ろから、帽子を深く被かぶったスーツジャケットの人物が現れた。その顔はレフにとって、よく知っている人のように思えた。

緋の瞳　Очи　алый

果てなく広がる岩石砂漠は薄く積もった雪で真っ白になり、夜空に浮かぶ月は分厚い雪雲に覆おおわれている。夏は日照りで五〇度にまで気温が上がるが、一二月ともなれば氷点下の日が続く不毛の地。

そのような人里離れた地区に『アルビナール宇宙基地』は存在していた。

遥はるか五〇〇キロも離れた鉱山からその名をもらった閉鎖都市には、ロケット発射用の最新設備や飛行観測装置が整然と配置され、貨物列車用のレールが各所を結んでいる。事故現場は大地が黒焦げになっており、慰い霊れい碑ひには無数の麝香撫子カーネーシヨンが捧ささげら

れている。
　敷地の端にある宿泊所では、打ち上げを控ひかえたイリナが身体からだ中に計測器を付けられて寝転んでいた。
「ふぅ……」
　未知への興奮と恐怖が入り混じり、まったく眠れない。あと数時間もすれば、宇宙服に着替えて、キャビンに搭乗することになる。
「あの丸っこいのに乗って飛ぶのよね……」
　――二日前、打ち上げの模擬訓練をしたときの光景が脳裏に浮かぶ。
　搭乗するキャビンは直径二メートル半のアルミニウム製の球体で、内部はゴム材に覆おおわれ、クッションが敷き詰められていた。空間の大部分を座席が占めており、正面にあるパネルには、四つの計器とつまみ、小さな地球儀がはめ込まれている。戦闘機に比べると極めて簡素なものだ。天井には可か愛わいらしい黒竜のぬいぐるみがぶらさげられた。ぬいぐるみが浮遊すると無重量状態に到達したことがわかるという目印だ。そして足元には、降下時に脱出するためのカタパルト装置とパラシュート、そして、いかめしいものがあった。
　爆薬だった。
　戸と惑まどうイリナは〔運送屋〕に警告を受けた。
『もし飛行中に不審な行動をとれば爆発するぞ』
　不審なことをする気など毛頭なかったが、命を軽く見られている存在なのだと改めて思い知らされ、気が滅入った。
「皆にとって、私は実験体だものね……」
　ただひとり「味方」と言ってくれたレフは、ここにはいない。
『ライカ44』を離れてから、イリナはずっと後悔していた。彼は自分を守ったせいで、投獄されてしまった。感謝も謝罪も挨あい拶さつもできないまま引き離されてしまった。あのときサガレヴィッチ副長官に反抗せず我慢すればよかったのにと、悔やんでも悔やみきれなかった。

ヴィクトール中将に彼のことを尋たずねても「余計なことは考えるな」と突っぱねられ、アーニャも「わかりません……」とつらそうに答えた。
「レフ……」
イリナが首飾りの宝石ルーンヌイ・カーミエニをぼんやり眺めていると、ドンドンと強く扉がノックされ、ヴィクトール中将のだみ声が聞こえた。
「起きろ。予定どおり開始する」
午前一時、ヴィクトール中将とアーニャが部屋を訪れ、いよいよ射場へ向かう準備がはじまった。
軍服に着替えたイリナは、漆黒のローブを纏まとった司祭に『祝福』を受ける。司祭は神のご加護を祈り、馬の尾を聖水の入った桶に浸して、イリナに振りかける。司祭は目の前にいる少女が吸血鬼であることを知らず、淡々と旅立ちの儀式を進める。早く終わってほしいと思いながら嬉しくもない言葉で祈られていると、なぜかレフの温かくて優しい笑顔が浮かんだ。切ない想いがこみ上げる。しかし、ただ彼の無事を祈ることしかできなかった。

午前二時、格納庫内に技術士官たちのきびきびした声が飛び交い、三段式のエンジンを持つ二〇〇〇万馬力のロケットのロールアウトが進む。
「制動エンジン推進薬、充じゆう填てん！」「姿勢制御用窒素ガス、充填！」
キャビンをロケットのてっぺんに搭載すると、横倒しして機関車に載せ、技術者たちに見送られながら一〇キロメートル離れた発射台までゆっくりと移動してゆく。
搭乗者であるイリナはその場にいない。軍の伝統として、搭乗者が

ロールアウトを見るのは「縁起が悪い」とされていたからだ。

　イリナは宿泊所を出ると工場棟に移動して、コローヴィンと面会していた。
「イリナ・ルミネスク中尉……改め、コールサイン『彼岸花リカリス』。これが船内で読み上げる指示書だ」
　赤い瞳ひとみの色からコールサインを付けられたイリナは、コローヴィンから一枚の紙を受け取った。そこには、共和国の煮込み料理『ブリュシチ』と連合王国名物の『チーズバーガー』の調理法が書かれている。
「概要は昨日伝えたとおり。打ち上げ後、君は調理法以外の言葉を発してはならん。搭乗中の報告はすべて航行日誌に書きなさい」
「了解……」
『ノスフェラトゥ計画』は、無重力状態の検査だけでなく、宇宙空間で発した音声を正確に受信できるか確認することも重要な目的だった。だが、もし連合王国に傍受されてしまった場合、ふつうに報告をしていたら『極秘に人間を打ち上げたのではないか？』と勘ぐられる。
　そこでコローヴィンは、ふつうではない状況を作り出すことを考案した。
　キャビン内に聖歌隊の合唱を録音したテープを流しながら、暗号代わりの調理法をしゃべらせるのだ。
「君が無重力状態に達したとき、無事ならば祖国の味である『ブリュシチ』の調理法を。異常が発生していた場合、『チーズバーガー』を読み上げてくれ」
「わかりました」
　コローヴィンは打ち上げへの興奮を抑えきれぬ様子で胸を突き出す。
「ハンバーガー野郎め、傍受してみろ！　ラジオの料理番組だと思わせ

てやるわ！」
　一方、イリナは高揚感よりも不安のほうが大きく、調理法を見ながら船内での様子を想像する。
　と、そのか弱い両肩に、コローヴィンのごつごつした手がドンと置かれた。
「安心しなさい。翼竜ジラントなら、間もなく到着するだろう」
「え……？」
　困惑するイリナにコローヴィンは不敵に笑むと、発射場へ歩き去った。
　残された言葉の意味がわからないままイリナは宇宙服を着させられ、気密性などの最終点検がはじまった。宇宙服には、鼓動や呼吸、脳波、血圧などの生体情報を無線で地上へ飛ばすための計測機がいくつも取りつけられており、実験という印象をさらに深める。
　そしてイリナはヘルメットを被かぶる前に首飾りをつけようと手に取ったところ、技術官から「置いていけ」と注意された。
「これは、持って行きたいの……」
　イリナは拒こばむが、技術官は規則にない行為を許そうとしない。
「駄だ目めだ。不要なものは持ち込むな」
「私にとって大事なものだから！」
「諜報の道具か何かじゃないだろうな!?」
　技術官が奪い取ろうとするも、イリナは手から離さず、抵抗する。
「やめて！　触らないで！」
　身をかがめて守ろうとするイリナを技術官が数人で取り囲む。首飾りを握にぎりしめるイリナの手を技術官は強引に押し広げて、首飾りの紐ひもを引っ張った。
「あっ！」
　紐がぶちっとちぎれ、イリナの手のなかに宝石だけが残った。

「それも出せ！」
「やだっ……」
　イリナの瞳ひとみに涙がじわっと浮かんだそのとき、猛然と駆けてくる足音が響いた。
「──待って！」
　その声を聞いた瞬間、イリナの身体からだを流れる血がきゅっと心に沁しみ込んだ。
　イリナを取り囲む技術官をかき分けて、息を切らしたレフが現れた。
「レフ……？」
　信じられず目を疑うイリナ。捕らえられているはずの彼が、目の前にいる。
　なぜ？
　レフはちぎれた紐を見てすぐに状況を察したようで、技術官に身分証を提示して深く頭を下げた。
「すみません！　ずっとイリナの担当をしていた俺に任せてください！」
　技術官たちは目を合わせて頷うなずくと「早く頼むぞ」と言い、別の作業をはじめた。
「どうして、ここにいるの……」
　呆ぼう然ぜんとするイリナを、レフはしっかりと見つめる。
「遠心加速器の事故は、仕組まれていたんだよ」
「仕組まれた……!?」
「ああ。ナタリアさんから聞いた」
「……食堂の？」
「いや。食堂の職員は仮の顔だ。あの人の正体は〔運送屋〕だった」
　言葉を失うイリナに、レフは牢ろう獄ごくでの話を伝える。
　──レフの前に現れたのは、眼鏡めがねを外していつもと違うスーツに

身を包み、襟えりに〔運送屋〕のバッジを光らせたナタリアだった。
「ナタリアさん……？」
　事情がわからず狼狽うろたえるレフに、ナタリアは高圧的な態度で告げた。
「私は国家保安委員会の監視官。『ライカ44』において、『ミェチタ計画』及び周辺の監視を秘密裏に命じられていた」
「え、じゃあ、食堂の……寮母さんというのは……」
「野暮ったい田舎娘を演じるのも疲れるよ。おかげで、料理の腕は上達したけどね」
　ナタリアは自分の腕を叩たたいて自じ嘲ちようすると、懐から調査書を出してレフに突きつけた。
「先日の遠心加速器の故障は、事故ではなく事件だったと判明した。とある技師による策謀だ」
「それは、誰ですか」
「君もよく知っている男……フランツ・フェルツマン技師」
「フランツ……!?」
　開いた口がふさがらないレフに、ナタリアは淡々と真相を告げる。
「あの男は、機械が暴走するように細工をしていた。彼の態度に、何かおかしな点を感じなかったか？」
　動揺のなか、レフはフランツとのやり取りを思い返してハッとなった。
「……イリナが無響低圧室に隔離されてるとき、少し様子がおかしかった……」
　ナタリアはやれやれといった感じで肩をすくめた。
「君とイリナの周囲には目を光らせていたんだが、我々ももう少し気をつけるべきだった」
「でも、彼は、どうして……」

「おそらく『ミェチタ計画』の失敗を狙ってのことだろう。動機は語らないが、おそらくチーフと敵対している者に命じられたと推測される。今頃、尋じん問もんで吐かされているだろうが」
「……」
「レフ・レプスよ。只今をもって、事故のことは記憶から抹消せよ」
　放心状態にあったレフだが、なんとか言葉を絞り出す。
「……ひとつ、聞いてもいいですか」
「許可する」
「フランツは、どうなるんですか」
　ナタリアは冷酷な目つきで答えた。
「そのような人物は存在していない」
　つまり、丸ごと闇やみに葬ほうむるということだ。国家権力を使って、写真から消し、戸籍から消し、この世にはじめからいなかったことにしてしまう。
　ナタリアは調査書をしまいながら、レフに近づく。
「それから、もう一点。事故がなかったということは、君の上官に対する行為もなかったということになる」
　レフの眼前に立ったナタリアは、胸のポケットから一枚の紙を出した。それは軍用飛行場の使用許可証だった。
「え……？」
　戸と惑まどうレフに、ナタリアはそっと耳打ちする。
「好きになさい」
　彼女はレフにだけ見えるように、ふっと寮母の顔をした。

「―それで、飛行機をぶっ飛ばしてきたんだ。間に合ってよかったよ！」

満面の笑みを浮かべるレフ。イリナは再会できた嬉しさで胸がいっぱいになったが、裏腹の言葉が口を突いて出てくる。
「私は、べつに、来てほしいとか思ってなかったけど」
「訓練した生徒の打ち上げは見てみたいものなんだよ」
「あなたの生徒になったつもりなんてないわ……勝手にすれば」
「じゃあ勝手に見守る」
そう言ったレフは、イリナの手にある宝石を指さした。
「気持ちはわかるけど、置いていかないと。貴重品を預けられる場所を聞こうか？」
イリナは、覚悟していた。
死ぬ覚悟を。
だから、そのときはこの石と、いっしょに星になるつもりだった。
しかし。
特別な血の絆を結んだ人になら、託してもいいと思った。
イリナはレフに宝石を差し出す。
「いつか月へ飛べる日が来たら……そのとき、あなたが持って行って」
「え？」
「補欠だから無理かしら？」
イリナの一言に、レフは苦笑して手を振った。
「悪いけど、持って行くのは勘弁だ」
「そ、そっか……」
まさか断られると思っていなかったイリナは、心に大きな穴が開いたような寂しさに襲われた。嫌われるようなことばかり言ったせいで見捨てられてしまったのかもしれない。
うつむいて落ち込むイリナに、レフは優しく声をかける。

「だって、月へ持って行くのは君だから。俺は一時的に預かるだけなら

いいよ」

　イリナの胸が、とくん、と鳴った。
「あ……」
「な？　今日も、飯の時間には戻って来られる予定だろ？」
　慰なぐさめなんかじゃない。きっとレフは本気でそう思っている。藍あい色いろの綺き麗れいな瞳ひとみは、イリナの帰還を信じて疑わぬように、曇りなく輝いている。
　心がきゅっとなったイリナだが、こみ上げるものをこらえて、精一杯の悪態をつく。
「……戻ってくるに決まってるじゃない。ちょっと出かけるだけよ。盗んで売ったりしたら首に噛かみつくからね……！」
「ははっ、それでこそイリナだ」
　レフは宝石を受け取るとハンカチにくるんでポケットにしまい、技術官たちに「お待たせしました」と声をかける。
　離れていた技術官たちが戻り、イリナにヘルメットを装着していく。その様子をレフは腕組みして眺めていたが、ふと思いついたようにパンと手を鳴らし、技術官に言った。
「イリナの打ち上げは、国民には伝えないんですよね？」
「そうだが。なんだね？」
「だとしたら、宇宙服姿でパラシュート降下してきたとき、敵国の襲撃だと勘違いされるかもしれません。もし猟銃で撃たれたら大変です」
「うむ……その可能性はあるな」
「だから、国籍をはっきりさせるために、ヘルメットに国名を書くのはどうですか？」
　技術官たちは軽く相談すると、すぐに答えを出した。
「気密性にも問題はないだろう。許可する」

技術官が黒色の油性ペンを差し出すと、レフは首を横に振った。
「せっかくだし、派手で目立つ色にしましょう」
レフはイリナの瞳と同じ赤色の油性ペンを取ると、イリナのヘルメットにツィルニトラ共和国連邦の略称『ＣЦＣＰ』を大きく書き込む。
イリナは内心、私の国は違うのに、と不満を覚えた。
そのときレフはイリナにだけ聞こえる声で、ぼそっと呟つぶやいた。
「リリット国の名前じゃなくてごめんな」
まるで心が読まれたみたいでイリナの心臓が跳ねた。
「……本当にそうよ」
イリナはレフに悟られないようにまた悪態をつく。
気遣いが嬉しいのに、つい反発してしまう自分が嫌になる。会えないと物寂しいが、顔を合わせると落ち着かない。
「よし、書けた」
レフは一歩離れると、イリナを眺めまわすように見て、にこにこと微ほほ笑えんだ。
「またニヤニヤしてる……」
「いや、前に試着したときは正直『着られてる』って感じたんだけど、今は、未知の世界に戦いを挑みにいく勇敢な飛行士みたいだ」
「みたい、じゃなくて、飛行士よ」
「ははっ、そうだな。君は立派な宇宙飛行士コスモノートだ」
「うん……」
イリナは自分の身体からだを見回した。重くて蒸して可か愛わいくないけれど、誇らしい気持ちになる。レフはいっしょに行けないが、ヘルメットの文字が力をくれる気がした。
そして。
「出発の時間だ！　バスに乗れ！」
ヴィクトール中将の大声が響いた。

午前四時。夜明け前の蒼あおい空に、整備塔の照明が幻想的に光る。

降りはじめた綿雪がすべてを白く覆おおっていき、今は凪ないでいる寒風も、日の出を過ぎた頃には強くなるという予報が出ていた。

発射場では打ち上げの準備が進んでいる。蟻ありのように忙しく動き回る技術官たちの中心には、天に向かって屹きつ立りつする銀色の灯台のようなものがある。

「ロケット……」

イリナはここに来てはじめて、実物を目にした。

全長三一メートル、総質量二八一トンという三段ロケットが、四方から延びた巨大なアームで空中に吊り下げられている。

「あれに乗るんだな……」

レフに言われて、ぞくりとイリナの肌が粟あわ立だった。

「行くぞ」

戦地に向かうような厳しい顔つきのヴィクトール中将に促うながされ、レフとイリナは発射台に向かう。

発射台の周りには、大勢の関係者が集まっている。国家委員会の面々、〔運送屋〕の幹部、基地の科学者や技師たち。そしてコローヴィン、モジャイスキー博士、アーニャ。ゲルギエフ第一書記は不在で、官邸で成功の電話を待っている。

そこへレフとヴィクトール中将とともに宇宙服を着たイリナがやってくると、皆の目が一斉に向いた。

レフとヴィクトール中将が敬礼したのに続き、イリナも右手の指先をこめかみにつけて、敬礼する。

イリナは唇を固く結び、無言の重圧を全身で受け止める。

しばしの静寂ののち、発射管制棟ブロツクハウスから通信を受けた技

術主任が報告する。
「準備完了しました！」
　ざわめきが起きるなか、ヴィクトール中将がしゃがれ声を張り上げる。
「同志諸君、見送りだ！　さあ、座ろう！」
　号令で皆がしゃがみ、その一秒後。
「よし、出発だ！」
　皆はすぐに立ち上がり、盛大な拍手をした。
　あまりの意味不明さにイリナがきょとんとしていると、レフがイリナの肩をぽんと叩たたいた。
「共和国に古くから伝わる慣習だ」
「どんな意味があるの？」
「じつは俺もよくわからない」
「ふふっ、なによそれ」
　緊張で固まっていたイリナの表情が少し和やわらぐ。
　会話をしているふたりのもとへコローヴィンが歩み寄り、眼光鋭するどくイリナを見る。
「『彼岸花リカリス』よ、キャビンに搭乗しなさい。そのあと全システムの最終点検をやり、打ち上げを行う」
「はい」
　レフがイリナに手を差し出し、握手を求める。
「気をつけて」
「うん」
　握手を返すイリナ。分厚いグローブ越しなので、握にぎった感触はぼやけている。
「ははっ、今回は握手してくれたな」
「え？」

　レフはニコッと笑った。
「最初は拒否されたどころか、冷たい目で見られた」
　イリナは独房ではじめて会ったとき、握手を無視したことを思い出した。
「そんな昔のこと、忘れたわよ……！」
　素直になれないまま、打ち上げの時間が刻一刻と近づいていた。レフと話していると、別れがつらくなり、イリナは想いがあふれそうだった。
「もう、行くわね。じゃあね」
　なるべく冷静を装って言うと、イリナはくるりとレフに背を向け、ロケットの頂点につながる昇降機に乗り込む。
「パラシュート慌あわてるなよ！　君ならできる！」
　背中に受けた声援が、イリナの胸をぐっと押した。熱いものがこみあげるのを、唇を噛かみしめて耐えた。レフの顔を見ると泣きそうなので、振り返らない。
　イリナを乗せた昇降機は、ゆっくりと上昇していく。雪の砂漠の遥はるか先、東の地平線の果てが、淡く白みはじめている。
　感傷に満たされ、大きな不安と期待が入り混じり、身体からだの奥底で心が震える。
　この惑ほ星しとも、お別れかもしれない。
「……ううん」
　大きなヘルメットの中で、イリナは首を振った。
「戻るって、約束したでしょ」
　昇降機がてっぺんに到着すると、鉄製の足場に降りる。イリナの目の前に、銀色の球体が鎮座している。
　イリナは一礼し、開口部から内部に入っていった。

第五章　神の領域へ

藍の瞳　Очи　индиго

イリナを見送ったレフたちは、打ち上げの指揮が行われる発射管制棟ブロツクハウスに移動した。発射管制棟の上部には大きな角状のコンクリートが飛び出ているが、それはロケットが誤って飛んできたときに直撃から建物を守るためのものだった。これまで打ち上げ直後に爆発することが何度もあり、「真っすぐ上に飛ぶ」という保証はなかった。この天井が崩れ落ちた悪夢を思い出したレフは怖気立ったが、すぐに頭から振り払う。

管制棟内の各部屋では、基地所属の技術官たちが冷静かつ慎重に発射準備を進める。

レフは部屋の隅で邪魔にならないように待機している。

白黒のモニターにはキャビン内にいるイリナの顔が映っているが、ノイズが混じり、映りが悪い。

イリナの顔は、見たこともないほど硬い。

だが、あとはもう、イリナの無事を祈ることしかできない。

さすがのコローヴィンも緊張しているようで、管制棟内をうろうろ行ったり来たりして落ち着かない。

《―『真夜中ポールナチ』、願う。こちら『彼岸花リカリス』》

キャビン内のイリナから通信が入った。基地内でのやり取りは連合王国に傍受されないため、ふつうに話しても問題はなかった。

イリナの呼びかけに、コローヴィンが応対する。

「こちら『真夜中ポールナチ』。どうぞ」

《通信装置の点検、完了。地球儀も所定位置》

イリナが淡々と報告をする。声は固く、緊張が伝わってくる。

　生体機能を測定しているモジャイスキー博士とアーニャが「脈拍六四、呼吸二四。異常ありません」とイリナの体調を告げる。
　時計を見ていた技術担当主任が宣言する。
「発射まで一時間です」
　皆、時計を気にしはじめ、雑談が少なくなる。
《こちら『彼岸花リカリス』。鼓動は正常。気分は良好。出発準備は完了》
　発射が近づくほど、技術官たちの確認にも力みが入りはじめる。
「発射まで三〇分」
「機内は正常に与圧されています」
　レフは無意識のうちに拳こぶしを握にぎりしめていた。発射までの時間が永遠のようにも感じられる。
「──発射まで一〇分」
　コローヴィンがマイクに向かって早口でまくしたてる。
「こちら『真夜中ポールナチ』。『彼岸花リカリス』、打ち上げまで残りわずかだ。カウントダウンはしない。システムの確認が終わり次第、すぐの点火とする。聖歌を再生してくれ」
《了解》
　通信を終えるとコローヴィンは大きく手を叩たたき、室内の士気を高める。
「最終確認に入れ！」
　技術官たちが持ち場を冷静にチェックする。
「アクセル」
「通信機器」
「測距装置」
「発射装置」
「すべて異常なし！　予定どおりです！」

　パチンパチンとスイッチが入れられていく。
　コローヴィンが鋭するどい声で命じる。
「鍵かぎを準備せよ！」
「準備します！」「了解！」
　コローヴィンの指示を技術主任が繰り返し、技術官がコントロールパネルに二本の鍵を軽く刺し込む。
「『彼岸花リカリス』！　間もなくだ！　不安はあるだろうが、心配はいらない。我が国の技術力と私を信じ、自信を持って飛びなさい！」
《了解》
　緊張を帯おびたイリナの声の後ろでは、荘厳な聖歌の合唱が鳴り響いている。
　断熱シートの軽量化はイリナに言えなかった。レフもただ、技術者たちの夢の結晶を信じるしかなかった。
　コローヴィンが技術官たちへ指示を飛ばす。
「開始せよ！」
「鍵をセット！」「了解！」
　技術官が二本の鍵をグッと押し込んだ。
　ロケットを支えていた支柱が外れる。
「点火スイッチ！」
　コローヴィンの命令に合わせ、技術官たちが素早くスイッチを入れる。
　一段目と二段目のエンジンに火が点ついた。
「予備段階」
　燃料がごうごうと燃え盛り、火を噴く。
「中間段階！」
　発射が近づき、管制室の空気が張りつめる。
「『彼岸花リカリス』出発だ！　これ以降、調理法以外は口にするな

よ！」
《はい……！》
　モニターに映るイリナが、唇を噛かみしめた。
　コローヴィンの声が熱を帯おびていく。
「エンジン点火！」
「主燃焼！」「エンジン噴射！」
　火力が最大に高まり、ロケットは今にも飛び立たんとしている。
「発射ッ！」
　コローヴィンが号令を上げると同時に、エンジンから激しい炎が噴き出した。
　モニターのノイズの向こうに、イリナの強こわ張ばった顔が見える。
　レフの脳裏を爆発の悪夢がよぎる。
「飛べる、絶対に……！」
　レフは両手をかたく握にぎり合わせ、全身全霊で祈る。
　大地を引き裂くような地鳴りが耳をつんざく。
　煙がもうもうと地面を覆おおう。
　ロケットは胴体を震わせ、ゆっくりと浮かび上がる。
「飛べっ！　飛んでくれ！」
　祈りよ届けとレフは必死になって叫ぶ。
　地面を焼き尽くすような炎、勢いを増す轟ごう音おん。
　目も眩くらむほどの光を放ちながら、ロケットはぐんぐん速度を上げる。
　そしてそのまま上昇して分厚い雲を突き抜け、まだ暗い大空に吸い込まれていった。
　打ち上げは成功。
　レフは興奮でわなわなと手が震えた。
「やった……！」

　管制室内にも盛大な歓声と拍手が巻き起こる。
「よし！」「成功だ！」
「静まれっ！」
　歓喜を打ち消すコローヴィンの一喝で、緩ゆるんでいた空気がピリッとした。
「まだ宇宙に到達したわけじゃない！　本番はこれからだぞ！　騒ぎたければフットボール場へ行け！」
「はっ……！」
　技術官たちは顔を引き締め、作業を続行する。
　キャビン内の状況を知らせる磁気テープには、今のところ問題は出ていない。
　それを見て、レフはホッとした。このまま宇宙へ行ってくれと願い、ポケットにしまってある宝石を、そっと握にぎりしめる。
「高度四〇〇〇、五〇〇〇、六〇〇〇――」
　轟ごう音おんの残響が漂ただよう耳に、技術官たちの声が届く。
「燃料よし」
「酸素よし」
「加速度四Ｇ、五Ｇ」
　すべては順調に進んでいるが、キャビン内を映していたモニターがノイズまみれになってしまい、イリナが見えなくなった。飛行に直接的な影響がないとはいえ、レフは少し不安になる。
「キャビンの気圧、一三から一四ＰＳＩ、問題なし」
「一段目の切り離し、成功」
「よし！　そのままいけ！」
　宇宙が近づけば近づくほど、管制室内の空気が興奮を帯おびていく。
「キャビンの温度は二〇度に保たもたれています」
「三段目、燃焼開始」

「おいっ、これは……!?」
　遠隔測定テレメトリーの数値を凝視していたモジャイスキー博士が突然不穏な声を上げ、室内がざわついた。
「何が起きた!?」
　コローヴィンの問いに、モジャイスキー博士は髭ひげを強くねじる。
「『彼岸花リカリス』の体調に、やや異変が。脈拍が一五〇まで上昇しています」
「大丈夫なのか？」
「まだ耐えられる数値ですが、意識を失う可能性もあります」
　磁気テープには『危険』を示す数字が出ており、レフの胸に生まれた不安が大きくなる。
　コローヴィンがイリナにマイクで呼びかける。
「『彼岸花リカリス』、調理法は！」
　回線を開けてもイリナから応答はなく、聖歌だけがむなしく垂れ流される。
　コローヴィンは顔をしかめ、自分の頭をこつこつと叩たたく。
「まいったな……！」
　イリナの状態が不明でも、自動操縦のロケットは順調に飛行を続ける。
「二段目の切り離し、完了」
「九五〇〇、一〇〇〇〇、一一〇〇〇」
「大気圏を離脱、無重力空間に入りました」
「燃焼終了」
「『彼岸花リカリス』！」
　呼びかけに反応がないと、コローヴィンの怒りの矛ほこ先さきがモニター担当の技術官に向かう。
「モニターのノイズはいつ直るんだ!?」

「原因究明中です！」
　レフは嫌な予感に苛さいなまれる。
　意識を喪失していて調理法すら話せないのではないかと。
　ロケットの状況を伝える技術官の声も、暗く沈んでいる。
「切り離し完了。軌道に乗りました……」
　宇宙空間に到達したが、喜ぶものは誰ひとりいない。搭乗者であるイリナになんらかのトラブルが起きているのは間違いないからだ。
「猛烈な荷重で意識を失ったのか？」
「無重力に脳がやられたのか？」
　様々な憶測が飛び交う。
「脈拍は正常値に戻りつつありますが……」
　モジャイスキー博士の報告も歯切れが悪い。
　技術官たちがあれこれ議論するが、モニターはノイズまみれで、状態を確認する術すべがない。
　国家委員会の幹部が十字架のチャームを握にぎって祈る。
「主よ、どうかお守りください……！」
　アーニャが不安そうに窓の外を見上げる。
「イリニャンさん……」
　立ち尽くしていたレフは宝石を握りしめ、ひたすら祈る。
「イリナ……返事してくれ……」
　そのとき──
《ん……？　ここは……えっ!?》
　聖歌に混じり、イリナの驚く声が聞こえた。
　コローヴィンがマイクに唾つばを吐きかけるような勢いで叫ぶ。
「『彼岸花リカリス』、無事なのか!?」
《あっ……！》
　イリナは我に返ったような反応をすると、通信をはじめた。

《えっと……『彼岸花リカリス』の今日の料理ショウ。今こ宵よいは……、ビーツとサワークリームを使うブリュシチ》
「ブリュシチ！」
　じっと耳を澄ましていた技術官たちからワッと歓声があがった。
《まず、じゃがいも、……にんじんを、食べやすい大きさに……切るのよ》
　基地内の高揚と真逆に、イリナは静かに調理法を伝える。声が時折震え、途切れるさまから、こみあげる感情を抑えているのがわかる。
《ぐつぐつ煮込んでいるあいだに、サワークリームを用意しておくの》
　このイリナの声は宇宙から届いているのだな思うと、レフは感動を超えた不思議な気持ちになった。
「イリナ……」
　彼女が無重力空間にいる姿を想像する。ふわふわと浮いているのだろうか。向こうからこの惑ほ星しはどのように見えているのだろうか。月は綺き麗れいに見えただろうか。
「モジャイスキー博士！　『彼岸花リカリス』の体調は大丈夫なんだな!?」
　コローヴィンに確認されたモジャイスキー博士は、しっかりと頷うなずいた。
「生体反応、すべて正常です！」
「よしっ……まずは成功だ！」
　皆が皆、安あん堵どの溜ため息いきをこぼし、握手を交わして抱き合い、盛大に拍手をする。宇宙に到達したのが吸血鬼でも偉業には違いなく、ヴィクトール中将でさえも顔をほころばせ、室内全体が祝福の空気に包まれた。
「気を緩ゆるめるなよ！　まだ大気圏再突入が待っているんだからな！」

浮かれ気分に釘を刺すコローヴィンだが、成功の喜びは隠せず、頬ほおが紅こう潮ちようしている。
ロケットで飛んでいるイリナにはこのお祭り騒ぎは伝わっておらず、本物のラジオ番組のように淡々としゃべり続ける。
《―お好みで、パセリかディルを加えるといいわよ。さて、ブリュシチの調理法は、これでおしまい。……つぎに、おいしい飲み物を、皆さんに教えてあげるわ》
室内にどよめきが広がった。
「飲み物？」
「そんな調理法など渡していないぞ？」
予定外の通信に、コローヴィンの眉み間けんにしわが寄る。〔運送屋〕たちが「爆破か？」と囁ささやき合ったのをレフは耳にして、身体からだが石のように硬くなった。
《浸酒ナストイカ。果物やハーブを、蒸留酒ジーズニに浸けて作るの》
「あっ……」
少し照れを含んだような声で読み上げられた言葉に、レフは胸を射抜かれた。レフの周囲では「祖国の味だ」「問題ないのでは？」と皆が口々に言い合っている。
《おすすめは茱萸グミの実ね。まずはショ糖のシロップを用意して》
イリナが二〇歳になったら飲む約束をした、レフの好きな酒だ。
《隠し味には、何を入れるのがいいと思う？》
「ゴロツキアザミの蜂はち蜜みつ……」
《ゴロツキアザミの蜂蜜を、スプーン一杯入れるといいわ。美お味いしいわよ》
「すぐ酔っぱらってたくせに……」
《ええ。けっこう強いお酒だから、口のなかが焼けるように熱くなっちゃう》

「はは……」
　いつしか周囲の雑音は消えていた。天を見上げて目を瞑つむる。瞼まぶたの裏に、宙そらを飛んでいるキャビンが浮かびあがり、イリナの声だけが空から降り注ぐ。
《このお酒には、どんな音楽が似合うかしら？》
「ジャズ……『愛しのあなた』だ」
《私は『愛しのあなた』が好き。いい音楽よね》
「歌詞わかんないくせに」
　うるさい、と突っ込まれた気がした。
《酔ってスケートすると、転んで大怪け我がしちゃうかも？》
　妖精のように氷上を舞い、隣に腰かけて同じ星空を見上げ、月の詩を詠うたっていたイリナ。誰よりも強く宇宙を想っていた彼女は、今、人類未踏の世界にいる。
「君の夢は、叶ったか……？」
　レフは天に向けて呼びかけた。
《私、酔ってるのかしら。身体からだがふわふわするの》
　無重力空間にいるイリナを思い描くと、熱いものがこみ上げ、胸がいっぱいになった。

　緋の瞳　Очи　алый

「ふぅー……あんなこと言って大丈夫だったかな……」
　通信を終えたイリナは、長い溜ため息いきをついた。調理法以外しゃべってはならないと指示されていたが、レフにはどうしても気持ちを伝えたかった。
「……本当に、私、宇宙に来たのよね……」

覗のぞき窓に映る青い惑ほ星しを見て、夢ではなくて現実なのだとあらためて理解する。

イリナは、大気圏を突破したときの記憶がなかった。

気づいたら、宇宙にいたのだ。

打ち上げ直後は航行日誌をつけられるくらい意識はしっかりしていたが、加速し上昇する過程で大きな荷重がかかり、座席に押しつけられて身体が動かせなくなり、頭がくらくらし、次第に視界が暗くなっていった。気を失わないよう必死に堪こらえていたが、ロケット切り離しの瞬間、頭の芯が潰つぶされるような急激な圧力に襲われ、意識がふっと遠のいた。

そして、目を覚ますと、黒竜のぬいぐるみがふわふわ漂ただよい、身体からだに圧おしかかっていた重しが消えていた。

頭上の窓を覆おおっていたカバーはいつのまにか外れており、そこから、青く透明なヴェールに覆われた惑ほ星しが見えた。

大きな弧を描いた地平線は紺こんから藍あいへと柔らかに階調を変えていき、天空ではオーロラが虹色にゆらめく。神を称える聖歌が祝福するような光景に、イリナは息をするのも忘れるほど魅入られていた。

そのとき、イリナの心に、思いもしなかった考えが浮かんだ。

──きっとここには、神様がいる……。

──私たちを虐しいたげた神じゃなくて、本物の神様が……。

その後しばらくして基地からの通信が耳に届き、ハッと現実に引き戻されたのだった。

イリナは窓の外に浮かぶ地球を、感慨深く眺める。

「あそこで、生きてたんだ……。あそこに、レフがいるんだ……」

キャビンは時速二八〇〇〇キロで飛んでいるとは思えないほど緩ゆるやかに回転し、ゆっくりと窓の外の景色が変わっていく。

写真や地図でしか見たことのなかった世界が、眼下に広がっている。

砂漠に影を落とす雲。
太陽を浴びてきらめく海。
熱帯雨林を縫ぬって流れる大河。
積乱雲の中を飛びかう稲いな妻ずま。
星々は地上から見るより、ずっと明るい。
窓から見える範囲が狭いため星座は判別できないが、神の領域において、星座や神話などは意味がないようにイリナは思った。
「……そうだ、やらなきゃ……」
感動してばかりはいられない。
課された作業を完かん遂すいしないと、帰還後に人間から役立たず扱いされる上に、レフにも迷惑をかけることになる。
無重力空間での消化器官の働きを調べるために、宇宙食をストローで吸う。地球の外で食べても、微妙な匂いと食べ応えのない食感は同じだった。
給水装置から水を飲もうとすると、こぼれた水滴が球状の粒になって舞い、ヘルメットの文字にぶつかった。
「ふふっ……レフも飲めたかな？」
いっしょに体験したら楽しいだろうなと想像して、恋しいような切なさが胸に溢あふれた。基地から宇宙まで飛んだ距離や時間は、故郷から共和国に連れて行かれたときよりもずっと短いのに、二度と会えないほど遠く引き離されてしまったように感じる。
「もうすぐ帰るんだし……帰ったら補欠のレフに自慢してやるんだから」
気を取り直して航行日誌に記入していると、窓から射し込む太陽の光が強くなった。宇宙服に守られた肌は大丈夫だが、目がひりひりと痛む。カーテンなどはないため、イリナは顔を手で覆おおった。
心臓の鼓動が、とくん、とくんと響く。

脈拍も呼吸も、地球にいるときと変わらない。

無重力が身体からだに及ぼす影響などイリナにはわからなかったが、ひとつ、確かなことがある。

心の穢けがれは綺き麗れいに洗われた。

これまで、人間が支配している地球など壊れてしまえと幾千回も呪ったが、陰いん鬱うつな感情は消し飛び、青く美しい惑ほ星しは何よりも尊いものに思えた。

瞼まぶたの向こうの眩まぶしい光が消えたので、イリナは目を開けて窓の外を見る。

連合王国の大陸上空を通過中で、太陽に照らされていない影の部分に入っていた。夜の闇やみが落ちた大地には、家々の灯火である光の粒が砂金のように散らばっている。

キャビンがゆるやかに回転して宇宙の方を向くと、窓の先に、白銀に輝く月が姿を見せた。

СЦСР

「あっ……」
　古城のバルコニーから眺めるよりもずっと大きく、鮮明に地表が観察できる。
「虹の入り江……？　夢の湖……？」
　何度も唱えてきた詩が、口をついて出てくる。
「眠りの沼……嵐の大洋……」
　呟つぶやくたびに、子どもの頃を思い出す。
　満月の夜に母と手をつなぎ、空を見上げていっしょに唄ったこと。
　城の小部屋で砲撃音に怯おびえていたとき、父が抱きしめてくれたこと。
「蒸気の海、テネリッフェ山塊……」
　二度と戻れない過去がいっぱい溢あふれて、薄うす紅べに色いろの瞳ひとみが涙に潤うるむ。
「腐敗の沼、大波の入り江、ラプラス岬……」
　いつもの癖くせで首飾りを握にぎろうとして、レフに預けたことを思い出した。
「あ……」
　月に降り立つことなど、叶うことのない夢だとわかっていた。
　だから、宇宙を一度でも飛べたら死んでもいいと覚悟して、人間よりも先に飛んでやろうと決意して、実験体になった。
　けれど、今は違う。
　レフと出会ったことで、イリナの人間に対する嫌悪の気持ちに変化が起きていた。
　自分の命はまもなく終わってしまうかもしれないが、その代わりに、レフに月へ行ってほしいと心から思えた。
　いつかレフが月にやってくるまで、オーロラの向こう側で待っていればいいと思えた。

―でも、死にたくはない。
いっしょに月旅行がしたい。
二〇歳になったら茱グ萸ミの実の浸酒ナストイカを飲んで、また氷の湖を滑りたい。
宇宙について雪が解けるほど語ってみたい。
「レフ……」
名前を呼んだとたん、涙がほろほろとこぼれ、目の下に貼りつくように溜たまっていった―。

飛行は順調に進み、キャビンが地球の陰から出ると、地平線の色調が明るく変わりはじめた。無重力での実験飛行を終え、いよいよ地上への帰還となる。
制御装置が自動的に働き、減速用の逆噴射が発動する。キャビンは徐々に速度を落として軌道を離れ、もっとも危険な大気圏再突入のフェーズに移行する。
地球が近づき、イリナが重さを感じはじめたとき、窓越しの景色に変化が起きた。
キャビンを包みこむような、紫色のゆらめきが見える。
炎だ。
「燃えてる……？」
炎は不気味に勢いを増し、イリナは焦燥感に襲われる。再突入時に火だるまになるとは聞いていたが、実際にその状態に陥ると恐怖で息が詰まった。
突如、ガツンという衝撃がキャビンを襲った。
「!?」
座席が揺れ、窓の向こうにあった星々がすーっと横に流れた。機体そのものが高速で回転しはじめたのだ。

「え、これ、どうすればいいの……!?」
　なんとかしたいが、制御の仕方などわからない。きりもみという最悪の事態が脳裏をよぎる。
「はぁ……はぁ……」
　大きく呼吸をして落ち着こうとするが、頭の中心を鈍器で殴なぐられたような痛みが走る。
　パチッパチッ──と、外壁が焼ける音が聞こえてくる。
　室温計が、二一度に上がった。
　二二度、二三度。
「待って……！」
　底部以外の断熱材を薄くしたことが裏目に出た。
　炎に包まれたままキャビンは落下し続け、増大する圧力がイリナを座席に押しつける。
「うっ……」
　身体からだが重くて身動きできない。室温は上昇し、宇宙服の中はじわじわ蒸していく。
「……このくらい、サガレヴィッチの苛いじめに比べたら、たいしたことないわよっ……！」
　潰つぶれそうな心を奮い立たせようとするが、声は震え、顔が青ざめる。視界が灰色になり、室温計の数字がボヤける。鉛のように重くなった身体を滝のような汗が伝う。茹うだるほどに熱されたキャビンのなか、イリナは意識を保たもつことで精いっぱいだった。
「……助けて……レフ」

終奏　постлюдия

藍の瞳　Очи　индиго

「『彼岸花リカリス』！　応答せよ！」
「駄だ目めです！　回復しません！」
　技術官が悲痛な叫びを上げた。再突入時にはプラズマの影響で通信停止状態ブラツクアウトとなるが、いつまでたっても復旧しなかった。
「ケーブル断裂！　モニターも不能！　アンテナが折れたようです！」
　コローヴィンが顔を真っ赤にして机をバンと叩たたいた。
「ほかに何が起きてるんだ！」
「室温上昇！　遮熱シールドに不具合発生し、火災、分解の恐れあり！」
　軽量化が仇となるのか。右往左往する技術官たちを見ているとレフは居ても立っても居られず、通信用のマイクを奪い取った。
「イリナ！　返事してくれ！」
　必死に呼びかけるレフをヴィクトール中将が怒ど鳴なりつける。
「おい！　勝手な行動を取るな！」
　だがレフはマイクを離さず叫び続ける。
「イリナ……ッ！」
　嫌な予感が渦巻く。
　熱さに弱いイリナが耐えられるのか。
　パラシュートで無事降下できるのか。
　そもそも、キャビン本体は無事なのか。
　孤独に苦しんでいるイリナを想像すると、胸がかきむしられる。
　顔面蒼白で頭を抱える技術主任に〔運送屋〕が詰め寄る。
「キャビンの落下地点はどこだ!?　国外ならば、ただちに爆発せよ！」

「想定は国内です……！　ここより東へ四〇キロにあるパルマ平原中央部―北緯四六、東経六七地点から直径二〇キロメートル内！　落下想定時刻は午前七時一二分前後！」
　時計は午前六時三四分。レフはマイクを投げ出すとコローヴィンの前に駆け、食ってかかるような勢いで訴える。
「チーフ！　俺に捜しに行かせてください！」
「もちろんだ！」
　頭まで紅こう潮ちようさせたコローヴィンはレフの両肩を掴つかんだ。そして周りを見渡してヴィクトール中将や基地職員に命じる。
「君たちもぼさっとしてるな！　キャビンの回収に向かえ！」
「はっ！」

　パルマ平原では霜の精マロースが猛烈に暴れ、吹雪になっていた。視界は極めて悪く、数メートル先がようやく見える程度。上空は不気味な乱層雲に覆おおわれ、もしキャビンが落下してきたとしても地上近くなるまでは目視できない。
　基地を出発した捜索隊は、各自散開して無線で連絡を取り合いながら、想定落下地帯へ急いでいた。
　荒天のためにヘリは出せず、レフは軍用バイクで雪のなかを突っ走る。
　ゴーグルに雪がへばりつく。防寒着を貫く寒さに身体からだは凍りつき、基地を出て間もないというのに指先は感覚を失っていた。
「イリナ！　どこにいるんだ！」
　キャビンの正確な落下地点までは弾き出せず、イリナが射出されたかどうかもわからない。絶望的な状況のなか、基地からの連絡を頼りに、希望を捨てずに探し続ける。

《こちら管制室！　そろそろキャビンの着地時間だ！》
　無線通信が入ったそのとき――
　天を覆う雪雲を割って、火の玉が墜落してくるのが見えた。
「キャビンか!?」
　即座にレフは基地へ報告する。
「こちらレフ！　キャビンの落下を確認！」
《了解！》
「イリナは射出されたのか!?」
《不明！　現在確認中！》
　基地からの曖あい昧まいな返答にレフは舌打ちする。
「イリナ……！」
　炎に包まれたキャビンは無慈悲に墜落していく。もし射出に失敗していれば、イリナは落下の衝撃で死んでしまう。
「落ちるっ……！」
　ドン！
　爆発音と地響きが、レフの身と心を揺さぶった。
「まさか、乗ったままじゃないよな……」
　バイクを止め、パラシュートを探して上空を見回す。だが、氷交じりの雪と雲以外は何も見えない。
「イリナ！」
　天に向かって吼ほえたが、その声は地吹雪にかき消される。
「くそっ！」
　イリナの無事を祈り、バイクのエンジンを吹かして落下地点へ向かう。

　落下地点にたどりついたレフは、呆ぼう然ぜんと目を見張った。
　砂地に半分埋うずもれるように、ひしゃげたキャビンがあった。銀色

だったはずの外面は黒く焦げ、破損した部品があたりに散らばっている。
　無残な犬の死し骸がいが頭をかすめた。
「いや、そんなわけない……！」
　バイクを降りてキャビンへ一歩一歩近づき、底知れぬ恐怖に襲われながら開口部を覗のぞいた。
　内部は爆薬が破裂したせいで激しく損傷している。
　血の気が引いたが、座席は射出されており、イリナの姿はない。
「爆発より前に、脱出してるよな……？」
　不安は拭ぬぐいきれないが、パラシュートさえ無事に開いていれば、イリナは必ずこの近くに降下している。
「待ってろ！　絶対見つけてやるから！」
　レフはバイクに飛び乗ると、砂と雪の交じった泥を跳ね上げて疾しつ走そうする。
　風雪は強いが、雲の向こうに太陽が昇ったおかげで視界がきくようになってきた。一方で、気温はいっこうに上がらない。いくらイリナが耐寒性に優れているとはいえ、もし骨折でもして動けなくなっていれば、じわじわと体温を奪われていき、凍死してしまう。
「まずいな……」
　吹雪のなかをやみくもに走りながら、イリナのことを想う。
　上手く着地できただろうな？
　いや、あんなに訓練をがんばったんだから、絶対に大丈夫だ。
　今は、信じることしかできない。
「絶対大丈夫だ……！」
　あちこち見回しながら猛スピードでバイクを駆っていると、ガッという衝撃がハンドルとシートに走り、車体が揺れた。雪に隠れていた岩に前輪が乗り上げた。

「っ！」
　車輪が滑り、体勢が崩れる。
「しまったっ……！」
　立て直せずにバイクは宙そらに浮かび、レフは投げ出されながらも受け身を取ったが、ごつごつした地面に右膝ひざをぶつけた。
「っ……！」
　バイクは雪煙をあげて横倒しになり、レフは膝ひざを抱えてうずくまる。防寒着の膝部分が破れて血が滲にじんでいる。
「このくらいっ……」
　レフは激しい痛みを堪こらえ、立ち上がる。
「絶対近くにいるんだ……！」
　足を引きずりながら、胴体がへこんでしまったバイクを起こして跨またがる。いざ走り出そうとエンジンをかけたとき、通信が入った。
《──こちらヴィクトール！　バイク部隊は捜索を中止し、基地へ帰還せよ！》
「こちらレフ！　なぜですか！」
《体温の低下を危険と判断した！　捜索は車両部隊によって続ける！》
　納得いかない。イリナを極寒の地に放置して、帰るわけにはいかない。
「俺はこのまま捜します！」
　レフは懲罰覚悟で命令に背いた。
《お前というやつは……！》
　通信越しにでも、ヴィクトール中将が青筋を立てているのがわかる。だがレフは退ひかない。
「ともに戦った同志を見捨てることはできません！」
《貴様──》
《私が許可する！》

いきなりコローヴィンが通信に割り込んできた。
「チーフ!?」
《翼竜ジラントよ、任務をまっとうせよ！》
「はっ！」
レフは威勢よくエンジンを吹かすと、永遠に広がるような荒野をひとり彷徨さまよって走り続ける。しかし、彼女の姿はどこにも見当たらない。
「イリナ！」
いくら叫んでも、返事はない。
寒さで身体からだの感覚がなくなり、意識が朦もう朧ろうとしてくる。
イリナと出会ってからの二か月が走馬灯のように蘇よみがえる。
恐ろしい吸血鬼だと思っていたら、可か愛わいい女の子だったんだよな。最初は噛かみつかれそうで腰が引けたりしたけど、慣れたら全然そんなことなくて。ただ意地を張ってるだけで。
でも、副長官に痛めつけられても、手て錠じようをかけられてもひるまない姿は、凛りんとして格好良かった。
それから何が驚いたって、高所恐怖症だよ。びびって震えて。あのときはどうなることかと思ったけど、すごい頑張ってくれた。そういえば腰が抜けて立てなくなって、手を引っ張って起こしたっけ。本当に軽くて、心配になった。訓練に耐えられるんだろうかって。
炭酸水を飲んだのは、そのあとだったかな。びっくりしてコップ落としちゃって。
「はは……」
あの頃からだな。ひとりの人間として思いはじめたの。
夜間飛行で高空を飛んだり、パラシュート降下をしたり。本当にいつも必死で、負けず嫌いで。泣いてる顔をいつも隠して、強いふりをし

て。
「馬鹿だよ……ほんと」
　命を捨てる覚悟をしてまで、宇宙に行きたかったんだよな。
「だからって、死ぬなよ……」
　血を吸わせた左腕がずきんと痛む。
「イリナ！　返事してくれ！」
　声を嗄からしても、雪原に虚しく響くだけだ。だが、このまま会えずに終わるなんて、絶対に認めない。
「あんな頑張って訓練しただろ？　無事に降りてるんだろ!?」
　雪煙を跳ね上げて激走するレフの視界に、小さな赤色の何かが飛び込んできた。
「ん……？」
　ゴーグルに付着した雪を拭ぬぐって、目を凝らす。白い雪原に、真紅の花が咲いている。
「あれは」
　間違いない。あのとき、ヘルメットに目立つように油性ペンで書いた――
「国名だ！」
　あそこにイリナがいる！
「イリナ！」
　転がるようにバイクを降りる。そこには、雪の積もったパラシュートに覆おおわれるようにイリナが倒れていた。かろうじて頭部だけパラシュートの外に出ており発見できたのだ。
「大丈夫か!?」
　力なく横たわっている彼女を抱え起こし、ヘルメットの前面部を引き開ける。
「……！」

絹糸のように綺き麗れいだった髪の毛は凍りつき、長いまつ毛には氷が付着し、目は閉じられている。右みぎ頬ほほは内出血し、唇は死んでいるかのように色を失っている。
「イリナ！　起きろ！」
大声で呼びかけても、揺すぶっても、反応しない。手袋を外してイリナの頬を触ると、氷のように冷たい。
「なあ！　戻るって言っただろ!?」
レフはポケットから宝石を取り出そうとしたが、手がかじかみ、ぽとりと落としてしまう。
「イリナ……！」
宝石を拾い上げると、イリナの手のひらに載せて、両手で覆おおうように握にぎりしめる。
「これ持って月に行くんだろっ！　なあ！　約束しただろ！　二〇歳の誕生日をいっしょに祝うんだろ！　起きろよ！」
レフは凍える指先をイリナの口に当てる。
「噛かめよ！　好きなだけ吸っていいから！」
無理やり牙きばに押し当てても、イリナはぴくりとも動かない。
「なんでだよ……またスケートしたり、ジャズ聴いたりしようぜ……なあ、イリナ」
レフの目から大粒の涙がこぼれ、イリナの頬ほおに落ちる。
「ひとりで夢を終わらすなよ！」
「……ん」
固く閉じられていたイリナの瞼まぶたがぴくっと震え、ゆっくりと開いた。虚うつろな薄うす紅べにの瞳ひとみがレフを捉える。
レフの心がどきっと跳ねた。
「イリナ!?」
イリナは目覚めきっておらず、ぼんやりとしている。

「……私、帰ってきたの……？」
「ああ！　宇宙から帰ってきたんだよ！」
　凍りついていたイリナの表情がふわっとやわらぐ。
「ほんとに……夢じゃないのね……？」
「夢じゃない。茱グ萸ミの実の浸酒ナストイカ、宇宙からちゃんと届いたぞ」
　照れくさそうにイリナは微ほほ笑えむ。
「よかった……って、なんであなた泣いてるの？」
「う、うっさいな。寒さが目が沁しみるだけだよ。基地に連絡するから待ってろ」
　レフは回線をつなぎ、イリナを発見したことを手短に報告する。コローヴィンは喝采をあげ、すぐに救助隊を送ると言った。
「レフ……血の匂いがするわ……」
　イリナの言葉で、麻ま痺ひしていた怪け我がの痛みが戻ってきた。膝ひざをあげると、雪面が赤く血の色に染まっている。
「それ……」
「たいしたことない」
「意地っ張りね」
「どっちがだよ？　じゃあ、パラシュートを外すぞ」
　膝ひざの激痛を堪こらえながら、レフはイリナの後ろに回ってパラシュートの接続部を解く。作業するあいだ、彼女はじっと黙っていた。
「……よし、外れた」
　レフはパラシュートを手に、イリナの顔を覗のぞきこむ。
「これを被かぶって、連絡があるまで雪や風をしのごう」
　パラシュートを幌ほろにして、ふたりで身を寄せ合う。多少は防げるが、身震いが止まらないほど寒い。膝の痛みは限界を超え、もう一歩も動けそうになかった。

「はぁ……蒸留酒ジーズニが欲しくなるよ。持ってくればよかったな」
　なにかしゃべっていないと寒さと痛みで意識を失いそうだったので、レフはイリナに話しかける。だが震えで歯の根が合わず、うまく話せない。
「宇宙、どうだった……？　月、見えたか？」
　うつむいていたイリナは、顔を上げてレフを見つめた。

「……あのね」
「ん？」
「あなたの声が聞こえたの……。熱くて苦しくて、身体からだが動かなくて、もう死ぬんだって諦めたとき……ヘルメットのこと思い出して……」
　イリナの目から涙がとめどなく溢あふれ、凍った頬ほおを伝う。
「あなたの、イリナって呼ぶ声が……聞こえて……！　パラシュート、ひとりで……ちゃんと降りれたから……！　ひとりで……」
　涙を拭ぬぐおうとしても、ヘルメットと手袋がじゃまでうまく拭えない。
「イリナ……」
　レフが代わりに拭おうと伸ばした手を、イリナは制した。
「泣いてないわよ……雪解けの──あなたのせいで、氷が溶けてるだけ……」
　震えてしゃくりあげながらも強がる姿が愛おしくて、レフはイリナをきつく抱きしめた。
「あっ……」
　一瞬イリナは身体からだを強こわ張ばらせたが、すぐに身をゆだね、レフの胸元に顔をくっつけた。
　ごわごわした宇宙服の向こうに、たしかな命の温かさを感じる。
　戻ってきてくれてよかった。
　今はただ、その気持ちを伝えたかった。
「おかえり、イリナ」

　彼女が成し遂げた偉業は、この先、誰にも知られることはないかもしれない。
　皆から褒ほめたたえられることもなく、歴史に名を残すこともないの

だろう。
　それどころか、過酷な運命にあらがえず、存在すらも闇やみに葬ほうむられるのかもしれない。
　だが、真実は違う。

　彼女こそが、史上初の宇宙飛行士コスモノートだ。

「―ただいま、レフ」

〈了〉

あとがき

今作『月とライカと吸血姫ノスフエラトウ』は、人類が宇宙に到達する前の『宇宙開発競争』を舞台にした話で、一九六〇年前後の史実をベースにしています。モデルとなった人物も多数存在します。

史実にかなり忠実に書いていますが、あくまでもベースですので、作劇上の都合で年齢を下げたり、女性候補生を出したり、技術面や陰謀など変更している箇所は色々あります（なので「事実と違う」という突っ込みはナシでお願いします）。

などなど創作部分も多いですが、当時の某国の秘密主義っぷりは作中のような感じらしいです。「らしい」というのも、資料が少ないどころか当時の頒はん布ぷ物に事実と違うことが書いてあったりして、さすが国家機密……という思いでした。都合が悪いからと、記念写真から削除されてる人もいたし……。

ちなみに、悲劇で有名なライカ犬＝吸血鬼ではありません。ライカ犬は別の名前で出してます。吸血鬼にもモデルがいるのですが、人間ではないということだけ記しておきます。

この話を思いついた発端は「科学未発達のハイファンタジーで、大おお真ま面じ目めにロケットを作る話ってないような？」なんですが、どう頑張っても宇宙へ行けないと判明して却下。構想を練るうちに「洋ゲーみたいな荒廃世界で、教会が太古の宇宙船を隠していて──」みたいな案も出たものの（これはこれで楽しそう）、これまで全然触れられていない時代と国を描こうと思い、この形にしました。

今世紀は宇宙の世紀と言われますし、ＩＳＳでの長期滞在がふつうになっていますが、たった半世紀前は宇宙へ行くことすら奇跡だった──

そんな時代に生きた、宇宙を夢見る若きふたりの物語、楽しんでいただけたなら嬉しいです。

担当の田た端ばた様、いつも的確なご指摘ありがとうございます。ガガガのミステリーハンターとして宇宙の神秘は見逃せない。

かれい様、可か愛わいいイリナから渋しぶい軍人まで素敵なキャラをありがとうございます。カバー案でいただいた、背中合わせに座っているふたりをＰＣの壁紙にしています。

そして、過去から現在まで、宇宙開発に携たずさわるすべての方々には、尊敬と感謝の念に堪たえません。

ここまでお読みいただき、本当にありがとうございました。

レフとイリナの夢が叶うことを願い、このへんで。

牧まき野の圭けい祐すけ

牧野圭祐
Keisuke Makino

ライトノベル以外にもゲームやドラマなど執筆。直近作は『ペルソナ５』のシナリオチーム。本作を書いていてロシア料理に興味。ブリヌイ（クレープ？）食べたい。

小学館ｅＢｏｏｋｓ
月とライカと吸血姫

２０１６年12月28日　電子書籍版発行

者　牧野圭祐

人　立川義剛

人　野村敦司

集　田端聡司

所　株式会社　小学館

〒１０１-８００１

東京都千代田区一ツ橋２-３-１

s-ebook@shogakukan.co.jp

本　２０１６年12月25日　初版第１刷発行

©KEISUKE MAKINO 2016 ISBN978-4-09-451647-0

※ご注意
本作品の全部または一部を無断で複製、転載、改竄、公衆送信すること、および有償無償にかかわらず、本データを第三者に譲渡することを禁じます。
個人利用の目的以外での複製など違法行為、もしくは第三者への譲渡をしますと著作権法、その他関連法によって処罰されます。